この空の下で

kazuha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この空の下で

【Ｎコード】
Ｎ６２５１Ｃ

【作者名】
ｋａｚｕｈａ

【あらすじ】
雷が落ちた時、三つの病院で三組の夫婦が出産を迎えていた。だが一組の夫婦は死産をした。他の二組の同日同時刻に生まれた子供は無事だった。死産をした夫婦は子供が欲しかった。だが死産のせいで、もう妊娠さえできない体になってしまった。子供が欲しい二人は、違う病院で生まれた、同日同時刻に生まれた二人の子供と運命的な出会いをする…

第一章　希望の朝

この空の下で、私達は生まれた。
そして私たちは今までの両親と、家族として血がつながっていると思っていた。
しかし知らない過去によって私たちの記憶は書き換えられていた。
今までこのことに気付かなかったのは、生活が普通の家庭と変っていなかったからだ。
私は千葉にある病院で生まれ、僕は埼玉の病院で生まれた。
そして私の両親は私を捨てて、僕の両親は僕を残してこの世を去った。
私は母を一人失い、僕は二人の母を失った。
「私が嫌いなの？」大地に問いかけても応えてくれない。
「何でいないの？」天に聞いても彼らは応えてくれない。
私達には実の親がいない。
だから養子としてある家族に引き取られたのだ。
彼らも私たちと同じように大事な人がいない。
彼らは人生のどん底にいたのだ。
だから私たちの気持ちは彼らがよく分かってくれ、察してくれた。
そして助けてくれた。
いつも、いつも。
なので、私たちは普通でいられた。
私たちも彼らのことを思った。
そして愛した。
しかし、その愛は突如変わった。
ある事件が起こってからだ。
養子である私たちは互いに支えあった。
その結果、私たちは…。
私たちはこの事実を知るまで大好きなお父さん、お母さんとして

暮らした。
私たちは楽しく生きようと思った。
どんなに辛くても助けてくれる人がいることを分かっていたからだ。
そして、私たちは強くなると、深く心に刻んだ。
彼らのために、私たちのために。

「ウーン、アーッ」
扉の向こうから女のすさまじいうめき声が、この病棟の廊下を響かせた。それと同時に窓を撃つ雨も強くなってきた。外は大雨で、時々雷が鳴り響く。
古葉が来た時にはすでに出産が始まっていて、立会いには間に合わなかった。古葉が来る十五分前に始まったと看護士が教えてくれた。
仕事が終わる直前に病院から携帯電話にかかって、今日出産であることを早急に教えてくれたのだ。出産は結構長引いているようだ。今の古葉には、手を組んで無事生まれるように祈ることしかできなかった。
チッ、チッと時計の針の音が廊下を響かせた。
すると時計の音と共に、脳裏に記憶がよみがえった。

「ただいま」
玄関のドアを開けて、靴を脱いでスリッパに履き替え、狭い廊下を歩く。そして居間に通じるドアを開けた。
「お帰りなさい。あなた、いいニュースがあるんだけど、聞きたい？」
キッチンから出てきて、妻は甘い声で夫に言った。
「えっ、なんかいいことがあったのか。懸賞が当たったとか」
「違うわよ。なんか、私…妊娠したらしいわ」

「何？」
夫はすぐに妻のほうを見て、近づいた。
「このお腹の中にいるのか？」
夫は妻のお腹を見た。そして妻のお腹を円を描くように触った。
そして妻は照れるように言った。
「ええ、そうよ」
妻は照れながらも平常心を保とうとした。
夫はお腹を見通すように見ると、視線を妻の顔に変えた。
「本当か、やったじゃないか。これで一つの命が生まれるのか…」
「違うわ、二つよ」
「えっ…ということは…」
「双子よ」
妻は満面の笑みで言った。
「ああ、本当にいい日だ。やったな…あっ、そうだ。名前、何にしよう。どんな名前がいいかな」
夫はソファーに堂々と座った。しかし妻には、夫が少し涙ぐんでいるのが分かった。
「ふふ、あなたったら」
妻は微笑んだ。そして妻は夫の隣に座った。
「で、妊娠何ヶ月なんだ？」
「ヒ・ミ・ツ」
「何だそれ」
二人の笑い声が居間に響いた。

そんなことを思い出しながら、少し照れて笑ったが、すぐに真面目な顔に戻って長イスに腰かけた。
時間が刻々と過ぎていく。時計は終わりをいつまでも迎えないようであった。雨もいつまでも、いつまでも降り続けるようであった。
その時、遠くからドーンと何か落ちる音がした。その音と共に、叫び声がなくなった。そして古葉は妻の無事だけを祈って、スッと

立ち上がった。
「おい、早くしろ…」
厚い牢獄のような扉の向こうから、そんな声が聞こえた。古葉は不安になり、扉の前をウロウロした。そのため、古葉の履いていたスリッパの音が時計の音に負けずに廊下を響かせた。雨脚もさっきよりいっそう烈しくなっていった。
古葉の顔がだんだん険しくなる。
扉が開いたと思うと、看護婦があわただしい様子で、なにやら見たことがない機材を持って出たり入ったりしていた。
あれから何分経っただろうか。古葉は時々、暗い外をチラッと見た。古葉はひたすら安産のお守りを持って願った。
その時である。再び扉が開いて、まぶしい光が目に飛び込んだ。そしてその扉の向こうから、一人の医師が出てきた。
そして古葉は心配そうに問い出す。
「どうだったのですか。子供は、子供は無事ですか？」
古葉は気が動転していたが、医師は冷静にマスクを取り、古葉の顔を見て言った。
「生まれたことは生まれたのですが、何て言えばいいのでしょうか…残念ですが、生きていません。早産のうえ、十分に成長していなかったためで、死産に…」
古葉はその時、冗談だと思った。まさか自分たちに限ってと、そう思ったのだ。
「えっ、嘘ですよね、冗談ですよね。さっき電話ですぐに産まれます、って聞きました」
医師は鋭い目つきで古葉を見る。
「医者は冗談なんか言いません。しかし、あなたが混乱しないように私から伝えておくように言ったのです。そのことは謝罪します。お気持ちは分かりますが…本当に残念です」
「本当…なのか？」
あれからもう八ヶ月が経っていた。だからもう安心だと思ってい

た。なぜだ。
古葉は聞きたくないように、医師から目をそらして言った。
「じゃあ、なんで私を呼んだんです。別に呼ばなくても…」
「奥さんが来てほしいといったのでお呼びしました」
その時、古葉は足が棒になっているのに気付いた。そしてさっきまで座っていた長イスに、どっと沈んだ。意識が朦朧としている。きっと今の古葉では、さっきまで話していた医師の話が分からないだろう。もしかしたら、小学校で習ったことでさえも分からないかもしれない。
医師はその場でしゃがみ、追い詰められた古葉に励ますように言った。
「残念ですが、あなたの子供は死んだというわけではありません。あなたの子供は確かに生まれたのですが、その小さな体に命が宿らなかっただけなのです。あなたのお子さんはこれから、天国で元気に過ごすと思います。気休めでしかこれぐらいのことを言えないですが、すみません」
古葉はその時、医師を殴りたいという感情に襲われた。その医師の言葉は、古葉を逆上させたに過ぎなかったからだ。子供を育てている者、育てようとしている者ならば、誰でも想像をするだけで分かる悼みを、こんなにやすやすといってしまう医師に対して、お前に何が分かる、と思ったのだ。
しかし古葉には仕事の身体的疲労と待ち時間による精神的疲労によって、体が押さえつけられて、殴りかかることも、立つことさえもできなかった。ただ、背もたれに持たれかかりながらボーッと座って、医師の話を聞いていることしかできなかった。
そして医師が話を続けた。
「ですが、あなたに子供ができる方法が一つだけあります。今、話ができる状態ではないのでやめときますが、明日の午前中に私が２０３号室に行きますので、その時、お話し致します」
そう言うと、医師はもとの手術室に戻っていった。そして先程の

まぶしい白い光が、古葉の目の前からだんだんと細くなって、ついに消えた。
廊下じゅうに、時計の音が響いた。窓を叩いていた雨は弱まった。
古葉はまぶたが、だんだん重くなるのを感じた。そして古葉は時計の音を耳にしながら、深い眠りに落ちた。

「あなた、あなた」
遠くから女の優しい声が、耳に入ってきた。その声はきれいで、良く聞きなれた声であった。そして声は朝食のにおいを持ってきた。
男は寝返った。
「あなた、起きているの」
男は上を向いて、ゆっくりと目を開けた。そこには真っ白な天井が広がって、窓からもまぶしい白い光が目に飛び込んだ。まったく見慣れない部屋だ。そして男がベッドから立ち上がった。勝手に体が動く。
スリッパを履き、部屋を出て、光が行き届いていない暗い階段を降りた。そして見知らないリビングに入った。
そこには、キッチンでキャベツを千切りにしている女性がいた。スリッパのこすれる音で分かったのか、手を止めてこちらを見た。
「あら、起こしに行こうかと思ったのに、早いわね」
その声は先程の声と同じだったが、逆光によって顔は特定できなかった。
「パパー」
かわいらしい子供の声だ。その声の主は誰かと振り向くと、二人の小さな子供がこちらに向かって歩み寄ってきた。
かわいいスズメの声を耳にして、両手を上げて、あくびをしながら体を起こした。その拍子に肩にかかっていた掛け布団が床に落ちた。きっと夜中に看護婦さんが風邪を引くと思って掛けていったのだろう。古葉は落ちた布団を取って、ソファーの上にのせた。

古葉はゆっくりとソファーから立ち、頭とひげを生やした顎を掻いた。
あの夢は何だったのだろうと思いながら、また頭を掻いた。そして頭に刺激されて、昨日の出来事が脳裏によみがえった。
「あれ、手術は…」
昨日のことなどすっかり忘れていた。そして古葉は上を見た。手術中の文字は寂しそうに消えていた。
古葉はソファーに乗った布団を四つ折りにして、上着を肩に担いで、２０３号室へ向かった。
２０３号室まで行くのに何分かかっただろうか。手術室の前から普通に歩けば一分もかからなかっただろう。
古葉は直接２０３号室に向かわず、まずトイレへ向かった。朝一番だったため、電気はついていなかった。自分で電気をつけると、トイレはなかなか清潔感にあふれていて、さすが病院、と言えるほどきれいであった。
用を足して手を洗い、ついでに顔も洗った。ついでといっても、古葉にとっては手を洗う事の方より、顔を洗う方が本来の目的であった。なぜかというと、顔を洗う時に手を使うからである。手を洗って顔も洗う、これすなわち一石二鳥である。それをすることで、朝一番の顔洗いは気持ちいいと感じる瞬間であった。
「ふぅー」
古葉は天井を見上げて、思いっきり首を下ろして、顔の水滴を落とした。しかし、まだ水滴が残っていたので、残りはハンカチで拭いた。トイレを出る時、自分が電気をつけたのを忘れて、何気ない顔でそこを通過した。
次に古葉は待合室へ向かった。待合室のすみに設けられている、冷水気のあるところへ向かうためである。
冷水機のボタンを押して、水を口に含んでうがいを始めた。そしてそっと水を吐いて、また同じことを繰り返す。このことはトイレでやればいいのだが、さすがにトイレの水は口に含みたくない。古

葉はうがいを終えると、今度は水をがぶがぶと飲んだ。水がのどを潤すのが、気持ち良くてたまらなかった。

待合室を離れ、今度こそ２０３号室に向かおうと階段を昇ると、中庭の大きな木が目に入った。それを見ながら廊下を歩くと、中庭の向こう側にある、一階の廊下に設置されている自動販売機に目がついた。古葉はついでに、とよく目に付く所に寄る癖があった。

そして古葉は向きを変えて、もと来た廊下を通り、階段を降りた。しかしあと三段というところで、古葉の目からは涙が溢れ出てきた。自分でも無意識のうちに、自然に目の奥から涙が次々と出てきた。古葉はポケットから、誕生日の日に妻から貰ったハンカチで目を拭いた。その時、古葉は自分に対して心の底から叫んだ。

なんて、なんてオレは馬鹿なんだ。オレは、おれは…オレはこんな大事な時に、何をやっているんだ。大事な人のそばにさえいることができないなんて。

本当は自分の声で叫びたいのだが、それが言えない。涙を拭きとって、残り三段の階段を、ゆっくりと降りた。

そして廊下を歩いて、一分足らずで自販機に着いた。

古葉は自販機に着くなり、深いため息をついた。そして持っていたカバンを開け、財布を取り出した。

「えーっと、どれがいいかな…」

そんなことを言って、自販機をボーッと眺めた。この自販機の飲み物の種類は少なかったが、あまりマイナーな種類の飲み物がなかった。

そして適当に目に付く飲み物のボタンを押した。

今度は中庭に立っている木を見つめて、深く深呼吸をした。その木には青々しい葉が数枚しかなく、枯葉が枝から風に揺られて舞い散ったが、なかなか枝から離れないものまであった。その葉を見て古葉は、もう秋か、早いものだな、とほんわかな気持ちでいた。さっきまで泣いていたのが嘘のように、優しく澄んだ気持ちであった。

そして古葉は、迷わずに２０３号室へ向かった。
部屋の前に着くと、ドアの前で止まった。部屋に入って妻にかける言葉を考えているのだ。しかし古葉は特に思いつく言葉が見つからなかったので、出会い頭に任せた。
部屋に入ると、六つのベッドのうち、カーテンが二枚閉まっていた。その中のうちで奥にある、窓側で左側のベッドが、妻のベッドである。
古葉はゆっくりとベッド間を歩き、奥のベッドの前まで歩いた。そして古葉は一呼吸もせずに、カーテンを開けて入った。
そこには妻の芳江が水色の服を装い、布団をかけて、枕を背に窓の向こうの空を眺めて座っていたが、カーテンの音で古葉に気付いた。
「あら、雄治、起きたのね。風邪を引かないかなーって、心配だったのよ」
雄治はいつも座っている椅子に座って会話を続けた。
「芳江こそ大丈夫なのか」
「まだ後腹っぽいけど、大丈夫よ」
そう言うと、芳江は少し照れくさそうに微笑んだ。
「あっ、そうそう、コレ買ってきたんだ。どっち飲む」
雄治はカバンから、さっき買った飲み物を取り出した。そして芳江はそれを見た途端、嬉しそうな顔で言った。久しぶりに芳江の笑った顔を見た。
「ありがとう…でも、雄治が選んでよ」
「じゃあ、お前に両方とも進呈しよう」
「そう、ありがとう」
芳江はまた微笑み、飲み物を両手で受け取った。
この間に二人は、死産した子供がどうなったかの話題には、絶対に触れなかった。
二人は外を見て、空をぼんやり眺めていた。雄治は何気なく腕時計を見て、ふと思い出したように言った。

「あっ、忘れてた。工場に電話しないと…悪い、芳江、ちょっと公衆電話を探してくる」
その時芳江は、飲み物を飲み終わっていなかった。そして空いているほうの手で、雄治に手を振った。その素振りに、雄治の顔は緩んだ。雄治はカバンを持って、その場を後にした。
２０３号室から出ると、雄治は大きく深呼吸をした。多分、芳江も同じ事をしているだろう。
そして雄治はさっきの自動販売機の横にある休憩室の中に、公衆電話があるのを思い出した。そこで雄治は自動販売機のところまで、さっきと同じ道を通って戻ることにした。
休憩室に着くと、もうすでに八十を過ぎているおじいさんが、長椅子の上にちょこんと座っていた。どうやらテレビを見ているようであったが、目がテレビの上を見ていた。そういえば、どこの部屋にもテレビがないことを思い出した。テレビは待合室と、この休憩室しか設けられていない。
おじいさんは片手につえを、もう片手にはお茶を持っていた。しかしそのお茶はまだ開栓されていなかった。多分、指がタブにかからないからだろう。雄治は気の毒に思いながらも、休憩室の奥にある公衆電話に向かった。
受話器を持って、財布の中からテレフォンカードを取り出して入れる。会社の名刺を取り出し、その名刺に書いてある通りに電話番号を押した。
電話のコールが耳に鳴り響く。
待っている間、雄治は辺りを見回して、その間の時間を費やした。おじいさんはまだ、タブに苦戦している。
電話の向こうから聞き覚えのある声がした。
「はい、長岡製作所ですが、どなたですか」
こんな聞き返し方をするのは同期の加藤しかいない。いまだに電話の対応の仕方が分かっていないようだ。もしこの電話の相手が長さんだったら、すぐにでも斬られるかもしれない。

「あっ、俺だ、古葉なんだけど、今日、休ませてもらうって、長さんに言っておいてもらいたいんだけど、頼める？」
「あ、古葉か、うん、分かった、伝えるよ。で、どうだっ…」
雄治はすぐに受話器を置いた。その後、テレフォンカードをすばやく引き抜いて、名刺とカードを財布にしまい、カバンの中に突っ込んだ。そして雄治は足早に立ち去ろうとしたが、苦戦しているおじいさんに引き止められた。
「ちょっと待ってくれないかのう。この缶ジュースの…フタが開かないのじゃ。開けて欲しいのじゃが、お願いできるかのう」
おじいさんは優しく、明るい声で古葉に言った。
「あ、はい、いいですよ」
雄治は快く引き受けた。そのおかげなのか、おじいさんはやさしく微笑んだ。そしておじいさんの手から雄治へお茶が渡された。
開栓の音を出して、缶は気持ちよく開いた。今度は雄治からおじいさんの手へお茶は渡された。
「ありがとう」
おじいさんはまた微笑みながら、心の奥底からそう言った。
「いいえ、困っている時はお互い様です」
雄治も笑顔を返しながら言った。その後、雄治はその場を足早に立ち去った。

雄治がもとの２０３号室に戻ると、もうすでに八時を回っていた。起きた時間から既に一時間以上が経過しているのだ。雄治は急いでカーテンの内側に入った。
そしてすぐに目に入ったのは、昨日、雄治と話した医師だった。医師は雄治がさっきまで座っていた椅子の隣の椅子に座っていた。そのすぐ側に芳江がさっきと変わらない状況で座っていた。医師が雄治に気付いた。
「あっ、来ましたね」
そう言うと、医師は雄治に座るよう、隣の椅子を見た。

雄治が椅子に腰をかけると、医師は話を始めた。
「古葉さん。昨日の話を覚えていますね」
「…はあ」
雄治は期待できないような声で、ため息と一緒に出た。
「えー、まず…話はそれますが…本当に申し訳ありません」
医師は深々と頭を下げた。芳江は聞いていないような顔で、ボーっと外の雲を見つめていた。しかし、芳江が雄治に強い口調で言った。
「違うわ、私が悪いの。私が早産なんかするから…だけど嬉しかった。雄治があそこまで喜んでくれたんだもの…これは産まなきゃって思ったけど、無理だったわ。私、体だけは昔から弱かったでしょ。いつもより健康に気をつかったけど…」
芳江はチラッとこちらを見る。そして話を続けた。
「けど、耐えられなかった、私には。突然腹痛を感じたら…」
芳江は一つ呼吸をつく。
「私、そのまま破水したの…二人の子供を中に入れたまま。私、二人も殺したの、未熟児の状態で。出産した時は既に生き絶えていたわ。あの時出さなかったら私の方が…死んでいたかもしれないの。どうしても私達の子供が、欲しかっただけなの」
その時、芳江の目から頬へ、白い一筋の光が走った。
「ごめんなさい…本当にごめんなさい。こんなんじゃ、天国の子供達に顔を合わせられないよね」
雄治は唖然としたまま、じっとその話を聞いていた。医師は首の後ろを掻く。
しばらく病室内に沈黙が流れたが、その均衡を雄治が破った。
「…どういえばいいんだか分からないが、このことは誰も悪くないと思うけど…ただ運が悪かっただけじゃないのか。ただ、オレたちの子供がこの世に早く生まれたかったから、お腹の中で暴れたんじゃないか…こんなのやっぱ、気休めだな」
芳江はまた潤み始め、少し微笑んだ。そして雄治は続ける。

「まあ、終わったことはしょうがないが…もとに戻れるわけでもないし。また挑戦すればいいじゃないか」
芳江は雄治の言葉を聞いて泣くのをやめた。自分の思いが吹っ切れて、少し元気付けられたようだ。しかしそれに代わって、医師は険しい顔で言った。
「残念ですが…奥さんは今回の出産で、妊娠、ともに出産ができない体になってしまいました」
「えっ」
雄治はびっくりした。芳江もこのことは知らなかったようなのでびっくりしていた。
「なぜですか、何でそんなことになったのですか」
雄治は興奮したように言ったが、医師には冷静さがあった。
「えー、実はですね…お子さんが出てきたとき、妊娠する際に必要な中枢器官がやられまして、なので…」
「つまりもう子供は…オレたちの子供はできないということ何ですか」
雄治は医師を問い詰めた。答えは聞きたくなかったが、真実は知りたい。これからの人生に、子供がいないなんて、考えられない。
すると医師は深刻な表情をして二人に告げた。
「…はい、そうです。奥さんは、もう二度と妊娠することはないでしょう」
医師は言い終わると、さらに表情が険しくなった。もう誰とも目を合わせようとはしない。芳江は魂が抜けたように、強くベッドにのしかかった。雄治はというと、石像のように硬直して、ぴくりとも動かなかった。二人は黙った。芳江の目からは、丸く太陽に照らされ光っているパチンコ玉のような、大粒の涙が溢れ出た。そのしずくは頬をつたって、芳江の手に滴り落ちた。
そしてその間、長い沈黙の均衡に閉ざされていた。時間はゆっくりと流れているように感じられた。
しかし医師が思いもよらないことを言った。

「しかし、一つだけですけれども、子供ができる…いや、育てられる方法があります」
雄治と芳江は顔を上げた。
「すみませんが…」
二人は同時に言った。そして雄治が質問を続けた。
「すみませんが、方法とはどういった方法なのでしょうか」
雄治は恐る恐る小声で聞いた。そして医師はゆっくりと口を開いた。
「それは養子を貰うことです」
「養子？」
雄治は大体予想をしていたが、そのとおりになったので驚嘆した。
「養子ですか」
芳江は眉間にしわを寄せて、口をぽかんと開けている。
「はい、そうです。私の知り合いに、孤児院で働いている鎌塚という人がいるのですが、ちょうど昨日生まれた子供がいるらしいのです。その子の両親はもう他界していて…どうでしょう？」
医師は馬鹿に冷静に話した。この場に及んで、雄治の答えは一つしかなかった。
「ぜひ、お受けします」
雄治はつい大きな声を出してしまった。そしてそのとき、カーテンの外から、シーッと言う声が聞こえた。雄治は頬を赤らめた。
そして芳江は反論でもあるような顔をして、強く言った。
「ちょっとあなた…いくらなんでも、検討もしないで返事を返すのは…」
芳江が言い終わらないうちに雄治が言う。
「そんなこと言ってもしょうがないだろ、お前はもう…悪い、口が滑った」
芳江の目が鋭くなり、雄治を見た。
「そうね、なら、それでいいんじゃない」
芳江は冷たい視線でツーンと人を突き放したように言った。雄治

から外へと、目を向けた。雄治は悪いと同じ言葉を繰り返し言ったが、芳江の表情は変わらなかった。
そして今度は医師が困ったような顔をして、二人に言った。
「どうしますか」
二人にとってこれが最後の選択肢だった。どうしても自分の子供がほしい。どうしても自分たちの手で子供を育てたい。たとえ、本当の自分の子供でなくても。そんな気持ちが二人を一つにした。そして二人は声を合わせて、同じことを言った。「はい、お願いします」　医師はきょとんとした顔で二人を見た。さっきまで喧嘩をしていたはずなのに、息はぴったりだったことに驚いたからだ。
雄治と芳江は顔を見合わせて微笑んだ。しかしその中で、医師は二人に強く、そしてくどく忠告をした。
「しかし、これは単なる遊びではありませんよ。命のやり取りですから…本当にいいのですね」
「お願いします」
今度は雄治だけが言う。
そして医師は一回咳払いをして開き直ったように言った。「分かりました。では、紹介状を書きますので九時半ごろにロビーで待っていてください。その時お渡ししますので」　医師は立ち、頭を下げた。「では、これで」　そう言うと、医師はカーテンの向こうへと消えていった。「で、どうするの、本当に…今のうちなら、取り返しがつくわよ」　芳江は不安そうに言った。だが、雄治は自分の気持ちを、そっくりそのまま芳江に言った。「俺だってそんなに簡単な気持ちで子育てなんてするつもりなんかない。ただ、自分の子供が幸せになるのを見たいだけなんだ。お前も同意してくれたじゃないか。この気持ちがあってからこそじゃないのか」
その時また大声を出したにも関わらず、カーテンの外からは何も聞こえなかった。
そして芳江は納得したように一息ついた。
「まあ、そうだけど…」

芳江は手で口をふさぎ、少し思いつめたように少しうなった。そしてすぐに頭を起こした。　「…分かったわ。あなたなら、信じられる。でも、これだけは約束してちょうだい。絶対に、子供を正しい道へ導くって、そして必ず幸せにするって、ね」

芳江は頭を傾けて、甘ったるい口調で言った。　「ああ、分かっているさ。絶対に俺達の子供を幸せにして見せる。もちろんお前も、な」　雄治は芳江の手を握った。芳江は雄治の目を見つめた。もちろん雄治も芳江の目を見つめている。そして二人は目をつむり、顔を近づけた。　その時、カーテンの外でこんなことを耳にした。

「いいわねえ、やっぱり若いって」　「そうよねぇ、うらやましいわ。うちの旦那も見習って欲しいぐらいだわ」　それは近隣に住む、峰倉さんを見舞いにきていたおばさん達の声だった。

そしておばさん達は一斉にねぇーと声を合わせた。雄治ははちきれそうに恥ずかしくなった。そして耳がかっと熱くなるのが分かった。芳江も同じように赤くなっていた。二人は手を離し、しばらく頬の熱がひくのを待った。　二人を察したのか、峰倉さんがおばさん達の会話を止めた。そしておばさん達は納得したかのように、峰倉さんに笑って言った。　「じゃ、お大事に。早く元気になってね」　おばさん達は静かに通路を歩いて退室した。　今、この部屋にいるのは、雄治と芳江と峰倉さんだけだ。

静かにゆっくりと時間が流れていく。その間、病室には、病院独特の薬品のにおいが、その空間を漂った。　しばらくすると、耳に時計の音が入ってきたので、雄治はふと時計を見た。すると、既に九時十分前だった。ボーっとしている時間が非常に長かったのだ。　「あっ、もうこんな時間。そろそろロビーに行かなくちゃ。じゃ、俺、行くから」　そう言って、カバンをすばやく持ち、カーテンを途中まで開けた。すると芳江が強い口調で雄治を引き止めた。　「ねぇ、ちょっと待って」　雄治が振り向くと、芳江が不安そうな顔をしていた。　「本当にこれでいいんだよね、きっと」

芳江が静かにも、悲しい声で言った。　「いいもダメもあるわ

けないだろ。オレがお前を幸せにする。もちろん、オレたちの子供も。約束しよう」　　そう言うと、雄治は芳江の隣まで行き、親指と小指を立てて右手を差し出した。それを見た芳江に微笑みが戻った。　「約束、ね」　　そう言って芳江も親指と小指を立てた左手を差し出した。そして二人は、折り曲げた指同士をコツンと乾杯するように当てた。その拍子に親指と親指、小指と小指同士が触れ合った。その時、何かを感じた。まるでこれからのことを予言しているかのように。　「これで成立だな。じゃあ行ってくるから」　「うん」　　そう言って雄治はカーテンの向こうへと消え去った。

　カーテンを抜けると、左斜め前のベッドに峰倉さんが寝ていた。二人は目が合うと、軽く会釈をした。そして真っ白な廊下を歩き、ドアを引いて廊下に出た。ドアは勝手に戻っていき、ゆっくりと閉まった。　　外は病室内に比べて明るく、木の葉は風に揺られてざわざわと語り合っていた。とても気持ち良さそうに日光を浴びて、その上心地よい風に吹かれるなんて、そんな贅沢を木の葉達は味わっていた。　　雄治はその光景をボーっと見つめながら深く息を吸い込み、ゆっくりとその空気を吐き出した。　　その時、雄治は突然自分について思った。何のために生まれてきたのか、なんでオレ達だけこんな悲惨な事態を体験せねばならないのか、と。

　雄治は自分の思いから抜け出すと、ロビーに向かって歩き出した。ロビーに向かう一歩一歩が重くなってきた。そのため、階段を降りる時はかなりの重労働だった。　　ロビーに着くと、時計はすでに九時をまわっていた。心の中で、あと二十分と唱えながら、誰も座っていない長イスに腰をかけた。ロビーには三人いるだけで、がらんとしている。その三人は前の方の長イスに座っていた。その中には、先ほど休憩室にいた老人もいた。　　老人は雄治に気付いたのか、後ろを見て、軽く微笑んでから軽く頭を下げた。と同時に雄治も頭を下げた。　　そして雄治はテレビの方に視線をやり、やがて玄関の近くに置いてあるスタンドに目をやった。そこには新聞がスタンドに洗濯物のように吊るされている。　　雄治はゆっくり立ち、

スタンドに足を向けた。そして今日の新聞を手に取って、その場で一面だけを読んだ。しかし、新聞というものはなんとなく開いてしまうものだ。そして二面、三面と見た。そこには中小企業に多大な影響を及ぼしていた、ベンチャー企業の倒産の話題が載っていた。しかしその他には、相変わらずくだらない内容が書かれていた。

雄治は新聞紙をスタンドに戻し、再び長イスに戻った。　腰を下ろすと、雄治はなんとなく受付に目を向けた。そこには忙しそうに働いている看護士がいた。彼女は電話の対応をやっているらしく、ここからは見えないが何かの資料を見ながら対応をしていた。雄治は大変そうだなと思った。　今度は朝に使った冷水機に目を向けた。朝には気付かなかったが、冷水機はガ―という音をこの待合室中に鳴り響かせた。その音はテレビの音を掻き消すまではいかないが、自動販売機と同じくらいうるさかった。　そしてその冷水機に一人の男性患者が歩み寄り、ボタンとペダルを同時に押して、ゆっくりと水を飲んだ。雄治はその姿を見届けるとまた視線を変えた。

今度はどこを見ようと、辺りをきょろきょろ見ると、奥の廊下から、医師がひとつの封筒を持ってこちらに歩いてきた。　そのとき雄治は時計を見た。するとすでに九時半の三分前だった。雄治は襟元を正し、姿勢を良くした。まるで小学生の正しい座り方のように。　「ああ、そこですか」　そう言うと医師は雄治のほうに歩み寄った。そのとき皆の視線を一瞬だけ感じた。　「では、これがそのものなので、頑張ってくださいね」　何を頑張ればいいんだ、と思いながらも、雄治は封筒と地図を受け取った。　「ありがとうございます。でも本当にこれでいいのでしょうか」　医師はまじめな顔で雄治を見つめた。そして雄治は続けた。

「このまま私達の思い出っていうか、子供のことについて、心の中に閉じ込めたままの方がいいのではないでしょうか」　そう言うと雄治は暗い顔をしたが、医師は優しく微笑みかけた。　「古葉さん、あなたが決めたことでしょう。ここまできたら、人に相談するのではなく、自分で決めなさい。その判断が正しかったかは未来に

聞きなさい」　医師は振り返った。そのとき医師が着ていた白衣が非常に輝いているように見えた。そして医師はもと来た廊下を歩き、一番奥の部屋に入っていった。　雄治は決心したように顔を上げて、外の方を見た。外は太陽の光で、葉がダイヤモンドが輝いているように見えた。葉に滴る水さえも透けてるような感じであった。　雄治はゆっくり立つと、地図はポケットにしまい、封筒を片手に玄関の方に向かって、ゆっくり歩いた。その際、足を引きずって歩いたため、スリッパと床に摩擦が起こって、シュッ、シュッと音を立てた。　スリッパから靴に履き替え、雄治は勢いよく病院から出た。

第二章　孤児院

秋が過ぎようとする中で、外はすでに白い息が出る。　雄治がいる駐車場は、車が三台固まってポツリと止まっている。多分、この病院のものであろう。　雄治は封筒と地図を持ち直すと、駐車場の出口へ向かって歩き出した。　そこまで行くまで、辺りを見回しながら歩いていると、駐車場を囲むようにして木が立っているのに気がついた。その木々には紅葉がかろうじて残っていた。しかし風が吹くと、残った葉の色が太陽によって鮮やかに見えた。そして空を明るくした。　雄治は車の免許を持っているが、車を持っていない。しかもバスや電車はお金がかかるからいつも乗らない。だから目的地までは常に歩きか自転車で行く。しかしバスから行くとしても、この病院から徒歩三十分くらいのところに停車場があり、駅まではなんと一時間半もかかるのだ。　出口に近づくにつれて、だんだん雄治の目に光が入り込んできた。　駐車場の出口に着くと、一度後ろを振り返った。そして芳江のいる病室の窓を見た。その窓を見ると、芳江がこっちを見て、微笑みながら手を振っているように見えた。　昨日の雨でぬれた道は、太陽に照らされて、きらきらと輝いていた。まるで宝石が敷き詰められたじゅうたんのようだ。　ふと天を仰ぐと、空には太陽が高いところまで昇っていた。その太陽は眩しく、雲を照らしていた。また、雲は太陽を避けるように風に揺られて動いた。　それを見た雄治は、気分をよくした。この世には自分がいる、そう確信したのだ。当たり前のことなのだが、やっと今の自分が何をすべきなのかが分かったような気がした。重かった足取りも軽くなったような気がする。足取りが軽いまま、雄治は大きく一歩を踏み出した。　病院の敷地内から一歩を踏み出すと、まるで別世界のようであった。

雄治はポケットから地図を取り出して目的地を探そうとしたが、その手間は省けた。なんとその地図は目的地を中心とした地図で、

しかも目的地には親切に赤いペンで囲ってあり、病院は青く囲ってあったからだ。　「何だ…孤児…院？こんなのあったっけ」　それは目的地への場所であった。しかしその場所は今までに行ったこともないところであったので、少し不安だった。

いきなり雄治は思い立ったように辺りを見回した。電話したほうがいいかな。そう思ったのだ。

雄治は近くにある公衆電話を見つけ、中へ駆け込んだ。

しかし駆け込んだまではよかったが、電話番号が分からない。あたふたとしているとき、ふと地図の裏を見た。そこには赤い字で電話番号が書かれてあった。そして電話番号を不器用な手つきで次々と押されていった。

電話のコールが長々と鳴り響いた。

「もしもし」

電話の向こうから快活な女性の声が聞こえる。雄治はすぐさま返事をした。

「もしもし、私は古葉というものですが、そちらは孤児院の職…」

「ああ、話は聞いていますよ。あなたも色々と大変ですね」

「はぁ」

少し沈んできた。医師のイメージが段々崩れてきた。

「別に今日でなくても、後日でも構いませんでしたのに」

「いや、一度顔を合わせたほうがいいかなーなんて…ははは」

「あっ、そうでしたの。でも宮内さんから電話がきましたから。知っていましたか？」

「いえ、知りませんでした」

知らないことが二つ重なった。古葉は続ける。

「それでも構いません。今からそちらに行っても構いませんか？」

「ええ、構いませんが…」

「あっ、じゃあ宜しくお願いします」

「ああ、はい分かりました」

「ところで、お名前は？」

「あっ、すいません、申し遅れました、私、庄野と申します」
庄野…昔、どこかで聞いたことがある名前だ。雄治の脳裏には、昔懐かしい画像がよぎった。
「庄野さんですか、分かりました。ありがとうございます。また後ほど」
「では、後ほど」
そして電話を切った。少し強情過ぎたかな、と古葉は反省した。少々後悔しながらも、雄治は早速病院から孤児院への道順を調べた。その場所は国道沿いのコンビニの近くであった。　雄治の住んでいるアパートの全く逆に位置していて、少し不安になった。しかしその反面、雄治にとってはこの町の反対に行くことはなかったので、今まで見たことのない風景がどんな風景なのかを楽しみにしていた。
そしてどこまでも続きそうな道を、大きく一歩を踏み出した。

車が脇を走っていく。そのスピードは明らかに制限速度を破られているのが分かる。
左には田んぼ、右には大きな通りがある。それをはさんだ向こう側は小さな店舗や昔を思い出すような家が立ち並んでいる。
この辺りまでは自転車で来たことがある。芳江に使いを言い渡されたときを思い出した。
しかし、あのT路より先は行ったことがない。
どんな世界が待ち受けているのかと思うだけで、雄治は心を躍らせた。

しばらく歩くと、土手を挟んで、勢いのいい川が流れていた。この川は多分、利根川だろう。
この推測は自信があった。地図を取り出し、この辺りを探した。川の名前が分かったとき、思わずにやっとした。
田んぼ道を抜けると、建物が多くなってきた。すると同時に先程より車も多くなってきた。道も細くなってきて、より一層危なくな

った。
そして雄治はこの場所でもう一度地図を見た。
「ええと…ああ、あそこか」
雄治は地図を照らし合わせて、前方の左側の橋を見た。その橋は地図と一致する。
雄治は橋の近くまで辺りの景色を楽しみながら歩いた。風は川と流れていく。そして風は雄治を川の中へ誘い込むように吹いた。
橋を渡っていると、橋を駆け抜ける風は意外と強く、足をふらつかせた。時々前方の小山から、こちらに向かって枯葉が散ると、すぐに風に飲みこまれて、優雅に空へ舞っていった。そして光へと吸い込まれた。二匹の小さい鳥が、その後を追っていった。そして前方の小山を見ると、太陽に照らされた葉がきれいに七色に光っているように見えた。風が笑うと、木も笑うように返事をする。
対岸に来ると、ついに来たことがない土地に足を踏み入れた。そのとき、何かが背中を押したような気がした。

太陽がもうあんな高い所にある。
その時、雄治はコンクリートで固められた崖の脇を歩いていた。コンクリートの崖を見て少し不安になった。そして崖を見まいと今度は車道のほうを見ると、さらに不安は大きくなった。そこには血を流さない猫が横たわっていた。そして車はその猫をまたいで急カーブをものすごいスピードで曲がっていった。
それを見た雄治は思わず息を飲んだ。
そしてその歩道を足早に歩くのであった。ただ、早くその場を離れるように努めるだけであった。

この辺の家は百メートル間隔に離れて建っている。もしかしたら二百メートル以上は離れているかもしれない。いかにも田舎道を漂わせる畑や建物の少なさがその証拠だ。時々コンビニがあると思ったら、その先には何もない。その前に学校とコンビニがあるだけだ

った。雄治はそんな道をのんびりと歩いていた。そしてその先は何もない。このまま延々と続きそうであった。　交差点を渡り、さらに道に沿って直進する。

そして全く人通りがなく、車も通らない場所に来てしまった。心配になった雄治は、また地図を取り出した。

ああ、あの道を左に曲がるのか。そう思うと、雄治は地図と対比させて、前方の左にある道を見た。歩くのにそれほど遠くない道であった。

その道の前まで来ると、その道は意外と急な道で、登るのに苦労しそうだった。両サイドには青々とした植物が立っていた。その間には青い空が細長く広がっていて、その先には池のように丸く広がっている。そこに二羽の鳥が戯れ、泳いでいた。そしてそこには、なぜか懐かしい匂いが漂った。太陽も雲に笑いかける。歩くのが楽しくなってきた。

しかしいざ歩くというと、やはり一歩一歩が重かった。その短い距離でも、十分に足に応える。登山でもするような足運びであった。

そしてやっとのことで、ひらけた所に出ることができた。そこには一人の女性が箒で落ち葉を掃いていた。彼女が庄野であろうか。

「すみません、先程電話した古葉と申しますが、あなたが庄野さんでしょうか」

女性はこちらに気付いてこちらを見た。若々しい顔つきで、まだ二十代だと思われる。その体には、黄色いエプロンを身にまとっていた。

「はい、そうですが…」

彼女は少し不思議そうにこちらを見た。

「失礼ですが、どこかお会いしたような気がするのですが…」

そういえばどこか遠い昔にあった憶えがある。誰であろうか。庄野ははっとしたような顔をした。そして興奮するように質問をした。

「もしかして、雄治くん？」

どこかで聞いたことがある発音、響き、そして優しさ。しみじみ

と耳にしみる。そして雄治は思い出した。
「もしかして庄野…葵さん？」
「はい」
彼女は笑ってそう言った。彼女は小学生以来の旧友である。
「久しぶりだね、何年振りだろう」
「ああ、そうだな。本当に…懐かしいな」
「ふふ、すっかりおじさんになったね…会えて嬉しいよ」
彼女はほころんだ。
「俺もだよ…」
二人はしばらく沈黙した。そして雄治が葵に話しかけた。
「で、何してるの…こんなところで」
葵はびっくりした表情をした。
「そこから入る、普通。相変わらず、話すのだけは苦手みたいだね」
そう言うと、突然笑い出した。少し恥ずかしくなった雄治は、別の話題を探したが、見つかるはずがなかった。そして葵が切り出した。
「何してるって、ここで仕事」
「えっ、ここで。ずいぶん昔と変わったな。昔は『私は看護婦になるんだ』とか言ってたのにな」
今度は雄治がからかった。
「そんなこと無いわよ。人の面倒を見る面では一緒だもん」
葵は頬を膨らませた。すると、一人の女の子が玄関から出てきて、葵に走り寄った。
「せんせい、まことのやつ、また、やっちゃったよ」
息を荒くしながら、途切れ途切れに言う姿がかわいい。そしてこちらを見ると、葵のエプロンにしがみついて言う。
「せんせい、このひとだーれー？」
「この人は私の友達よ。さ、中に入ってなさい、すぐに行くから」
女の子は家の中へ走っていって、わぁーと叫ぶ。そして葵と雄治はその姿を見届け、葵はこちらを見る。

「ところで雄治君、何か用？」
話を忘れてしまったのか、うきうきしたように聞いた。そして気づいたように、はっとしたような顔をした。
「ゴメン…さぁ、入って」
葵はひどく落ち込んだように、とぼとぼと玄関に向かった。そしてその後に雄治が続く。しかし、雄治は葵の近くに歩み寄り、肩をポンとたたく。
「ま、気にするな」
葵の顔が風に軽く揺られた。

暗い板張りの廊下を歩くと、ひとつの交差点にぶつかる。葵が先行して歩くと、二人の男の子と、さっきの女の子が目の前を横切った。どうやら追いかけっこをしているようだ。そして走っている二人に気づいた葵が注意する。しかし子供たちは笑いながら注意を聞き流す。やれやれ、とした顔をして葵の顔はやつれた。そして葵は再び歩を進めると、その後を雄治が追う。縁側を通り、ひとつの部屋に通された。
「雄治君、ここで待ってて」
そう言い残して、すぐに来た道を戻った。多分さっきの女の子が言っていた、まこと君のことだろう。
雄治は辺りを見回す。基本的な六畳間の和室である。しかし障子は穴が開いていたり、破かれたりと、悲惨なことになっていた。左には立派な掛け軸が掛かってあり、雄治はそれを見ながら座布団の上であぐらにして、手を机の上に置く。
「はぁ」
一段落したように息を吐く。突然に外から視線を感じた。障子のほうを見ると、穴から目玉がこちらを覗いていた。そして目が合うと、目玉はすぐに消えて、変わりにどたどたと足音だけが残った。
また部屋の観察をする。壁がはげていて、柱がぼろぼろだ。そして天井はというと、何もなかった。

そしてしばらく天井をぼんやり見つめていると、障子が開いた。
「何か飲む？」
それは葵だった。
「ああ、ありがと。何でもいいよ」
葵はまたもとの道を引き返した。すると玄関のほうから音がした。
「ただいま」
その声に反応した子供たちがその声に集まった。
「お帰りなさい、院長先生」
「いい子にしていたかな」
そう言うと、歩みは台所に向かう。どうやら食料を買ってきたらしい。そして葵が話しかけた。すると足音はすぐにこちらに向かって近づいてきた。雄治の心臓は、ずんずんと高鳴り始めた。そして座りなおす。足は障子の前で止まった。
「失礼します」
優しく、柔らかい、女性の声が耳に入った。その女性はなんというのか、よくいる世話好きの人に見えた。そしてなんといっても、どことなく芳江に似ていた。
「あなたが古葉さんね。私はここの院長の鎌塚です。宜しく願いします」
鎌塚は軽くお辞儀をした。雄治は彼女のほうに体を向けた。
「こちらこそ、お願いします」
雄治も軽くお辞儀をする。彼女は雄治の逆に座る。雄治ははっと気付いて、すぐに紹介状を差し出した。
「これが紹介状です」
「ああ、分かりました。確かに受け取りました」
彼女は微笑みながら封筒を受け取る。そして一枚の四つ折りされた紙を広げ、黙読し始めた。しばらくしないうちに、彼女はこちらを見た。
「分かりました。なるべく、ご希望通りに添えさせていただきます。昨日生まれたお子さんなので、こちらに来るのが…来週だと思いま

すので、こちらから連絡を…」
その時、縁側から声がした。
「失礼します」
葵が障子を開けて入ってきた。そして二人の前にお茶を置いた。白い湯気が煙のように立ち上る。
「失礼しました」
葵が出て行くと、鎌塚が胸からボールペンとメモを取って、住所、電話番号を書いた。そしてその紙とともに、一枚のメモ用紙とボールペンも一緒に渡した。
「そこに電話番号を書いてください、もし不都合でなければ住所もお願いします」
雄治は言われるとことを、すべて書いた。そしてその紙を鎌塚に渡すと、鎌塚はすぐに目を走らせた。
「はい、結構です。ありがとうございました」
鎌塚は軽く頭を下げた。それにつられて雄治も下げる。そして鎌塚が立とうとしたとき、ひとつのことを思いついた。
「あの、いくつか質問をいいですか」
「あ、はい、構いませんよ」
鎌塚は快く受け入れてくれたので、少し安心した。彼女はまた座って、話を聞く準備をした。
「で、質問とは」
「それはその養子についての家族関係です。普通だったら親戚に引き取られるのが普通じゃないですか」
鎌塚は少し考え込んだがすぐに顔を上げた。
「分かりました、お教えしましょう。私も朝に言われたことなので、あまり詳しくはないですが…」
鎌塚は座り直した。
「実はその子は、今、両親がいません。なぜなら…死んだからです、昨日と今日に。父親は病院に向かう途中にトラックにはねられました。運転手の話によると、豪雨の中、傘を差していたその男性がま

ったく見えなかったみたいで…相当視界が悪かったみたいで、赤信号にもかかわらず渡っていたそうです。多分、ほぼ目をつむっていた状態だったのでしょう。その上、雨音も凄かったみたいで、トラックが走ってくる音に気付かなかったのでしょう」

雄治は口を押さえたが、そんな雄治をよそに、鎌塚は話を続ける。

「母親の方は、もともと、ガンを携わっていたので…子供を産んだ五時間後に死んでしまったそうです。いつ死んでもおかしくない状態でしたのに、よく頑張りましたよね」

雄治の目からは、少しばかり、涙が溢れ出してきた。その場面を頭の中で鮮明に描いてしまったからだ。

「このその二人は一人っ子で、父親母親の親、一人ずつに先立たれ、兄弟もその死んだ方の方が一人いただけで、その人も今は…この世にはいません。その上その人達も年金暮らしなので、これ以上の負担がかけられないので…その上遠い親戚も今どこにいるかは不明で…だからあなたにお願いしたのです…これが私の知っているすべてです」

鎌塚は一口お茶を飲む。

しばらく時間が止まっているように、沈黙が漂った。

雄治の頭に色々な思いが駆け巡った。どんな思いで子供を産んだのか、その子供を引き取って、どのように育てればいいか。それ以前に、本当に自分なんかがその子供を育てていいのか、などなど。

考え込んでいるうちに、不意に障子が開いた。

「あの、お茶のお替わりはいかがでしょうか」

それは葵だった。

それを機に思った鎌塚は立ち上がった。

「では、古葉さん、後ほど連絡致しますので。また、後ほど」

鎌塚は明るく言った。そして障子を開け、葵の脇を通って、そのまま何も言わずに行ってしまった。

そして葵は、膝から下を地につけたまま雄治のもとへ手で自分を

手繰り寄せた。
「雄治くん、どうだった」
その葵の声は心配そうであった。
「うん、大丈夫だよ」
雄治はなるべく明るく言おうとしたが、彼女は分かったのか、そう、と言って目をそらした。何故分かったのだろうか。後で気付いたのだが、雄治の頬には一筋の涙を流した痕があった。

「雄治くん、これからどうするの」
葵がお茶を片付けながら言った。
「そろそろ帰ろうかなって思ってる」
雄治はぼんやりしながら答える。
「あ、そう」
葵の声は悲しかった。そして葵は立って、障子を開けた。それに続いて雄治も立って、外に出た。
外はまだ明るかった。木の葉では、風の波が押し寄せて、ザーとざわめいた。
廊下を一列になって歩いていると、前方に一つのドアが見えた。
「葵さん、あそこって、トイレ？」
葵は振り向かずに、歩きながら言った。
「うん、そうよ」
「じゃ、借りるよ」
「どうぞ」
葵は角を曲がり、雄治はトイレのドアを開けた。

「じゃあ、元気でね。芳江に宜しく」
「いつからそんな間柄になったんだよ」
葵は玄関まで送ると言っていたが、結局、庭までついてきた。
二人は庭を横切りながら、世間話をした。最近の社会情勢や昔のこととか。しかしいつの間にか、庭を何回も往復していて、空は夕

焼けに赤く染められていた。
「じゃあね、雄治くん」
帰りの一本道まで来ると、葵は悲しそうに言う。
「じゃあね、今日は色々とありがとう」
「えっ、いいよ、そんなの。私は私なりにやったんだから」
「そうだよな、これはお前の仕事だもんな」
「そうだよ。私だってここで社会的に貢献しているんだから」
「ははは」
雄治が笑った時、葵は微笑む。そして雄治は一度天を仰ぎ、葵に向き直った。
「じゃあ、改めて、またな」
その言葉を言ったとき、葵はまた同じ表情を見せた。
「うん…じゃあね、雄治…また…」
「ん？」
「何でもないよ、じゃあね」
葵の頬は、空に染められていた。何故だか知らないが、葵の心には雄治に対する不思議な親近感が生まれていた。
細い道を歩き、時々後ろを振り返ると、葵が元気よく手を振る。その姿を見るなり、雄治はすぐに前を向く。冷たい風が頬に当たると、風は砕けた。そして風の勢いは、段々と増してきた。
まるで風は、雄治を帰らせないようであった。

第三章　出会いと決別

もと来た道を戻り、風が強い利根川にかかる橋まで来た。
雄治は風に押されながらも、一歩一歩進んだ。風は嘲り笑うように雄治に向かって吹きぬける。心はさらにブルーになった。
先程のことで、少し不幸の事故の話がどうしても頭から離れない。あの時、聞きたいと言ったのが間違いだったのだろうか。
そしていきなり突風が吹くと、橋の上にある一枚の落ち葉を連れ去った。
その時であった。どこからともなく、小さな泣き声が聞こえた。雄治は橋の上から辺りを見回した。が、何もなかった。
ついに疲れがピークかなと思った。そして雄治はさらに歩く。
少し歩くと、再び泣き声が風に乗って、耳元まで来た。また同じように辺りを見たが、何もなかった。今度は耳を澄ませて声が聞こえるのを待った。耳の中に冷たい風が流れ込む。その中には、確かに子供の泣き声があった。そしてその声は、橋の下から聞こえるのが分かった。
雄治は急いで橋を渡り、土手を降りた。川付近の風は、上と比べ物にならないほど冷たかった。辺りを見回してみると、柱付近に一つのダンボールがあった。
雄治はダンボールの近くまで歩み寄り、ダンボールの中を覗いた。
雄治は唖然とした。
そこには顔を真っ赤にしている小さな乳児が、大きな声で泣いていた。
雄治はどうしようもないような顔をして、辺りを見回した。そしてまた段ボール箱の中の乳児を見る。するとさっきは気付かなかったが、乳児の横には手紙が置いてあった。
そこにはこんなことが書かれていた。

深雪をお願いします。

松林　清治・望

「はぁ？」

思わず声を出した。そしてわなわなと怒りが込みあがってきた。

手紙をたたんでポケットにしまった。腰を下ろし、乳児を抱く。すると乳児が少し微笑んだように見えた。何だろう、この気持ち。今まで味わったことのない、いや、遠い昔に一度だけ味わったことがある、あのときの気持ち。何だか懐かしい。

遠い過去に浸りながら、その味わいを楽しんでいるとき、後方でガサッと音がした。雄治が振り向くと、ススキが揺られていた。

赤ちゃんを見直し、額に手を当ててなでようとした。すると、乳児の額は異常に熱かった。時々、乳児は泣きながら小さく咳をした。雄治は風邪だ、と判断した。

そして気付いた時は、乳児を抱いて走り始めていた。土手を駆け上がり、道路を一生懸命に走った。風が妨害するが、風を切るように全速力で走った。

息が切れてきた。病院はあの丘の上にある。もう少しだ、雄治はそう自分に言い聞かせる。

その時、雄治は気付いた。いつの間にか、風が後押ししてくれていたことを。

病院に駆け込み、すぐに受付を済ませ、待合室にある長イスに座った。

雄治は乳児の顔色を覗き込む。すると、乳児は、先程より弱っているように見えた。

しばらくすると額から一滴の汗が流れた。そのとき、体が一瞬にして凍るような思いがした。その汗をハンカチで拭おうとした時、乳児の顔が見えた。今は泣いてはいないが、ひどく汗をかいていて顔が真っ赤だ。雄治は持っていたハンカチで急いで拭いた。そして時計を見ると、さっきから一分しか経っていなかった。

まだか、まだかと待ち焦がれているうちに、名前が呼び上げられた。そして診察室に入ろうとすると、看護婦は診察室の前の長イスを指差した。再び待ち、すぐに名前が呼ばれた。
中から看護婦がドアを開けてくれたので、軽い会釈をして入った。看護婦はそのまま部屋から出て行った。
「どうしたんですか、古葉さん、カゼにでもやられましたか。今年のカゼは強いみたいですからね」
聞きなれた声だ。それもそのはず、その医師は朝の医師だったのだ。
医師は笑いながら続ける。
「で、どうしましたか…えっ」
医師がこちらに振り向いたとき、突然沈黙が訪れた。医師はあんぐりとしたまま、雄治の方を見ていた。
「どうしたんですか、その子は…」
医師はまだ呆然としている。今度は雄治が切り出した。
「あの、この子、熱みたいなんです。診てください」
雄治は抱いている乳児を差し出した。
「この子は、この子はいったい誰なんですか」
医師は本当に気が動転しているようであった。その反面、雄治は落ち着いて答えた。
「そんなことより、早く診てください。すごい熱なんです」
「あ、そうですか。早く見せてください」
我に返ったのか、乳児を受け取り、手を額にやった。それを見て、雄治は少し面白おかしく感じた。その後すぐに自分の行いに気がついたのか、やっとのことで医師らしい行いをした。
「ん、この子はいつ生まれましたか」
「分かりませんよ、そんなの」
雄治は率直に答えた。今日この子を見つけたのに、いつ生まれたかなんて知るはずがない。そして医師は深刻そうな顔をして、重いため息をついた。

「多分、この乳児は、生後間もないでしょう…」
「生後間もないって…」
雄治はひとつのことを思い浮かべた。
「今、非常に危険な状態です。少し、預からせて下さい」
そう言うと、抱いたまま部屋の奥へと行ってしまった。雄治は一人になった。
しばらく椅子の上で、あの子のことを考えていた。あの子はもしかして捨てられたのではないのか。頭の中にそのことが駆け巡る。なら、なぜ捨てたのであろうか。家庭の事情なのか、それとも、心底からあの子のこと嫌いなのか…。
最近の悪い癖が出てしまった。意味のないことを次々と進展して考えていくことだ。
一人で照れくさそうにいると、突然ドアが開いた。
「古葉さん、先生がお呼びです」
看護婦がドアの横から顔を出して言った。ドアの閉まる音が聞こえてから、雄治は立ち上がって、廊下に出た。そのとき、雄治は気が付いた。あの看護婦は場所を言っていなかった。どうしたことだろうか。雄治は左から右へと廊下を見た。しかし、そこには先程の看護婦は見られなかった。そこにずっと立っているわけにもいかなかったので、とりあえず、受付へ向かった。
受付はさっきより人は少なくなっていた。雄治は受付の窓を覗いたが、当てが外れてがっかりした。しかしここに聞けば分かるかもしれないと思ったので、受付の女性に尋ねようとしたが、変に思われるかもしれないのでやめた。
そこで丁度、先程の看護婦が廊下から待合室に入ってきたので、急いで看護婦に歩いた。そして、ずいぶん気をつかった感じで尋ねた。
「すいません、道に迷ったんですけど、どこですか」
看護婦は不思議そうな顔をした。そして笑いながら答えた。
「迷ったって、さっきの部屋の右の部屋じゃない」

雄治の心は一瞬にして空っぽになった。

「失礼します」

部屋に入ると、医師がベッドに横たわって寝ている乳児を見ていた。

「来ましたか、遅かったですね」

「いや、はい…ちょっと疲れていたので」

「そうですか…あ、そこに座って下さい」

二人とも上手く切り出せないのか、長い沈黙が流れる。その間、二人は小さな呼吸に耳を傾けながら、寝ている乳児を見ていた。寝顔が非常に可愛い。雄治はため息をついた。

「どうやら、もう大丈夫みたいですね」

医師はまだ強ばった表情をしている。

「急いで薬を投与しましたからね…これからですよ、来るのは。この子がどこまで頑張れるか…心配です」

医師はようやく雄治の方を見た。

「古葉さん、この子は一体、どこの子なんですか」

雄治はポケットから一枚の手紙を取り出し、医師に渡した。

「何ですか、これ」

手紙を受け取り、読み上げる。

その手紙にはたったの一文と名前が記されているだけであったが、医師には何か分かっていたようだ。

「松林清治って…」

医師は立ち上がり、雄治の横を足早に通った。そして医師がいなくなると再び、雄治は部屋に取り残された。しかし今度は一人ではなかった。

雄治は寝ている乳児を見つめて、疲れが吹っ飛んでいくかのように、心が和まされていた。赤ちゃんは小さな呼吸をしている。雄治は乳児が寝ている寝台の上に手を乗せ、さらにその上に顎を置いた。そして雄治はまぶたが自然に閉じてきているのも気付かずに、別の

世界に移っていた。そしてその世界で、幼い頃の自分を見ることになった。

地震が起こったので夢の世界から脱した。すると医師が背中をゆすっているだけであった。

「起こしてすいません。ちょっと聞きたいことがあるのですが…」

医師は不安そうに言った。

「何ですか」

雄治は目をこすりながら眠そうに答えた。そして腕を上げて体中の各部を起こした。

「あのですね、いきなりですけ、この子はどこにいましたか」

医師は苦々しい顔で聞いた。雄治はその顔に疑問を持ちながら答える。

「えーっと、利根川の…河川敷です」

「そうですか…」

医師はため息をついた。そして医師は続ける。

「続いてですね、まあ、どうでもいいのですが、松林清治っていう人を知っていますか」

「いいえ」

医師はさらにうつむいた。松林清治は有名人なのだろうか。雄治はそのままその疑問を聞き返す。すると意外な答えが返ってきた。

「今日の新聞の二・三面あたりに書いてあったと思いますが、見ませんでしたか」

雄治は考え込む。そしてすぐに朝のことを思い出した。

「もしかして、ベンチャーのやつですか」

「そうです」

医師はやっと微笑んだ。そして医師は続ける。

「その会社の社長が松林清治なのです」

「で、なんの関係が…あっ」

雄治は気付いた。この乳児の父親がそのベンチャー企業の社長で

あり、会社が倒産したこと、そしてその夫妻が何らかの理由でこの子を捨てなければならないこと。雄治の頭では、二人が借金取りに追われていた。なぜなら起業の際、莫大なお金を使うために闇金まで手を出したと思ったからだ。そして雄治は言う。

「つまり、この子は…」

「そうなりますね」

医師は腰をかけた。そして天井を仰ぐと体を脱力させた。雄治はそのだらしない格好を見て、少し困惑した。その無様な格好のまま、医師は言った。

「この子、昨日の夜に産まれたんですって。古葉さんの子供…と同時に産まれたらしいです。同じ時刻に。ちょうど大きな雷が落ちた直後ですね」

「ウソ」

「ウソじゃないです。本当のことですよ」

雄治はその事実に呆気を取られている。そして医師は大きなため息をつくと、勝手にぼやき始めた。

「で、どうしましょう。このことはまだ、私と古葉さん、それに松林夫妻しか知らないです。多分、松林夫妻は親権を破棄…どころではないと思います。まぁ、あらゆる法律によって裁かれますと思いますが、とりあえず今、この子の親…保護者はいないってことになりますね。普通なら孤児院行きなのですが…」

医師は横目でチラッと雄治の方を見た。雄治はその視線の意味は分かったが、あまりにも無茶苦茶すぎる。明らかに今の医師には、どうでもなれ、バレなければいいといった気が強くなっている。雄治はなんて答えればいいのか困った。

普通なら、そんなことしたらだめだ、とはっきり言うべきなのだが、この子を見捨てるわけにはいかない、といった別の本心があった。どうもこの小さな赤ん坊とは、何らかの縁があるらしい、と思うだけで、別の感情が駆り立った。

雄治がそんなことを考えていると、医師はさらに拍車をかけるよ

うな一言を言った。
「実は古葉さんがもらう養子の件なのですが、あの子も実は言うと、同時刻に産まれましてね。なので…」
「…なので、双子にしろと」
「そうです。この子の未来を考えてあげるのであれば、そうすることをお勧めします。考えればの話ですが」
医師は楽しそうに笑った。完全に雄治のことを遊んでいる。昨日、医師は冗談を言わないと言ったので、本気で言っているのだろうと思った。雄治は憂鬱そうな顔をしたが、すぐに真剣な顔に戻った。しかし、内心は心配であった。
「まだ、芳江とも話さなければならないし…」
医師のほうをチラリと見ると、医師は微笑んでいた。そして医師は問題がないような、晴れた顔で言った。
「まぁ、どうにかなるでしょう。このことは奥さん以外には、話さないで下さい。明日には返事を下さい。今日はこちらで預かっておきますので…」
「明日までですか」
雄治の目には、決断を急かす医師が少し憎く見えた。なぜそんな早くに決めなければならないのか、それが不思議でたまらなかった。しかしそんな雄治をよそに、医師は気にしないで続ける。
「いい返事を待っています」
完全に医師の流れに飲み込まれた、と感じた。医師はドアの方に向かって歩くと、そのまま何も言わずに行ってしまった。が、すぐにまたドアが開くと、医師が顔をこちらに覗かせた。
「言い忘れましたが、その子はそのまま寝かせといてください」
再びドアがバタンと閉まると、その音で乳児が目を覚ました。そして辺りをきょろきょろすると、突然泣き出した。凄まじい泣き声が部屋中に響く。雄治はこの泣き声を止めるべく、乳児を抱いた。そして腕の中で優しく揺らす。すると乳児はだんだんと泣くのをやめて、笑顔を見せた。乳児は雄治に手をさしのべた。その手はもみ

じのように赤く、小さかった。雄治はその手を優しく握ると、乳児は幸せそうに喜んだ。そして安心したのか乳児は雄治の腕の中で、ゆっくりと眠った。雄治は眠った乳児をもとのベッドの上にゆっくりと戻した。

何の夢を見ているのだろうか。今、彼女は別の世界にいる。

蛍のような星の光に照らされている廊下を通り、２０３号室に戻った。そして芳江のベッド近くまで歩くと、すぐにこちらに気が付いた。

「どうだった」

芳江は待ち望んでいたかのように言った。雄治はイスに座り、孤児院での出来事を話した。孤児院での再会、養子の両親、そしてその家族関係。芳江はそんな話に一生懸命になって耳を傾けた。そして話が終わると、ベッドに寄りかかり、小さな声でぼやき始めた。

「私達に彼らのようなことができるかしら」

「オレもそれ聞いたとき、そう思ったよ」

雄治はイスから立ち、窓を通して外を見た。

「でも俺たちが育てなきゃ、その子は一生、一人ぼっちだ。永遠に孤独の人生を生きるのと同じような人生を歩まなければならなくなる。俺はその子の人生をサポートしたい」

「保護者がいなくたって、その子はその子なりの人生を見つけられるはずよ。たった一つの道が、人生じゃないわ」

雄治は芳江の方を振り向いた。

「自分の命を犠牲にしてまでも産んだ子供だぞ。その遺志を受け継いで、オレたちはその子を大切にして、幸せな人生を歩ませなければならないと、オレはこう思う」

「だから私には自信がないんじゃない」

芳江の顔は必死であった。二人は目が合い、しばらく見つめたままでいた。しかし芳江の目から、ほろりと涙が頬を流れた。その姿を芳江は隠すように雄治から目をそらすと、袖で涙を拭いた。その

姿を見た雄治は、その気持ちに共感した。そして雄治は優しく言った。

「明日までゆっくり考えてくれ」

雄治は泣き続けている芳江を残して、そそくさと部屋を出て行った。

芳江はまだ泣いているだろうか。とりあえず、そっとしておいた方がいいかな。そう思いながら、雄治は暗闇に包まれた廊下を静かに歩く。風は窓を叩き、窓は激しくゆさぶられる。廊下の奥の方では、火の玉のような赤い明かりがぼんやりと揺れていた。

この後はどこへ行こうか。それは自分でも分からない。頭の中には他のことですでに埋め尽くされている。雄治は知らずにため息をする。今日一番の深い深いため息だった。

いつの間にか、雄治は待合室まで来ていた。待合室はすっかり静まり返り、遠くで非常口の明かりがさっきと同じようにぼんやりと浮いていた。そしてゆっくりとした歩調で外へ出て行った。

外に出ると、風は先程より弱まっており、時々吹く風が、一番体にこたえた。しかし、その中で、風の優しさも感じられた。まるで昔のあの時のように。腕を天に伸ばし、そして空を仰いだ。するとそこには満天の星が、今でも落ちてきそうなほどとても近くに感じられた。子供のように空へと手を伸ばしたが、星まで届くわけがない。しかし頭の中が空に吸い込まれて、今まで感じたことがない気持ちよさが感じられた。大きく息を吸ってみると、胸の中が新鮮な気持ちと一斉に入れ替わった、と同時にお腹が鳴った。そしていつの間にか、一人で笑っていた。よくよく考えてみると、昨夜から何も口にしていない。唯一口にしたのが、今朝の水ぐらいであった。

雄治は再びゆっくりとした歩調で歩き出す。

夜の道は、朝とは全く違う姿が雄治の目に映った。しかし雄治の脳裏には、ある人が映し出されていた。

第四章　二人の思い

腹をいっぱいにして、我が根城であるアパートに帰る道中、雄治は加藤を見かけた。加藤は片手に小さな箱をぶら下げ、駅の方に向かっていた。加藤はこちらに全く気付いていないようだったので、雄治は車道をまたいで声をかけた。こちらに気付き、加藤が急いだ様子で車道を横切り、こちらに向かって来た。

「よぉ、どこ行ってたんだ、こんな遅くまで」

加藤が言った。

「どこって病院に決まってるだろ。ま、お腹が空いたからちょっとお腹に入れに、店へ行ったけど…」

「ま、いいよそんなことは。て言うかどうだっ…」

雄治は加藤から目を逸らした。それに気付いたのか、加藤はその話をやめた。そして雄治は加藤にこのことを打ち明けることを決めた。仕事仲間の親友であったし、加藤はなんでも知りたがる性格だが、秘密は最後まで守るので信頼できた。

二人は公園に入って、ベンチに腰をかけた。

そして雄治が話し始めると、加藤は静かに耳を傾けた。

そしてすべてのことを話し終えると、雄治はひとつのことをすっかり忘れていた。それは芳江に利根川に捨てられた乳児の話をしてなかったことだった。ま、明日に話そう、と忘れないように頭に刻み込んだ。

加藤は顎を触り、しまったというような顔をした。

「悪いな、変なこと聞いて。なんか自分が嫌になってきたなぁ…俺、このことは誰にも言わないよ。約束する」

「ああ」

加藤は立ち上がり、雄治に小箱を差し出す。

「あ、これ、お見舞いに買ってきたんだけど…病院の場所分かんなくて、お前の家に行ったんだけど、誰もいなくてさ。だから、こう

会ったんだから、はい、これ」
「ありがと」
雄治は素直に小箱を受け取った。中身は多分、ケーキだろう。箱は冷えていた。
加藤は自分の腕時計を見た。
「あ、やべ、終電が…じゃあな、古葉、奥さんによろしくな」
「ああ」
加藤は走って行ったと思ったら、すぐに立ち止まった。
「明日はどうするんだ、休むのか」
「ああ、頼むよ」
「分かった」
そう言うと、加藤は駅へと走り去った。
雄治はその姿を見届けた後、小箱を持って公園を後にした。

アパートのドアを開け、中に入ると明かりをつけた。
昨日の朝の通りだった。散らかった新聞、テーブルの上には片付けられていない食器、脱ぎ捨てられたままの服。
ふと、昨日の朝の状況を思い出す。素早く着替えをし、急いで朝食を作って食べ、ビジネスバッグを持ち、あわただしい様子でこのアパートを飛び出した姿をしみじみと思い出した。あの時はまだ希望に満ち溢れていた。もし何でも願いがかなえられるなら、まだ輝かしかったあの時に戻りたい。いや、もうこのことは忘れたい。
雄治は居間に向かい、新聞、食器、服を片付けた。
そしてそのまま居間に倒れこんだ。
外は暗闇に覆われ、月だけがひときわ輝いていた。まるで、希望の光のように。

スズメのさえずりを耳にして、頭を起こした。朝日がまぶしい。体を起こしてみると、首が痛かった。首を押さえながら、顔を洗いに行った。

朝食をとりながら、新聞を読む。すぐに新聞で松林清治のことを探したが、見つからなかった。そして時計を見ると、ちょうど八時を回っていたところだった。
食器を片付け、身支度をする。服はズボン以外を着替えて、コートを着て、加藤から貰った小箱を持って、寒い外へと出て行った。
外は予想通り冷え込んでいたが、太陽がわずかな暖かさをコートの中へと注ぎ込んだ。風は感情を剥き出しにしていた時とは逆に、優しく出迎えてくれた。そして足は勝手に病院へと向かっていた。
ああ、今日は良い一日になりそうだ。そう思いながらも、少し複雑な気持ちでもいた。正直、不安な日でもある。芳江が何て言うか心配だったからだ。病院に近づくにつれて、その思いはよりいっそう高まっていく。しかし、足はその場に留まらずに、病院へと歩き続けていた。

病院に着くと、待合室で頭を抑えている医師に会った。
「おはようございます…あのことを奥さんにはもう話しましたか」
「あ…いいえ、まだなんですが…昨日話そうと思ったのですが、忘れてしまいまして。なので、今から話そうと思いまして…」
「あっ、そうですか…話し終わったら、昨日の部屋に来てください…では、失礼します」
医師は足早に立ち去った。いつもとは違う、殺風景な感じであった。何かあったのだろうか。医師を心配しながらも、２０３号室へと足を進めた。
部屋の前に来ると、やはり躊躇した。しかし、アパートから出てきた時の決意を思い出し、部屋の中へと入っていった。
正面の窓から差し込む朝日は、真ん中の狭い通路を照らし、雄治を出迎えた。
そして芳江のいるベッドのカーテンをくぐり、中に入った。
「どうだ、気分は」
「まあまあ」

芳江は雄治と眼を合わせようとせず、窓の外を眺めていた。雄治は構わず話を続ける。
「何かこれ、加藤がお前にさ。お前のことが好きになっちゃったかな、あいつ。多分、中身はケーキだと思うけど…ほら」
「うん、そこに置いておいて、後で食べるから。あと、加藤さんにありがとうって言っておいて」
芳江はこちらに目もくれず、ずっと外を見ていた。
「あとさ、今日のニュースで…」
「そんなことより、養子のこと、もうどうでもいいわけ？」
芳江が恐ろしい目をしてこちらを見た。しかし、その言葉を聞いて、雄治は少しほっとした。そして雄治は仕切りなおして、ゆっくりと話し始める。
「じゃあ、昨日の話のことなんだけど…どう考えてくれた？」
「その前に、私、昨日、夢見たの」
雄治はなぜこの時に夢の話をするのか分からなかったが、とりあえず、おとなしく聞くことにした。芳江は続ける。
「何の夢かというと、あなたの夢だったわ」
「オレの…」
「そう、あなたの。その夢はあなたが子供と仲良く遊んでいたの。家族のようにね。私は遠くから見ていたわ。あなたの幸せそうな顔っていったら、本当に良かったわ…それで、私は独りぼっちだった、遠くにいたから。でもあなた達が私を呼んだの。ヨチヨチ歩きの…あなたの子供かしら。ま、とりあえず、子供が私に近づいて、手招きしたの。こっちに来て遊ぼうよ、って言わんばかりに。そして私は気付いたの。私はこのベッドの上で泣いていたの。何だったんだろう、あの時の気持ち。悲しみでもないし、喜びでもない。言葉では言い表せない何かが、一人このベッドの上で泣かせたの。だけど正しく一つだけ言えることは、体じゅうが一気に開放されたような快感があったわ。でも涙が流れた時、胸が少し痛かった。胸を通って、体じゅうがその涙に共感したわ」

芳江はそのことを思い出しているのか、目が潤んでいた。
「それで夢から目が覚めた時、私は思ったわ。やっぱり雄治には子供が必要だってね。だから私は、養子をもらうことに、改めて賛成します」
その時、芳江に笑顔が戻った。涙目だったが、もとの芳江に戻った。
「ありがとう…芳江」
雄治はそのことに感銘を受けた。しかし、その良い空気が芳江の一つの疑問によって、一瞬にして消えてなくなるのであった。
「そういえば、なんだかあの夢、変だったのよね。子供の人数が一人じゃなくて、二人だったのよね。私達がもらう養子は一人なのに、変な夢ね」
芳江クスクス笑っていたが、雄治の顔は、不穏に包まれた。今、ここで切り出すのは少し嫌だったが、先程の決意を思い出して話を切り出した。
「あのさぁ、芳江、ちょっと話があるんだけど…」
「なーに、そんな変な顔をして」
芳江はまだこの事態に気付いていないためか、まだちょっとした興奮が、残っているようであった。さっきとは大違いだった。この表情をいつまでも残しておきたかったが、いつか言う必要があったのは分かっていたので、そんなことを無視するのは、少し胸が痛かった。
「実は…」
三度目の話だったので、スムーズに話が進んだ。芳江の顔は話が進むに連れて、険しくなってきているのが分かった。その顔尾を見るたびに、芳江の目を避けながら話を進める。話が終わると、芳江は口を抑えてうつむいていた。しばらく話さないだろう、と思っていたので、沈黙を守ろうと思っていたが、先に芳江が話を始めた。
「で、雄治はどう思うの。その子について」
芳江はうつむいたままから顔を上げた。その表情からは無理だと

いっているのが分かったが、自分の気持ちを押し通した。
「オレはその話に乗りたい。兄妹にすれば何かと成長もよくなるし、子供たちの心も安定すると思う」
「経済的に考えたことある？気持ちだけじゃ到底育てることなんて無理なのよ。むしろ私たちの生活だって危うくなるのよ」
　芳江は一向に食い下がらない。しかし、ここで雄治も負けるわけにはいかなかった。ここで負けたら、その子の親の意思を踏みにじることになる。
「もともと俺たちは子供が二人生まれる予定だったはずだ。だから…」
「もうその話はやめて。お願いだから」
　芳江はぴしゃりと言った。そして突然しゃくりを上げて話し始めた。
「もう…いいよ。分かったわ、私の負け…ね。あーあ、もっと強くなりたいなぁ。そうずればこんなことにならなかったのに…見た夢って、このことの前兆だったのかなぁ」
　芳江は再び笑った。その顔を見て、雄治も笑った。雄治は顔を外に向けた。
「ごめんな。オレが勝手にこんなこと決めちゃって」
「いいのよ、別に。その時にその子を見つけなきゃ、その子は本当に幸せじゃなかったと思うよ。乳児で風邪だったなんて、ふつうなら死んじゃっていたかもしれない。その子の幸せ、一緒に探してあげようね」
　その言葉を聞いて、雄治は心の底からジーンときた。今の雄治には、これだけの言葉しか送ることができなかった。
「オレ、仕事も生活のことも頑張るからな」

　雄治は２０３号室を出て、医師のいる昨日の部屋へ向かった。
　中に入ると、朝の医師とは違う、快さが感じられた。医師はすやすや寝ている乳児から雄治に目を移した。

「どうでしたか」
医師は眠そうに言った。
「昨日は大変でしたよ。あまり泣かないのはいいのですが、活発なんですね、この子。毛布は嫌がるし、でも、よく寝る子ですね。おかげで少しは眠れましたよ。あと、この子の病状はよくなってきています。あと二・三日安静にしていれば、直に良くなるでしょう」
医師の目がとろんとしてきた。
「大丈夫でしたよ。少し反対していましたけど、最後には快く賛成してくれました」
「あ、それはよかった。これでこの子からかいほ…いや、失礼。この子をお願いします」
そう言って、そそくさと出て行ってしまった。
「え、ちょっと、この子はもう」
医師には聞こえていないようだった。この子はもう自分の管理下に置かれたのか、もう一度確認したかったのに。そんなことを思っても、もう遅かった。
雄治は養子を抱きかかえ、静かに部屋を後にした。赤ちゃんが起きないように。

２０３号室に戻ると、さっきは気付かなかったが、峰倉さんのベッドが片付けられていた。峰倉さんは退院したのか、いいなぁ。そんなことを思いながら、赤ちゃんに目を向けて、芳江のベッドに向かった。どんな顔するかな。頭の中を、芳江のあらゆる顔がめぐった。びっくりしている顔、笑っている顔、唖然としている顔。まさか今日、ここにいるとは思っていないだろう。いつの間にか、自分の心が躍っていることに気付いた。
そして赤ちゃんを大事に抱えたまま、芳江のベッドに通じるカーテンをくぐった。
すると、芳江は外をぼんやりと眺めていた。すぐに芳江はこちらのことに気がついた。そして思ったとおり、芳江は目を丸くしてい

た。
「どうしたの、その子。その子は雄治が見つけた子？」
芳江は完全に戸惑っていた。雄治はそれを見て、心の中で喜んだ。
「ああ、そうだよ」
「え、ちょっと抱かせて」
赤ちゃんは雄治の手から芳江の手に移った。だが、そのことに気付かないで、まだすやすやと眠っている。
「かわいいわね、この子」
芳江は甘ったるい声で言った。
「なんて名前にしようか」
芳江はすっかり上機嫌であった。
「もう決めてある。この子の名前は深雪だよ。いい名前だろ」
「いいはいいと思うけど…なんで？」
芳江は赤ちゃんを見て、結婚式以来の心底から喜んでいる微笑を見せた。子供の力は計り知れない。人々を喜ばせ、未来に秘めたる力を隠し持っている。子供たちはそのことを知らずに成長する。だから子供たちはその時その時を、幸せに暮らしていける。しかし、いつまでもそんな暮らしができるわけがない。それを知ってしまったその時から終わる。雄治は持論に浸りながら、ボーっとしていた。
「ねぇ、聞いてる？」
芳江は不審そうに尋ねた。
「あ、ああ聞いてるよ。あ、これ見てよ」
雄治はポケットを探って、しわくちゃに丸められた手紙を取り出した。そしてその手紙のしわを伸ばすように広げ、芳江に渡した。
「何これ」
「それ、その子のそばにあった、その子の親の遺志手紙」
「えっ」
芳江はすぐに手紙を読み始めた。そしてすぐにぼやくように言った。
「だから…か。この子の両親は私たちと違って大変だね。この人た

ちと会わせ…あっ」
芳江は首をひねったり、髪の毛を触ったりと、急に落ち着かない様子になった。
「ねぇ、この子の親とはどうするの。この子の実親とこの子はどうするの」
「あ、そうか」
雄治は考えた。が、人のことを考えるのが苦手な雄治は、直に面倒くさくなり、適当なことを言った。
「ま、どうにかなるでしょ」
「もう、いつも適当なんだから。こっちはいいかもしれないけど、あっちはすごく心配するかもしれないよ。でも、連絡の手段はないから…どうすればいいんだろう」
「ま、しょうがないじゃない、考えても。考えていないときに思いつくことだってあるじゃん。探しているものが見つからないのと一緒だよ。その時になるまで待とう、な」
「ま、そうだね。いくら考えてもしょうがない、か」
芳江は落ち着き払ったように言った。
その時、深雪が目を覚ました。知らない部屋、見たことがない人にびっくりしたのか、突然泣き出した。芳江が深雪をなだめようとしても、泣き止まない。たまらず芳江は言う。
「ねぇ、泣かないで、お願いだから」
しかし一向に泣き止もうとはしない。芳江は必死に深雪に問いかけ、体を揺らしている。部屋中に深雪の泣き声が響く。芳江は泣きそうな声を出した。
「ねぇ雄治、どうしよう。泣き止まないよ」
「オレがやってみよう」
深雪は雄治の腕の中へと戻った。雄治は深雪を優しく揺らす。するとすぐに深雪は泣き止んだ。そして深雪は前と同じように、手を天井に向かって突き出した。雄治はその手を自分の手で優しく包む。
「泣き止んだ…」

雄治は安心したように息をついた。芳江は半分安心し、半分不満そうな顔をした。
「その子、雄治によくなついているね。きっと自分を助けてくれたことを知っているんだよ」
芳江は皮肉を言った。しかし雄治はそのことに気付かず、素直に受け止めた。
「そうかな」
雄治は少し照れて言った。芳江は雄治の顔を見てあきれた。しかし芳江はその純粋な心の持ち主を笑った。そのことも知らずに雄治も釣られて笑った。深雪も笑っている。
その時、家族の大切さを、芳江は初めて知った。

その後、雄治は約束どおり孤児院に行き、男の養子をもらった。名前は要にすることにした。この世の要になってほしい。また、人々にとっての大事な人になってほしいという意味がこめられている。
二人のもとに送られた二人の養子は、今、双子として暮らしている。二人は偶然にも、同日、同時刻に生まれたため、そういうことにしている。そしてその奇跡に感謝している。雄治と芳江は二人が養子だということを忘れて、わが子のようにかわいがっている。二人は何も知らずにすくすくと成長していった。何の疑いも持たずに、不審にも思わずに。
三年後、雄治と芳江は新築の一戸建てを購入した。将来のために、３ＬＤＫで造られている。要と深雪は新築の家を見て、とても喜んだ。わー、これ、私たちの？と言って深雪は家に駆け込んで、はしゃいでいた。その後に要も続く。そして、深雪は要と部屋めぐりをして楽しんでいた。
二人は友達を作り、毎日を幸せそうに、すくすくと育っていった。公園に行ったり、幼稚園に通ったり。雄治と芳江の両親の家にも行った。しかし、行くたびにいつも胸を痛めている。なので、実家に帰る回数は、なるべく少なくしている。

二人の秘密は、雄治、芳江、加藤、鎌塚、葵、そして医師しか知らない。もちろん誰もこの秘密をばらさないと思うが。

二人は少しトラブルもあったが、無事、幼稚園を卒園した。そのとき、雄治と芳江は泣いた。いくら自分の本当の子供ではなくても、今では立派な彼らの親になっていたのだ。

第五章　トイレの神様

入学式のあの日、僕の両親は泣いていた。泣いている父母はあまりいなかったというのに。そういえば、幼稚園の卒園式の日も泣いていた。なぜだろう。よっぽど二人は泣き虫なのだろう。そう思うことで僕は納得していた。

学校は楽しいところだ。いろいろなことを覚えることができるし、友達もたくさん作れる。だから学校は大好きだ。深雪はというと、元気すぎて、先生や父さん、母さんの手を焼かしている。

家に帰れば、優しい母さんがいつも笑顔で迎えてくれる。しかし僕はすぐに外へ遊びに出て行っていく。友達と遊ぶのは楽しいが、友達の都合もある。そんな日は深雪と家で遊ぶか、家でのんびりしている。

そして夜はというと、夕飯を食べ、お風呂に入り、居間でテレビを見る。そして風呂上りはいつも、深雪に言われることがある。もう、いつもクッションで頭を拭かないでって言ってるでしょ、と。これは幼稚園を卒園する少し前からやり始めていた。本当に気付かないでやっているので、自分でも参っていた。父さんはその僕らのやり取りを見て、いつも笑っていた。僕はそれを見て、安心しているから続けているのかなぁ、と思っている。そして家族団らんでテレビを見て、笑うところは家族全員で笑い、沈黙しなければいけないところはきちんと黙る。就寝時刻に近づくと、僕らは強制的に寝かされる。どんなに面白いテレビでも。寝る前に、僕と深雪は眠そうな目で歯を磨き、時々、深雪は歯を磨きながら寝ることもあった。頭がこくんとなると、その前兆である。そして歯を磨き終わると、僕らは各々の部屋へ向かった。僕らは小学校に進学してから部屋が分かれた。その前はよく二人で、その日起こった話やしりとりをしたものだった。先にどちらかが寝ると、少し寂しくなるのであった。なので部屋が分かれると、毎日が寂しくなる思いであった。

僕は寝る前に必ずトイレへ行く。なぜかというと、夜中にトイレへ行くのを防ぐためである。なぜ防ぐのかというと、少し恥ずかしいが、怖いからである。それは昔まではいかないが、幼稚園の年少の頃に聞かされた、父さんの話が原因であった。

ある日、寝る少し前に、いつも父さんが話をしてくれる。いつも深雪とその話を聞くのだが、今日はたまたま、深雪のトイレが長引いている。

そして突然、父さんは僕に問いかけた。

「なあ、要、トイレに神様がいるのを、知っているか」

僕はびっくりした。まさかトイレなんかに神様がいるとは思わなかったからだ。父さんは僕に布団をかけた。

「えっ、いるの？」

「ああ、いるさ」

父さんは得意気に言った。しかし要はまだ、疑問に思っていることがあった。

「神様はどこに棲んでいるの？」

「えーっと、トイレの後ろについている箱みたいなのがあるだろ」

「うん」

「そこの中に棲んでいるんだよ」

「へー」

僕は半信半疑に言った。しかし僕の心を、父さんはお見通しのようだった。

「信じてないだろ」

父さんはため息をついた。

「だって、なんかウソっぽいんだもん。その話、誰から聞いたの」

父さんはその言葉を聞き、少し戸惑った顔をしたが、すぐに元の顔に戻った。

「話っていうのはな、誰から聞いたっていうのは言ってはいけないんだ」

「そうなの？」
「そうだよ」
父さんはピンチを脱したような顔をした。しかし、父さんのそんな顔を見ても、僕の心は確実に動かされている。父さんは僕の顔を見てニヤッとした。僕はその顔を見て、慌てた。それを機に、父さんは僕を追い立てるように言った。
「でもな、そこのふたを開けて中を覗いちゃいけないんだ」
「なんで？」
父さんはさらに微笑んだ。
「自分の家を覗かれるのって、あまりいい気分じゃないだろう。それと同じさ。それに開けたとき、神様はどこかに行ってしまうんだ。また新しい住み家を見つけにな」
父さんは満足そうに言った。しかし、まだ疑問があった。
「なんで神様は棲んでいるの？」
「それはな、トイレって水が流れるだろ。その出る量を抑えたり、使う人のことをいつも見守っているんだ。だから人間は安心してトイレを使えるんだよ」
父さんは勝ち誇ったような顔をして言った。今の話は完全に僕を信じ込ませた。
子供は何事も信じやすいが、僕はほかの誰よりも信じやすい。お化けだって妖怪だって信じている。だから、父さんはいつも僕にウソの話をして楽しんでいる。悪いとは思っていても、なかなかこれはやめられないようであった。
いつも話を真に受けているので、話のしがいがある、と父さんは微笑ましい笑顔で、いつもそんなことを思っているのであろうか。
その時突然、不意にドアが開いた。そこには深雪がいた。深雪は目をこすって眠そうな声で言った。
「あれ、パパ、もう話終わった？」
「ああ。じゃ、早く寝ろよ。要、深雪、おやすみ」
二人のおやすみの返事を聞き、父さんは安心した顔で出て行った。

「ねぇ、今夜はどんな話をしたの？」
深雪は興味ありげにこちらを見て言った。
「そんなことより、トイレに神様がいるってこと、知ってた？」
僕は自慢そうに言った。しかし深雪は、分かりきったような顔をした。
「それが今日のパパの話でしょ。要って分かりやすいんだから」
深雪はフフフと笑った。僕はその笑みに動揺した。
「それにトイレに神様なんているわけないじゃん」
さらに深雪は笑う。いつの間にか、僕の耳がカーッと熱くなっていることに気付いた。そして深雪は続けた。
「それにパパの話、多分、ウソばっかだよ。というより最近、パパって要のことをからかうのが趣味みたいだし」
僕はとどめを刺されたように、元気がなくなっていた。しかし、そんなことを気にせずに、深雪は言った。
「ねぇ、そんなことより、しりとりしようよ」
「…いい、もう寝る」
僕は布団をかぶった。
「なんでー、しようよ、ねえ」
しばらく深雪は駄々をこねていたが、とうとうあきらめたのか、静かになった。そしておやすみと一声かけ、そのまま黙ってしまった。
その後僕は布団の中で考えた。本当にトイレに神様がいるのだろうか、父さんはウソばかり言っているのだろうか、と。そのことが頭から抜け出して、布団の中でぐるぐる回っている。
その時、深雪の小さな声が聞こえた。深雪は寝返りをうって、大きく深呼吸をした。僕は時計を見る。すると、いつの間にか三十分が経っていた。
僕は突然トイレへ行きたくなった。こんなに長く起きているんじゃなかったと、後悔するばかりであった。

しかし、一人でトイレへ行くのは怖い。いつもは中間点である居間に、父さんと母さんがいるはずなのだが、今日はたまたま早く寝ていた。暗い廊下を一人で歩くのは怖いし、夜にトイレへ行くのも怖い。もうどうすることもできなかった。

しかし、僕はひとつのことを思い出した。トイレにはおばけが出そうな感じがする。しかし今日の父さんの話によると、トイレは神様で守られているらしい。暗い廊下はダッシュをしてトイレに駆け込めばいいと考えた。それのおかげで僕は、一時的に安心したが、深雪の言葉が頭の中によみがえった。するとまた僕は、見たことがない恐怖に襲われた。

絵本に出てきたようなお化けが出てくるのだろうか。もしくはとんでもなくおぞましい姿をしているのだろうか。僕は想像に想像をめぐらした。想像をしたくなくても、次々と恐ろしい姿のお化けが頭の中に浮かんでくる。頭を振っても頭から離れない。ますます恐怖が増していった。

どうしよう、と思っていても、布団の中でぐずぐずしていることしかできなかった。

もう我慢の限界が近づいてきている。怖い、もれるが頭の中を駆け巡る。

その時、僕は決心した。ついにトイレへ行くことを決めたのだ。そして暗い廊下を小走りで走り、闇を吸い込んでいるような階段を降りて、トイレに駆け込んだ。

部屋に戻ると、やっと安心した。なぜかというと、トイレではお化けが出てこないか緊張したし、部屋に戻る途中でも、お化けのことを考えていたので怖かった。しかし、トイレでも廊下でも何も起こらなかった。僕のスリッパの音が、暗い廊下にこだまを残しただけであった。

僕は布団にもぐった時、神様を信じた。そして胸が急に熱くなった。僕の身に何も起こらなかったのは神様のおかげだ、そう信じた

のだ。
神様はいる、僕はその言葉をしみじみと噛みしめた。そして父さんと神様に感謝するのであった。ありがとう、と。
そして僕は布団の中でうずくまり、深い眠りに落ちた。

その夜、僕は夢から引っ張り出された、
気付くと、深雪が僕の体を揺り動かしていた。深雪は眠そうな目で僕に言った。
「要、トイレについてきて」
深雪は僕の手を引っ張り出す。しかし僕は眠かった。なので、手を振りほどこうとしたが、深雪は思いっきり引っ張ったのか、僕を布団から引きずり出した。あーと思っても、もとの布団に戻ることができないので、しょうがないと思いながらも、僕はついていってあげることにした。
再び廊下を通って階段を降りる時、深雪は小走りで走って先に行ってしまった。しかし僕は敢然と歩いた。
深雪はトイレに入り、すばやくドアを閉めた。
僕は何もすることがなかったので、寒い廊下で一人待っているしかなかった。
しかしその時、僕の耳にひとつの声が入ってきた。外からホーホーと鳴く、ふくろうの鳴き声だ。ふくろうはリズム良く鳴いているので、ついその鳴き声に聞き入ってしまった。そしてふと外を見る。無数の星が空を瞬いている。月はうっすらとした雲がかかり、きれいだった。
僕は風流だなと思いながらも、起きてきてよかったと思った。そして僕はぼんやりと外を眺めていると、深雪が出てきた。
「ごめん」
深雪は洗面所に行き、手を洗った。
僕は一応、と再びトイレに入った。
「早く出てきてね」

ドア越しに深雪の声が聞こえた。
先に行けばいいのに、と思いながらも、僕はその言葉に従った。
二人が部屋に戻ると、深雪はそそくさと布団にもぐった。僕も布団にもぐった。
そして深雪は顔を出して、僕に言った。
「ありがとね」
深雪は照れくさそうに言った。僕も照れてしまった。そして深雪は続ける。
「要さ、いきなりだけど、なんで廊下を歩いて通れるわけ？」
僕はどう答えようか迷った。神様のおかげと言えば、また馬鹿にされるかもしれない。しかし簡単な返答を思いついた。
「ヒミツ」
「えー、なんで。教えてよ」
僕はそれ以上言わなかった。深雪もそれを察したのか、すぐに質問をやめた。そして深雪は寝やすい体勢を作った。僕は目をつむり、知らないうちに意識が遠くのほうへ行くのを感じた。

僕は目を覚ました。
そしていつものようにトイレへ向かう。
トイレで用を足して水を流した時、僕はひとつの好奇心に駆られた。僕は知らずに興奮をしていた。
知らずのうちに、例のふたに手をかけていた。そしてそれを持ち上げようとしたその瞬間、開いている窓からビュッと風が吹いた。僕は思わずふたから手を放した。そして僕は怖くなって、すぐにその場から離れた。とりあえず洗面所へ行き、手を洗ってから顔を洗った。僕の呼吸は乱れている。そして僕は何度もうがいをした。呼吸が整うと、大きく深呼吸をした。その後、鏡の中の自分と目を合わせる。もう大丈夫だ。さっきのは偶然だ。単なる偶然。僕はそう思うことで安心した。そしてふーと息を吐く。

落ち着いた僕は家族と朝食が待つ居間へと階段を下りていった。
僕はそれ以来、例のふたを開けようとは思わなくなった。神様は見るものではないし、見つけようとするものではない。ただ単にそこにいて、僕らを守ってくれるものだ。そんなことを思っていても、忘れたころには再び好奇心に駆られるものである。

小学校に入学して、初めての夏休みになった。
僕と深雪は初めての夏休みに興奮した。夏休みの前日は眠れなかったほどだ。その前夜は、僕の鼓動が高まった。明日は何しようか、宿題は明日のうちにあそこまで終わらせよう、と布団の中で考えていた。毎晩毎晩そういうことを考え、想像した。
暑い日が続くある日、僕は留守番をすることになった。深雪は友達の家へ遊びに、父さんと母さんは買い物をしに行った。母さんは僕を誘ったが、僕は断った。なぜなら僕は、昨日、母さんが牛乳の賞味期限が過ぎていることに気付き、今朝に捨てようとしていたのだが、僕はそれを知らずに飲んでしまった。なので、腹をこわしてしまったため、トイレにいなければならなかったのだ。
僕は腹を押さえながら、腹の痛みと戦っていた。ああ、もしこの痛みが無ければ、と思っても、痛みは消えないのは分かっている。だがその時、遠い昔というほど僕は生きてはいないが、かなり前のことを思い出した。
それは幼稚園のころに父さんから聞いた、トイレの神様の話であった。
あの時の僕は神様を信じていたが、今はどうだ。すっかりそのことは忘れ去られている。いつから忘れたのだろうか。全然覚えていない。
僕は試しに神様に祈ってみた。痛いのを、どうにかしてください、どうにかしてください、と。しかし痛みは腹に残ったままだ。僕は何度も何度も祈り続けた。
そして七、八回目ぐらいで、僕の祈りが神様に通じたのか、痛み

は雪解けのように消えていった。神様が助けてくれた、僕はそう思った。

その時僕は喜びを感じた。思わず笑みをこぼしてしまったほどだ。

僕はトイレから出て、鏡を見た。僕の顔は幸せそうだった。誰だってどんな苦しみでも、解放されるとうれしいはずだ。

僕は胸をなでおろしながら、残った宿題をするために自分の部屋へ向かった。しかし僕は、部屋とトイレの中腹である階段を昇っているときに、あの時と同じことを考えた。神様は本当にあそこにいるのだろうか。

僕は知らずのうちに階段を降りて、トイレの前まで来ていた。右手が扉に手をかけ、僕は扉を開ける。すると、風が出て行けと言うかのように最後の警告を出した。しかし僕は恐れずに中へと入っていった。そして、家には誰もいないのに、静かにドアを閉め、誰も邪魔が入らないようにした。

例のふたに近づくにつれて、胸の鼓動はだんだん早まってきた。僕は例のふたに手をかける。しかし、僕は過去に起こった恐怖を恐れた。神様が怒ったことを思い出したのだ。僕は一度それから手を離し、冷静になろうとした。

その時、もうひとつの恐怖がよみがえった。神様がどこかに行ってしまうことだ。

それは父さんの声であった。父さんの声が僕の頭の中でこだまする。そして、もし開けようとした時のことを思い出す。

僕はぞっとした。そしてその場から退いた。背後の壁に背中が張り付く。

しかしその反面に、僕の心にはまだ小さな欲望があった。見てやりたいという欲望だ。

やはり僕の心は変わらなかった。僕はもう一度例のふたに手をかけた。僕はふたをゆっくりと持ち上げる。そのふたはずっしりと重かった。僕に向かって吹く風は無く、なんの妨害も無かった。

胸の鼓動がさらに高まる。

僕は完全にふたをはずし、家を覗いた。そこには風船のような丸いものがあった。
僕は試しにその風船をつついてみる。すると、左にあるパイプから勢いよく水が出てきた。僕は慌てて風船から手を離した。水は止まったが、袖がぬれてしまった。
こんなものだったのか。僕はがっかりしながら、例のふたを閉じた。

僕は部屋に戻り、夏休みの宿題の絵画をする。
一時間、二時間と時間は時を刻む。僕の額からは、じりじりと汗が流れる。七月に入ってから、毎日のように暑い日が続いている。夏休みに入って三日しか経っていないのに、もうでれでれになっている。
十一時を過ぎても、父さんと母さんは帰ってこない。深雪はというと、いつも正午を過ぎないと帰ってこない。
絵の具に使った水が汚くなったので、水を替えに洗面所へ向かった。
僕は水をゆっくりと流す。すると抹茶色ににごった水が、白いスケート場を回転して流れる。そしてその流れた後に、砂のようなものが跡として残った。僕は洗面所をきれいにし、きれいな水を容器に移し替えた。
外が暗くなり、すぐに明るくなる。まぶしいほどだ。そしてその明かりのほうを見る。そこにはトイレがあった。すると再びトイレに行きたくなった。
僕は容器を床に置いて、トイレに入っていった。用を足し、水を流す。そしてまた自分の部屋に戻った。

あれから三十分経ったが、依然に二人が帰ってくる気配は無い。いつになったら買い物から帰ってくるのだろう。僕は終わったというのに。

僕は再び、水を流しに洗面所へ向かった。
水をこぼさないように階段を降りていると、遠くのほうから水が流れる音がした。その音は、トイレに流れる水の音だった。
そして僕は階段の下を見る。するとそこには水が流れていたのだ。
僕は急いであと一段までのところまで降りた。すぐに洗面所のほうを見る。なんと、トイレからの水であった。トイレから小さな波ができて、あたり一面にその波を送っている。
一体全体、何が起こったのであろうか。僕の頭は一瞬にして真っ白になった。その場でボーっとして突っ立っていることだけは分かっていた。その他に、僕は今、どうすることもできなかった。
しかし、僕の頭の中にひとつのことが浮かんだ。
神様が怒ったのか。
そういえば父さんの話によると、神様はトイレの水源を守るようだった。しかし僕が例のふたを開けたことによって神様がどこかに行ってしまったのか。
僕のせいだ。僕は自分を責め立てた。しかし自分を責めてもしょうがない。今は自分ができることをしなければならない。なので、今はひたすら祈るしかなかった。
お願いします、神様。戻ってきてください。
しかし水の勢いは止まらない。僕は祈ることをやめなかった。
お願いします。お願いします。
水かさは少しずつ高くなってきているような気がした。僕は祈り続けたが、トイレには神様が戻ってはこなかった。
ああ、どうしよう。そんなことを思っても、悔やみに悔やみきれない。あの時、例のふたを開けなければ。僕の目からは涙が溢れ出してきている。
その時、僕は階段を駆け上がっていた。そのはずみで、階段の上に置いておいた、水が入っている容器をひっくり返してしまった。にごった水は、階段を滴り落ちて、床上に広がっている湖と混ざった。そして赤い炎が水の中で燃える。

僕は部屋に入り、ベッドに体を投げ出して、枕の中に頭を沈めた。
僕の心は後悔とあせりによって包み込まれていた。
僕のせいで…僕のせいで…この日本は水の下に沈むんだ。この世界は僕のせいで水の下に沈むんだ。
僕は絶望の底にいる気分であった。さらに一生這い上がることができないような崖が、目の前に聳え立っているようだった。もう一度、父さん、母さん、そして深雪にまた会えるのだろうか。まだ僕には、やりたいことがたくさんある。世界はなくなってしまうのだろうか。
その時僕は思った。これは夢だ、と。僕は夢から目覚めるために頭をたたいた。しかしすぐにそれは夢ではないことが分かった。
僕は顔を上げて耳を澄ました。下の階で水が流れている音がする。僕は再び枕に顔を沈めた。もうどうすることもできない。
その時であった。下の階から玄関のドアが開く音がした。
「ただい…何これ」
それは母さんであった。びっくりしたのか持っていた荷物を落としたようだ。
「どうしたんだ、それ落とし…何があったんだ、これは」
父さんがその後を続いて中に入った。
「とにかく、どうしたんだ、これは。誰かいるか、要、いるか」
僕はその声を聞いて、胸をなでおろす思いだった。
そして僕はすぐさまに部屋を飛び出し、階段をものすごい速さで駆け下りた。
「父さん、どうしよう。トイレから…トイレから水があふれてきたんだよ」
「ああ、そうなのか、まったく…」
父さんは靴を脱ぎ、靴下も脱いで、裸足のまま水の上を歩いた。
父さんは僕の前を通り、トイレの中へと入っていった。
ガコン、と音がすると、水の流れる音が無くなった。
「ふぅ、まったく、要、ちゃんと説明するんだ。分かったな」

父さんは僕を見て苦そうな顔で言った。僕はゆっくりうなずいた。

三十分をかけ、やっとのことで床上の水を雑巾で拭いた。

「父さん、ごめんね。こんなことになっちゃって」

僕は泣きじゃくっていた顔を父さんに向けた。

「ああ、いいよ、やっちゃったことはしょうがないだろ。もう終わったことは悔やんでもしょうがない。なぁ、そうだろ。ところで、どうしてこうなったんだ」

「じつは…」

僕は今日起こったことをすべて話した。

すると意外にも、父さんは笑っていた。そして父さんはすまなそうに言った。

「ごめんな、父さんがそんな話をしたから悪かったんだな。ははは…まさか本当に開けるとは思わなかったよ」

父さんは笑っている。僕はそれがなぜだか分からなかったが、疑問に思っていることを聞いた。

「ねぇ、神様は戻ってきたの？」

「ああ、そうだよ。ここ以外に行く場所が無かったんだよ。他の場所にも神様がいるからな。きっと無いと分かったから帰ってきたんだよ。だけど、家のふたが閉まっていたから入れなくて、こうなっちゃったんだ」

「あー、そうなんだ」

僕は目を輝かせた。今、僕の家のトイレには神様がいる、それだけが分かっただけでうれしく思った。今では心が晴れ晴れしいほど、今の太陽のように輝いている。あの時の絶望がウソのようであった。僕は今ホッとしている。いろんなことにだ。

母さんには父さんから話してくれた。

そして十二時半を回ると、ちょうど母さんが昼食の準備に取りかかろうとした時、玄関のドアが開いた。

「ただいまー。おかーさん、おなかすいたよー」

その声は深雪である。そして居間に飛び込むように入ってきた。
「お母さん、今日のご飯、何？」
母さんは支度をしながら答える。
「今日は冷やし中華よ」
「やったー」
深雪は喜んだ。今日ここで何が起こったことも知らずに。
僕は深雪のそのうれしそうな顔を見てうらやましく思った。何も知らないほうがいい時もある。僕はそう感じたのであった。

第六章　あの日、あの時、あの思い出

私と要の二人は小学校に入学してから、二度目の夏休みを迎えようとしていた。私たちは、今年の夏休みを去年よりもわくわくしながら待ち望んでいた。なぜなら、今年の夏休みにはいろいろなスケジュールが入っているからだ。いわゆるハードスケジュールである。その予定の内容は遊び尽くしである。七月中には夏休みの宿題を終わらせ、八月に遊ぶという予定である。はたして、今年の夏休みの宿題はどれくらい出るだろうか。それだけが私たちの心を不安にする。それに、一学期の通知表。悪かったらどうしよう、もし悪かったら予定がなくなっちゃうかな、とよく二人で話し合ったものである。しかしそのことは、一学期が始まる前に二人で、良い成績をとろうと打ち合わせてあった。だからそのことは少し安心していた。いよいよ私たちは楽しい夏休みを迎える。

「古葉君」

江藤先生が要を呼ぶ。要は席を立ち、体を硬くしたまま教卓に向かって歩く。

江藤先生は私たちのクラスの担任で一年生のころから引き継いでいる。女の先生で、外見は優しそうなのだが、怒れば恐く、悪いことは悪いと公平にジャッジを下す、親しみやすい先生である。クラス編成も無く、私たちは一年生と同じまま、学年が上がったのである。唯一変わったことといえば、教室が玄関から遠い位置に変わったぐらいしかない。

「古葉君、今回の成績は良かったよ。どうしたの？」

「今回は頑張ったから」

要はいつもより、かなり照れているようだ。そして安心したように大きく息を吐く。

「ま、夏休みはほどほどに勉強して、いっぱい遊んで、また来学期

に会いましょう。子供のうちにしか遊べないことはいっぱいあるからね。勉強より大切な…ま、いいや。ということで、夏休みは大いに遊んでください。じゃ、次、古葉さん」

要はこちらを見て心配そうな顔を見せた。私は要とすれ違い、教卓に向かって歩く。その際、私の胸の鼓動が早くなった。これで、私の今年の夏休みが決まる。いつの間にか私は教卓の横にきていた。

その時、私の頭の中に、今年の初詣の回想が映し出された。

「はー」

私は息を吐いて手を温めた。そしておみくじと書かれている六角形の箱をお母さんに取ってもらい、シャカシャカと振る。そして出てきた棒の先端に書いてある数字と、引き出しに書いてある数字が同じの引き出しを開ける。この開けるときのドキドキ感がたまらない。一番下から二番目の引き出しであったので、私でも手が届いた。そしてそこからおみくじを取り出し、真ん中に巻いてある紙をとっておみくじを開いた。しかしその字が読めなかった。

「お母さん、これなんて書いてあるの？」

去年とは違うことは確かであった。書いてある漢字が違うからだ。

「ん、これは…凶、ね」

お母さんは苦笑いをつくった。私はすかさず聞き返す。

「キョウって何？」

お母さんは苦痛そうな顔をして答えた。

「ん…これはね、ええと…あなた何だっけ」

お母さんはお父さんに振った。お父さんはぎょっとした顔をして、どうしようかと迷っていた。しかしあることを思いついたのか、すぐにもとの顔に戻った。

「凶っていうのはな、まぁ、簡単に言うと…そう、去年のよりも悪いっていうやつなんだけど、めったにこれを引くことができないんだ。つまりだな、当たりであって、はずれでもある、オールマイティなものなんだ。分かった？」

「うん、分かったけど…今年の運勢は？」
お父さんはたじろいだ。そしてお母さんと同じように苦笑いをつくった。
「ん…ん、えーと、そうだな。正直言って…悪い、運勢なんだ」
「ふーん」
私は決して落ち込まなかった。どっからあふれてくるのか、変な自信が私のことを幸せにすると言っている。私もその自信を信じている。
お父さんは励まそうとしたのか、私に明るく言った。
「でもな、大丈夫なんだ。悪いおみくじを引いた時は、枝におみくじを結びつけて、そのおみくじの効果を天の神様になくしてもらうんだ。でも、良いおみくじを引いた時も枝に結び付けて、今度は天の神様にそのおみくじの通りにしてもらうんだ。良いおみくじは良い効果を、悪いおみくじは厄除けになるんだ」
「へー」
私はちらりと要の方を見た。要は引き出しを引いているところだった。私はすぐに要のもとへ駆け寄り、要の運勢を見ようとした。
「ねぇ、早く見せてよ」
「ん…うん」
要は真ん中の巻紙をとり、おみくじを開いた。
「小吉…」
そう言うと、要に笑みが広がった。

あー、いいなー要は。運勢も良くて成績も良いし。今年は要にとって、すべてにおいて良い年なのかもしれないなぁ。あの時くじなんか引かなきゃ良かった。それに代わって私は…。
何だか自分のことが悲しくなってきた。しかし、あの時にあふれてきた自信を、すぐに取り戻した。
「古葉さん、今回の成績は…」
深雪は息を飲んだ。

「ん、ん…まあ、平均より良いってとこだけど…可もなく、不可もなく…ま、次、頑張りましょう。じゃ、次、佐川さん」
私はそれを聞いて安心した。平均より良い。それだけが聞けただけで安心だった。私は胸を躍らせて自分の席に戻った。
「どうだったの、深雪」
その声の主は幸恵だ。そして横から聖子が顔を出す。
「深雪、見せて」
二人は私の親友である。幼稚園のころから二人に出会って、私は何回も二人に助けられてきた。しかし、私は彼女らの役に立ったのかは知らないのだが、私はこよなく二人のことが好きである。いつまでも一緒にいたい、私はそう思っている。
「ねぇ、見せて。お願い」
幸恵と聖子は私に頼み続ける。今回の成績は前のより悪かったので、初めは拒んで見せようとはしなかった。しかし二人の強情さに骨が折れて、結局見せることになった。
幸恵は通信簿を開き、聖子と顔をそろえて通信簿を覗き込んだ。
「いいじゃない。見せないものじゃないと思うけど…私の見る？」
「うん、見せて」
幸恵は自分の机に戻り、通信簿を持ってきた。
「はい、これ。聖子、後で見せてよ」
「大丈夫だって、心配しなくても、だいじょーぶ」
私は通信簿を開き、聖子が私の隣に来て、一緒に通信簿を見た。
「すごーい、幸恵。よくこんなのとれるね。たいていの人じゃ、こんなのとれないよ」
「へへ、すごいでしょ」
幸恵は得意げに言った。そして私たちは笑った。なんとその通信簿には、すべての項目が3が記されていたのだった。私の通信簿には4と5もチラチラあったのに。もしかして、この三人の中で私が一番頭がいいのか。私はそう思うと、嬉しくてたまらなくなった。
「…望月さん」

江藤先生が聖子のことを呼んだ。聖子はどうしよう、というような顔をして、こちらを見た。私と幸恵は頑張れ、とエールを送った。そして聖子は教卓へゆっくりと歩いていった。
「望月さん、えーっと、今回は…」
二人の話は始まった。
何もすることがなくなった私は、幸恵と話し始めた。
「ねぇ、今年の夏休み、何かする？」
幸恵は待ってました、と言わんばかりの表情をつくった。
「今年はね、家族で旅行するんだ」
「え、どこに行くの？」
聞いてもしょうがないことを聞くのはなぜだろう。私はいつもそう思う。しかし幸恵は楽しそうに話をする。
「なんと海外なんだよ。どこかというとね…あれ、どこだっけ」
幸恵は考え込み始めた。
また一人になってしまった。しょうがないので教卓の方を見た。聖子はうれしそうな顔をしている。そして楽しそうだ。話は長くなりそうであった。
「ふ…ふ…何だっけ」
幸恵の頭の中には頭文字まで浮かんでいるようだ。頭文字が「ふ」なら、私に思い当たる節があった。
「もしかして、フランス？」
「あっ、そうそうそれ。フランスだ」
幸恵は笑っている。
その時、聖子が戻ってきた。さっきとは違い、うれしそうな顔をしていない。
「はい、これ」
「あ、きたね。どれどれ…」
幸恵は通信簿を受け取り、広げて見た。するとすぐに幸恵の口が開いた。私も幸恵の後ろに行き、聖子の通信簿を覗いた。
「何これ」

なんとその通信簿は体育と図工を除いて、オール5だったのだ。
「ありえないっしょ」
私と幸恵はその通信簿に見とれていた。私が聖子を見ると、すぐさま聖子は照れた。
「聖子、今までこんなに良かったの？」
「ん…うん…」
聖子は何だか気まずそうな表情をつくった。

チャイムが鳴り、私はいつものように、幸恵、聖子と一緒に帰った。二人の家は、私の家から徒歩一分もかからないところにある。
学校を出て、公園の脇を通り、交差点を渡った。夏休みについてだけの話題で帰り道は十分に楽しめた。聖子も楽しそうに話している。二本道に出ると、幸恵は左に曲がった。
「じゃあね、今度は…八月の…ま、いいや。じゃあね」
「じゃあね」
幸恵は走り去った。
私は聖子とともに右の道へ曲がった。そして私たちは変わらずに夏休みについての話を続ける。しかし私は気になることがひとつあった。それを聞き出すべく、私は聖子に問いかけた。
「ねぇ、聖子。話し変わるけど、あなたって、いつからそんなに頭が良くなったの？」
突然のことに聖子は黙った。笑っていた顔が、だんだん険しくなっていった。そして元気の無い声で聖子は言う。
「わたしが頭良いの、イヤ？」
予想外の返答に私は戸惑った。
「え…ええと、イヤ…じゃないよ」
「そう、良かった」
聖子に笑顔が戻った。そして聖子は話を続ける。
「えっとね、あたしのお父さんとお母さんさ、有名な大学を卒業したの。だから、お父さんとお母さんが、有名な大学に入ってほしい

って、かなり期待しちゃって。だからさ…」
「…そうなんだ」
その後の二人は、三つの分かれ道に出るまで黙っていた。そして私が左に曲がろうとした時、聖子が笑顔で私に声をかけた。
「じゃあね、深雪。また」
「うん、じゃあね」
私はその声を聞けてホッとした。聖子は笑顔のまま前に向き直り、前方の道を進んだ。聖子の背中は何を語っているのだろうか。なんだか寂しさが感じられた。私は聖子が道の角に曲がるまで見届けた。もう一生会えない友達を見届けるように。

「ただいまー」
「おかえりー」
居間で要の声が聞こえた。私は居間に入り、ソファーにランドセルを投げ出した。要はもう、夏休みの宿題に取りかかっていた。
「ねぇ、お母さんは？」
「買い物か話」
「あー、またか」
私は落胆した。お腹が空いて、今にも倒れそうだった。しかし、その空腹も要の通信簿を思い出したらすぐに忘れてしまった。
「あ、そういえば、成績どうだったの」
私は不敵な笑みを浮かべた。
「まあまあ」
「何それ」
私は要の通信簿を見るべく、要のランドセルに飛びついた。
「おい、何すんだよ。やめろよ」
要の怒声が居間に響く。私はそれに構わずにランドセルを素早く開け、通信簿を抜き出した。そして要からなるべく遠い位置に逃げ、通信簿を見る。しかし皮肉なことに、成績は私よりも明らかに良かった。

「返せよ」
要は私の背後から腕を伸ばし、通信簿を取り返した。私はすぐに背後にいる要を見た。
「あんた、いいじゃない、成績」
「まあね」
要は照れそうに頭を掻いた。
「ただいま」
お母さんが帰ってきた。
「おかえりー」
私は玄関へ急行した。
「あら、どうしたの深雪、そんなに頑張っちゃって」
「お母さん、私の通信簿、見て。早く」
私は再び居間に入り、ランドセルから通信簿を取り出した。
「お母さん、見て。今回の成績、良かったんだよ」
「そうなの」
通信簿は私の手から買い物袋を持っていないお母さんの手へと渡った。お母さんは通信簿を見た。
「あ、本当だ、良いじゃない。どうしちゃったの、深雪」
「へへへ」
私は今日初めて照れた。しばらくほめられることは無かったので、久振りにほめられるとうれしかった。お母さんは私を引き寄せ、頭をなでた。
「えらいね」
私は完全に有頂天になっていた。私は何となく要をふと見ると、要はこちらをじーっと見ていた。私はその姿を見て、少し気にかけた。
「お母さん、要の成績もすごいんだよ」
「そうなの、要、見せて」
要の顔は見えなかったが、背中がうきうきしている。私はお母さんから離れ、ソファーに座った。要は通信簿を持って、お母さんに

それを渡した。
「…え、何これ」
お母さんはわが目を疑っているようだった。
「すごい…じゃない。どうしたの、要」
お母さんは私と同じように、要を引き寄せて頭をなでた。要は気持ち良さそうだった。そして猫のように、お母さんに身を寄せた。それを見て、私はいい気分になった。要はこの上なく幸せそうであった。しかし私はその些細な幸せを壊すのであった。
「ねぇ、お母さん。昼ごはん、何？」
お母さんは気付いたように、要から手を離す。
「あ、そうだわ。今日はね、焼きそばよ」

夏休みに入り、もうすでに十二日が過ぎようとしていた。要は昨日のうちに、アサガオの観察を除いては、宿題をすべて終わらせていた。私はというと、絵画とアサガオの観察だけが残っている。なので、私は今日のうちに絵画を終わらせることを決めた。早く要のようにだらだらとした生活がしたい。憧れのだらだら生活を目標に、私は張り切った。
夏の昼下がり、私は筆を握っているだけで手から汗が噴き出した。残りのここを塗れば終わりだ、私は自分を励ますように心の中で言った。
「深雪、ハサミある？」
ノックもしないで、突然部屋に入ってきた要のせいで、私の筆は塗る場所からはみ出してしまった。私は要を責めた。
「ちょっと、あんたのせいではみ出ちゃったじゃない」
要は絵を覗き込んだ。
「そっちのほうがきれいに見えるよ」
要は素直そうに言った。いくら人から良く言われても、やはり自分のやりたい通りにしたかった。しかし私のどこかで、要の言うことを少し信じていたようだ。

「ほんとに？」
私は信じがたい声で言った。
「うん、だってさ、それって葉っぱでしょ。そうだったら緑の上に黄色を重ねて塗れば、太陽に照らされて光っているように見えるじゃん」
「そうなの？」
私はまた信じがたい声で言った。そして、私はまじまじと自分の間違って重ね塗りした葉っぱを見た。すると、確かに要の言うとおりであった。
「ほんとだ」
「だろー」
要は嬉しそうであった。
「ところでハサミどこ？」
「知らない」

ついにアサガオの宿題も終え、夏休みの宿題は無くなった。いよいよ前から予定していた旅行の日の前日になった。家中は大騒ぎになっている。お父さんとお母さんは、あっちへこっちへとあわただしく動いている。私と要はというと、海へ行くので、スコップにバケツを玄関の脇にそろえた。バッグには財布、本などを詰め込んだ。私は初めての旅行に胸を躍らせている。おばあちゃんの家ではなくて、ホテルに泊まるのは初めてであった。明日が待ち遠しい。私はバッグに次々と自分の荷物を詰め込んだ時、隣の部屋から声が聞こえた。
「深雪、僕のあれ知らない？」
「あれって何よ」
「あれって、あれだよ…ん、何だっけ」
要は黙った。私は再度荷物をバッグに詰め込み始めた。きれいに入れようとしても、なかなかできない。そしてすべての荷物がバッグに納まると、下の階からお母さんの声が聞こえた。

「深雪、要、用意し終わった？」
「うん、用意したよ」
「まだ…何だっけな」
要はあれが何かを思い出そうとしているようだ。私はすることがなくなったので、とりあえず下に降りて、居間に入った。
「ねぇ、お母さん。明日は何時に出るの？」
お母さんとお父さんは一段落ついたのか、いすに座ってお茶を飲んでいた。
「明日か…あなた、明日は何時にする？」
お父さんはお茶をするのをやめた。
「明日か。そうだなぁ…早いほうがいいか？」
「うん」
「そうか」
お父さんはお茶の入ったカップを口に近づけた。しかしすぐにお茶をテーブルの上に戻した。
「じゃ、五時半はどうだ。行きは寄りたいところもあるし、芳江、それでいいか？」
「五時半か、早いな…ま、いいか」
「よーし、決まりだな。明日は五時起きだ。深雪、早く寝ろよ」
私は本当に早いな、と思ったが、自分で早いほうがいいと言ってしまった限り、その予定に反対できなかった。
「うん、分かった。で、要にも言っとく？」
「ああ、歯磨きをちゃんとしてから寝るんだよ」
お父さんはまたお茶の入ったカップを口の近くまで持ってきた。しかし、私はその次の動作を封じた。
「おやすみ」
私は歯磨きを済ませ、二階に上がった。そして私はすぐさま要の部屋に向かった。私が部屋を覗いた時、要はまだ荷物をバッグに詰めていた。

「要、あれ、見つかった？」
「ああ、あったよ」
「ねぇ、あれって何だったの？」
要はこちらを見てにこっと笑った。
「教えない」
「何よー、それ」
要は立ち上がり、本棚から文庫本を取り出した。
「もしかして、あれってそれのこと？」
「違う」
要は文庫本をバッグに詰めた。そしてすべてが詰め終わったのか、バッグのファスナーを閉めた。
「気になるでしょ。教えなさいよ」
「いやだ」
「私が夜眠れなかったらどうするの」
「どうもしない」
要はまったく引こうとはしない。しょうがないので、私はちょっとしたハッタリを使うことにした。
「あーあ、明日のこと、ちょっと教えてあげようかなぁて思ったのに」
「え、何かあるの」
予想通り、要は食いついてきた。
「教えてあげようか？」
「いいよ、別に」
「え？」
意外な返答に困った私は、もう引くことしかできないな、と思った。私は部屋を出ようかとすると、背後から要の声が聞こえた。
「じゃあ、僕が教えて、お前も教えるんだったらいいよ」
私はまたこの意外な話にびっくりした。要も少しは気になったのだろうか。そこで、私はそれを機に仕掛けることにした。
「それでいいよ。じゃ、私が後で話すから、あんた、先に話してよ」

「何で」
要はかなり不満そうな顔をした。
「あんたが持ち出した話でしょ。あんたから話なさい」
「えー…まぁ、いっか。じゃあ、お前もちゃんと教えるんだぞ」
「分かった」
要は疑い深そうな眼でこっちを見た。しかし軽快な口調でひとつの単語を言った。
「ポータブル・シーディー・プレーヤー」
「え」
それを聞いた時、確かに気持ちはスッとしたのだが、その反面、何だ、こんなのだったのか、という心があった。
「何だよ、悪いか」
「別に」
要は少しはずかしめていた。
「で、お前のは何だよ」
「教えない」
「は？」
要は意外と本気で怒り始めた。これはまずいと思ったので、すぐになだめた。
「ジョークだよ」
私は要に作り笑いを見せた。
「実はね、明日は五時起きで、五時半に出発なんだよ」

海がそのまま映ったような青い空。天高くそびえる山のような真っ白な雲。銀色に輝く大海原。そして白く光る砂浜。私は海に向かって砂浜の上を歩いている。背後ではお父さんとお母さんがパラソルを立てていた。要は砂の上に寝そべっていた。周りには私たち家族以外には誰もいない。私は海に足をつけた。すると、すぐに暗闇が迫ってきた。これから雨が降るのだろうか。そしてその予測が当たり、空からはポツポツと雨が降り始めた。私はすぐに後ろを振り

返る。そこにはさっきまでいたはずの三人がいなく、海が延々と続いていた。周囲を見ても、海、海で、どこまでも続いていた。陸ははるか遠くにも見えない。そして気付くと、私の体は吸い込まれるように、海のそこに引きずり込まれた。いくら叫んだところで、誰もいるわけがなければ、助けが来るわけでもなかった。しかし私は必死に叫び続けた。ほんの少しの可能性を信じたのだ。そして顔が水につかろうとしたその時、私の周りの水が渦を巻いて、天高く消えていった。海は空になったのだった。太陽も雲の隙間から顔を覗かせ、私は手を広げて天を仰いだ。そして私は周りを見回した。するとまぶしい太陽の光が目に飛び込んだ。

「…雪、深雪、朝だよ、起きろ」

お父さんの声が聞こえた。私は一瞬にして別世界からこの世界に戻ってきたらしい。

「深雪、早く起きなさい」

お父さんは隣の部屋へ行ってしまった。

「要、要、朝だよ」

私は朝に弱い。だから今はどんなところに行くよりも、この布団の中にもぐっていたいというのが本心である。しかし私は人の迷惑にかかることは好きでなかった。私は布団から出て、昨日のうちに用意しておいた水着に着替え、その上に服を着た。

「あら、もう起きたのか。えらいな」

お父さんはそう言うと下に降りていった。私は荷物を持ち、お父さんに次いで下に降りた。

「おはよー」

「おはよ」

居間に入ると、お母さんはすでに準備が終わっていた。

「お母さん、張り切っているね」

「そんなことないわよ。でも、旅行なんて新婚旅行以来だからなぁ」

お母さんは新婚旅行のことを思い出しているのか、手の上にあご

を置きながら、頭の中が飽和状態のようだ。私がいくら新婚旅行のことを聞いても、まったく聞いていないようだった。
しばらく時計の音を聞いて暇をつぶしていた。そして三分ぐらい立つと、要が上の階から降りてきた。
「おはよー。あれ、父さんはどこ？」
そういえばさっきからお父さんの姿が見えなかった。普通なら探しているものはすぐに見つからないのだが、探している人は見つかるようだ。お父さんは要に続いて居間に入ってきたのだ。
「もうそろそろ行くから、早くトイレを済ませてこいよ」
私たちは車に荷物を積み込み、いつもの席に座った。車は私が幼稚園にいた時に買った新車で、たいして使ってないので、まだピカピカであった。
「忘れ物、ない？」
お母さんは車に乗り、シートベルトをしながら言った。
「ないよ」
「ない」
私と要が声をそろえて言った。
お父さんも乗り込み、エンジンをかけた。
「じゃ、行くぞ」
車はゆっくりと動き出した。予定より早く出ることができた。さあ、いよいよ初旅行だ。たくさん楽しむぞ。私はひとり意気込みを入れた。

車は走る、風を切って、どこまでも、どこまでも。
朝食を食べていなかったので、コンビニに寄り、パンを買って食べた。朝のコンビニや公道には、人も車もあまり見かけなかった。
途中で墓地に寄ったが、二、三分で用が終えた。そういえば、今日はお盆の最終日であった。
そして車はいよいよ高速道路に入り、車のスピードは上がった。

私の心は喜んでいる。車のスピードが上がると、楽しくなってくる。もしかしたら、海にだんだん近づいている、というワクワクの気持ちなのかもしれない。すれ違う車は光を残して、過ぎ去っていく。私はすれ違う車の数を数えて楽しんでいた。

すると、高速道路を仕切る、壁の向こうの空が明るくなってきた。そして太陽がさんさんと地上に光を降り注いだ。道路と反対側の道路の間の木は、うれしそうに葉っぱと踊っていた。

途中にパーキングエリアに寄り、用事を済ませて、車は再び走り始める。

三時間ぐらい走ると、銀色に輝く光が目に飛び込んだ。海だ。ついに着いたのだ。私は興奮し、寝ている要を起こして、海が近いことを教えた。要は寝ぼけた目で、窓から海を眺めた。少し目を凝らし、目の上に手をかざした。

「きれい…」

要は素直な気持ちをこぼし、目の前の銀色に輝く海に見とれている。私はたまらなくなって、前方を見て言った。

「あと何分ぐらいなの？」

「うーん、そうだなぁ…保障できないけど、三十分ぐらいかなぁ」

「三十分…」

私はこんなに近くにある海なのに非常に遠くに感じられた。

車を止めて、私と要は車を飛び出す。背後でお父さんの声がしたので、その場に立ち止まった。お父さんはパラソルとクーラーボックスを担ぎ、母さんはというと、シャベルだけであった。

「早く早くー」

私は我慢できなくなって、石階段を上がり、堤防の上に立った。

その景色は夢と同じだった。

海がそのまま映ったような青い空。パレットから絵の具がこぼれたような真っ白な雲。太陽のように、銀色に輝く暖かそうな大海原。そしてまぶしく光る、白い砂浜。まったく同じ景色が目に焼きつい

た。ただ、たくさんの人がいるのだけは違った。
「ちょっと待ちなさい」
今度は背後でお母さんの声が聞こえた。私は一人張り切っていた。要はこちらに向かって歩いているし、お父さんやお母さんだってまだ十メートルぐらい離れたところにいる。
「早くー」
そんなことを言ってみたが、私はここで待つことにした。来て早々、迷子にはなりたくなかったからだ。
三人はやっとのことで、堤防に着いた。
「さて、どこにしようか」

その後は時間も忘れ、海で砂浜で遊んだ。昼はラーメンを食べ、温まった体を海の水で冷やす。お父さんは私たちと遊んでくれたが、お母さんはパラソルの下で、サングラスをかけて眠っていた。そして時間はあっという間に過ぎ、いよいよ上がる時間がきた。まだ日は高い位置にあった。しかし、明日も遊べるということなので、私たちは潔くホテルに向かうことにした。シャワーで体を流し、ホテルに入った。

ホテルは海の目の前に位置し、かなり古い感じがした。悪いと思うが、はっきり言って今にも崩れそうだった。チェックインは僕たちが遊んでいる間に、母さんがいつの間にか済ませていた。僕たちは母さんの案内で部屋まで案内された。
外見のわりに、中はきれいな和室だった。お盆中なのに、このホテルには客が少ない。やはり外見が悪いのだろうか。しかし父さんと母さんがここにしようとしたのは、やはり価格らしい。そのおかげで二泊できる。
僕らは荷物を置き、一度座った。そして家族そろって息を吐いた。部屋は冷房がよく効いていて涼しかった。しかし効きすぎて寒くなった。そこで父さんはひとつのことを提案した。

「暇だから、外へ散歩をしに行くか」
僕はここから出たかったのでこれに賛成した。深雪も賛成した。
「私はパス」
母さんは畳の上に寝転がった。
僕と深雪と父さんで、ホテルを出て海岸に出た。赤い夕陽が海を真っ赤に燃やしていた。その中をまだ、泳いでいる人がいる。
「きれいだな」
父さんは今の気持ちをそっくりそのまま声に出した。僕もその景色を見て、父さんと同じように心が打たれた。
そして僕たちは海岸の端から端までを一往復した。

外は少しずつ、闇が迫ってきていた。
部屋に戻ると、母さんは座布団を枕にして、寝ながらテレビを見ていた。
「お帰り」
そう言うと母さんはあくびをした。僕も座ってテレビを見ようとした。その時、父さんはまたもや提案をした。
「お風呂行かないか」
「それなら私も」
母さんは起きて、風呂へ行く準備をする。どうやら風呂へ行かなくてはいけないようになってきた。しょうがないので、流れに逆らわず、なるように任せた。
僕らは部屋を出て、エレベーターに乗った。
「何階なの？」
母さんはすでにボタンを押そうとしていた。
「一階」
母さんはボタンを押した。エレベーターの扉は閉まる。しかし母さんはすぐにあることに気付いた。
「えっ、一階ってロビーじゃない。だいじょうぶなの？」
「一階に降りてから、下に降りれる階段があるんだ」

「へー、変わってるね」

一階に着くと、人はまったくといっていなかった。

エレベータから降りて、右に歩いた。そして端にある階段を降りて、自動販売機の脇を通り、「風呂」と書かれているのれんをくぐった。

「じゃ、入り終わったら…部屋でいいよな」

「うん、いいよ」

僕と父さんは「男」と書かれているのれんをくぐった。

風呂に通じる扉を開けると、室内は湯気で立ち込めていた。

「わー、すげぇ」

そこには広いジャングル風呂が広がっていた。入っている人は誰もいない。水と水が触れ合う音が、室内に響いた。右のほうには初めて見る、釜のようなものがあった。中を覗くと、お湯が入ってあった。

後ろからドアの開く音がした。

「父さん、これ何？」

父さんはこちらに向かって歩いてきた。

「ああ、これか。これは五右衛門風呂だよ。まぁ、ちょっと違う感じがするけど…まぁ、単に釜風呂でいいんじゃないかな」

「へー」

僕は釜風呂の底に何があるのか見ようとした。

「それにしても広いなー。ここにあるのがもったいないくらいだ」

父さんは辺りを見回して感心している。

「よーし」

僕は気合を入れてジャングル風呂へ真っ先に飛び込んだ。

「あー、気持ち良かったー」

僕はジュースを片手に、自動販売機の前にいる。父さんはトイレ

で、脱衣所からまだ出てきていない。その前に女風呂から母さんが出てきた。
「あれ、深雪は？」
母さんは不思議そうな顔をしている。そして男風呂から父さんが出てきた。
「はは、奇遇だな」
「ねぇ、あなた。深雪がどこにいるか知ってる？」
「えっ、もしかして、いないのか」
「うん、この自販機の前にいてって言ったのに、いないの」
「もしかしたら、部屋の前にいるかも。行くぞ」
僕らは小走りで階段を上がった。そしてロビーに着くと、父さんは僕に言った。
「要はここにいて、深雪が戻ってくるかもしれないからな。分かった？」
僕はこれが非常に大事な任務だと思った。
「うん、分かった」
二人はエレベーターに乗り込んで行ってしまった。
僕はロビーに設置されているソファーに座った。辺りを見回し、深雪がいないか確かめた。しかしいるはずがなかった。その時、受付にいる人たちの話が耳に入ってきた。
「あの女の子、一人で外なんかに行って、大丈夫かなぁ」
「そうね、風がなくて、まだ少し明るくても、一人でねぇ」
僕はその話を聞いて、すぐに深雪だと思った。
気付いたら僕は、出口に向かっていた。そしてすぐに海岸に出た。確かにうっすらと光は残っているものの、ほぼ闇の中であった。僕は左から右へ首を回した。しかし、暗くて人がいるかよく分からなかった。
「みゆきー、どこだー」
左方に向かって叫んだ。しかし波が小さくささやきあっているだけで、深雪からの反応はまったくなかった。

今度は右方に向かって叫んでみた。しかしまた波がささやきあっているだけであった。
僕はなんの反応がなかったのが恐かった。もしかしたら…そんなことを考えるだけで、体が震える。
とりあえず海岸を一往復しようと思った。僕は右方に向かって歩きだした。そういえば、さっきの散歩に比べて、潮が満ちてきている。これはまずいと思った。僕は走り始めた。そして次の瞬間、何かに足が引っかかって、砂の上に横になった。僕はすぐに、何につまづいたのかを調べた。するとそこには、ビニール袋があった。僕はうさ晴らしに、そのビニール袋を砂の中から引っ張り出した。そしてそのビニール袋を砂の上にたたきつけた。僕の目は自然と、ビニール袋があった場所に戻った。するとそこには、赤い何かが埋まっていた。僕はそれが気になって、掘り出してみた。
「巾着…」
それは深雪がいつも携帯していた巾着であった。もしかして、もう遅かったのだろうか。僕の体が勝手に震え始めた。そして突然背後からしゃくり声が聞こえた。
「か…なめ、な…んか、よん…だ?」
僕は後ろを見た。そこには泣いている深雪が立っていた。
「かな…め、なに…か、よう…な…の?」
「お前がいきなりいなくなるから、父さんと母さんが心配してんぞ」
「お…とうさ…んと、おか…あさんが?」
「もう何にも言うな。行くぞ」
そう言って僕は深雪の腕をつかんで引っ張った。しかし深雪は僕の手を振りほどいた。
「い…やだ。まだ…見つかって…ない」
「何が?」
そう言うと僕の頭に、ひとつの物が浮かび上がった。僕は手中の赤い巾着を見て、深雪に差し出した。
「もしかして…これ、巾着のことか?」

「あ、そ…れ」
僕は巾着を深雪に渡した。
そういえば深雪はどんな時もこの赤い巾着を持っていた。いつも大事そうにポケットにしまっている。何で大切なのかを問いだしては見たものの、おばあちゃんからもらった、としか言わず、まったく教えてくれない。なぜだろうか。
「あ、これ…だ」
深雪はうれしそうな顔で言った。
「あ…りが…とう」
深雪の目からは、涙が溢れ出してきた。
深雪の泣き虫は昔から変わっていなく、治ってもない。いつもの変わりがない深雪が深雪の中にある。些細なことですぐ泣くところなんて、まったく変わっていない。変わらないことほどすばらしいことはない。誰もがうらやむ、素晴らしいことだ。
僕はこれを機に、その巾着のことを聞いてみることにした。
「そういえば、なんでその巾着が大事なの？」
「へへ、ひ…みつ」
その巾着にはどれほどの価値があったのだろうか。そのときの深雪には、まだ分かるはずもなかった。
空は完全に暗闇で覆われていた。早くホテルに戻らねば、父さんと母さんが心配する。僕は深雪の腕を引っ張り、ホテルへ走った。

第七章　家族の絆

桜の季節は終わり、もう海の季節になったかと思うと、あっという間に台風とともに秋が訪れた。私はこの季節になると、無性に楽しくなる。なぜなら食べ物なりスポーツなり読書なりと、紅葉と同じく彩り緑の季節になるからだ。

外を歩くと、もみじとイチョウの色合いに見とれて、ついつい公園のベンチに腰を下ろしてしまう。時々緑色のイチョウもあって、少し早いクリスマスを思い立たせる。

しかし銀杏のにおいはたまらない。あれさえなければ完璧なのに、なんにでも欠点があることを改めて実感する。

空を見上げると、きれいな海のように澄んでいて、雲は魚のように見えた。すると大きな黒い魚が、右から左へ移動した。風は雲と落ち葉を運ぶ。いったいどこへ連れて行くつもりなのであろうか。

私は腕を頭の後ろに組み、大きく体を伸ばす。そしてお日様の光を浴びて、光合成をする。これが私の習慣である。

今日も家事をこなすと、お昼を食べ、茶色のダウンを着る。そして晴れ晴れとした外へと飛び出し、いつもの散歩コースを歩く。家でゴロゴロするなんてもったいない。疲れていても、何かやるより何もしていないほうが疲れる。このことを知らない奥様たちはかわいそう。

秋風に吹かれ、頬の熱を一気に取り去る。だが、私はそのことを寒いとは思わなかった。こんな風より冬のほうが寒いに決まっている。常にプラス思考、これが私のモットーだ。

しかし風はやまずに、次々と冷たい槍を突き刺すかのように吹く。今日はなんだかいつもと違う感じ。なんかイヤだ。私はそんなことにかまわず、ずんずんといつもの散歩コースを進んでいった。

その時であった。風は私を追い返すかのように突然吹いた。そし

てその勢いを加勢するかのように、槍を持った小さな妖精たちが大群となって襲ってきた。妖精は無様にも地面へ落下していくものもいれば、私の体に攻撃してから散っていくものもいた。そして一人の妖精は私のダウンにしがみついた。しかしすぐに妖精を取り払い、急いでもとの道に戻った。

「ただいま」
玄関に入って、すぐに靴が多いことに気付いた。
居間に入って、また同じ言葉を繰り返す。
「ただいま」
「おかえりー」
深雪はソファーの上でぐったりとしていたが、要の姿はどこにも見当たらなかった。
「あれ、要は」
私は要のランドセルがもうひとつのソファーに投げ捨てられているのを見て理解したが、深雪は顔をうつぶせにしたまま言った。
「友達の家に行くって言ってた。それより、お母さん」
深雪は顔を上げる。
「また玄関のドアを開けっ放しにしたまま出かけたでしょ。うちは盗まれるものないけど、少し無用心じゃない」
「はいはい、ごめんなさい」
ふと時計を見ると、出かけてからまだ三十分しかたっていなかった。
私はすぐに空いているソファーの席を確保して、リモコンを手に取りテレビをつけた。チャンネルを次々と回しても、ろくな番組がない。しかしそんな中で、この中でもっともマシだと思える番組にした。
私が何も考えずにボーっとテレビを見ていると、深雪は突然身を乗り出して、不安そうな声で言った。
「ねぇ、お母さん。今度、運動会があるじゃん。来てくれるの？」

私はその返答に迷った。なぜなら、私の体がどうなるのかが分からないからだ。去年は風邪、一昨年は腹痛で、雄治が撮ってきたビデオを家で観賞しただけだ。今年こそは是が非でも行きたいと思っている。だから今回は自分に意気込みを入れえるために、私は少し無理をして言った。

「うん、いくよ。今年は頑張っちゃおうかな」

私は深雪に微笑みかけた。

「本当に」

深雪は天井にぶつかる勢いで飛び跳ねた。

しかし今考えてみると、やはり無理のある約束かなと思った。私は少し言葉を付け加えようかと思ったが、うれしそうな深雪の笑顔を見て、ついほころんでしまった。そんなことを考えている自分が、何だかばかばかしくなってきたのだ。しかしそういう特別な日に限って体が弱くなる。どんなことであろうとまだ不安だ。

さて、運動会の日はどうなるか、今考えても気が遠くなりそうだ。今から自分の体にお願いをして、自分でしっかり管理しなければ。私は改めて気合を入れた。

「古葉さーん」

私は声のする方を向いた。その声は峰倉さんだった。

「古葉さん、お買い物？」

「あ…はい、そうですけど…」

近所のおばさんたちに比べると一番付き合いやすい人なので、仲良くしてもらっている。しかも家の隣の隣が峰倉さんの家なので、さらに付き合いやすい。

しかしいつも私と峰倉さんがこうやって一緒にいると、大抵他のおばさんが出てくる。だからまともに二人だけで話し合える機会というのは、互いの家に相手を呼んだ時だけであった。

「いまから、お茶でもどう？」

「え、もうお昼ですし、お昼食べてからにしますよ」

「いえ、うちで食べていって下さい。一人で食べるのは、ちょっとさびしいし…」
「え、でも、本当に悪いですよ」
「いえいえ、遠慮なさらずに…」
「え、でも…荷物置いてきたいんで…」

「ふー」
家に着くと、ようやく開放された気分になった。外の空気もいいが、一緒に住んでいる家族の空気もいい。
私は約束を守るべく早急に荷物を片付けた。
そしてすぐに家を出てカギを確かめると、峰倉さんの家へ向かった。峰倉さんと二人きりで話すのは何年ぶりだろう。どれだけ近所のおばさんたちによって、ことごとく私と峰倉さんだけの話をつぶされたことだろう。そんなことを思うと、胸がスーとした。峰倉さんは年上だし、人生のことや子供のことについて気を楽にして話せる。
どんなことを話そうか。私は胸をいっぱいにして、うきうきした歩調で歩いた。

「はーい、はい、待っていましたよ」
峰倉さんは私を中へ招き入れた。
峰倉さんの家は非常にきれいに整っていて、各家の独特のにおいを発していた。そのにおいは別にくさくもなく、あえて言うのであれば気にならない、といったにおいであった。私は峰倉さんの後をついていき、そのまま居間に入った。
「さぁ、どうぞ」
峰倉さんはイスに指差して、台所へと入っていった。私は峰倉さんの言うとおりに、指定されたイスに座った。すると峰倉さんは、今まで見たことがない料理を持って、台所から出てきた。言ってはいけないが、けっこうおぞましい。

「なんですか、それ」
私は聞いてはいけないようなことを聞いてしまったような感じがした。自分からまずそうだと言っているのと同じような気がしたからだ。
しかし峰倉さんはそんなことを気にしないで話し始めた。
「ふふん、これはね、新作よ。誰かに感想がほしくって」
峰倉さんはなんだかわくわくしているようであった。普通の人だったら、人の口に合うか不安になるはずなのに。
「ささ、どうぞ」
峰倉さんはうれしそうだった。箸を渡され、それを食べなくてはいけない状況になり、どうしようかと思ったが、腹をくくって食べることにした。
その奇物をつまみあげ、ゆっくりと口に持っていった。ここでぽろっと落とそうとしたが、さすがにそんなことを人前ではできない。まして作った張本人の前なんかで落とせるはずなんかなかった。
口の中に入れ、舌の上に置いた。そしてゆっくり噛み始める。
「どう」
峰倉さんはやや身を乗り出し気味で聞いてきた。
しかし私はこの味に疑問を思ったのか、再び奇物を口の中に入れた。
「ねぇ、どうなの」
峰倉さんは待てない子供のようになっていた。私はこの味に確信を持てた。
「はっきり言って…おいしいです」
「ホント！良かったー」
峰倉さんは本当にうれしそうな顔であった。見た目よりも中身とはこういうことだ。
新しい料理を作るのは楽しいし、その味も楽しみだが、本当においしいかは自分では分からない。よっぽどのことでないと、丹精こめてつくった自分の料理をまずいとは言えない。

私は箸を止まらせることなく、皿から皿へと動かし続けた。
「どうしようかと思ったのよ。ちょっと見るだけでおなかいっぱいになっちゃいそうじゃない。良かったー、あなたが第一号なのよ、これ食べたの」
なんという人だ。完全に遊ばれているように思えた。
「またお願いね」
絶対イヤだ。

「そういえば、久しぶりですね。こう、二人きりで話すなんて」
「そうね。よくよく考えてみれば、外でいつも私たちが二人きりで話そうとすると、高倉さんや久間さんたちが入ってくるもんね。こうやって二人きりで話すなんて、半年ぐらいなかったわね」
「そうですね。」
私は机の上の紅茶を手にとって、口に流し込んだ。
「ところで、今度、子供たちの運動会があるんですよ。それで、子供に絶対行くって言っちゃったんです。私、病弱じゃないですか。なぜだか知らないですけど、毎年その日は病気にかかったり、つい行けなくなっちゃうんですよ。今年こそ行かなきゃって思っているんですが…どうすればいいのでしょうか。峰倉さんって、けっこう健康体じゃないですか。なにか健康の秘訣でも教えていただければと」
峰倉さんもカップに手を伸ばした。
「やっぱりメンタル面の問題じゃないかしら。心のどこかでトラウマみたいに、またなったらどうしようって思っちゃっているから、体調崩しちゃうんじゃないかしら」
「気持ちか…」
私は黒いため息をついた。峰倉さんはというと、大事そうにカップを持って、紅茶をすすりながら、カップを影に、こちらを覗いた。その時峰倉さんの目は、私の気持ちを見透えているようであった。
「でも一応、知りたいなら、私がやってる健康を保つ方法を教えて

あげる。もし自分が元気だって分かれば、気持ちの改善にもなるし、いいかもしれない」
「そうですね。教えていただければ幸いです」
「そう、じゃあ、まず…何からやりましょうか」

「へー、お子さんはもう大学二年生で…」
その後は峰倉さんの教えてくれたストレッチをしながら、くだらない世間話を続けた。峰倉さんも隣でストレッチを続ける。話しながらで、時間もついつい忘れ、外はすでに暗闇に包まれる寸前だった。そして時計を見る。
「あの、すみませんが、そろそろ帰ります。今日はありがとうございました。また、何かあったら、またよろしくお願いします」
「あ、そう…じゃあ、これ持ってって。今日食べたあれよ。余分に作っちゃったの」
「いえ、そんな…悪いですよ」
「いいからいいから」
峰倉さんは台所に入って行き、奇妙に浮いている物体が入っている透明の容器を持って出てきた。
「はい、これ。後で感想聞かせてね」
「はぁ…」
私は押し付けられた容器を返すわけにもいかず、素直に受け取るしかなかった。しかし、心の中では素直どころか、何で渡すんだよ、とかなりひねくれていた。確かにおいしいが、見た目がまずい。誰が見ても引く。絶対に雄治だって要だって深雪だって、見るだけで吐くに決まっている。ああ、この奇物の処分、どうしよう。
「じゃ、また来てね」
峰倉さんに悪気が無いのは分かっているが、こういうときにも気を使ってほしい。しかしこのままでいてもしょうがないので、とりあえず帰ることにした。もし雄治らが食べなくても、私が一人で食べよう、別に味はおいしいのであるから、と思ったのだ。

「では、おじゃましました」
「またね」
峰倉さんは小さく手を振って私を見送った。私は軽く会釈をして、開けたドアの向こうへと歩き出した。
外はひんやりとした空気が漂っており、その空気はなでるように私の頬を走った。空はかなり低く、紫色に染められていた。空のはるか彼方には、うっすらと昼の光が残っている。そして風が吹き、まるで浸透させるかのように髪の隅々までなびかせる。その時、自分の家のベランダで、何色かの色が見えた。そしてすぐにそこに何があるのかを思い出した。
「あ、洗濯物」

「ただいま」
私はすぐさま容器を玄関に置いて、階段を駆け上がり、すっかり冷えきった主寝室に入った。そしてすぐにガラス戸を開け、ベランダに入った。あまりに急いでいたので、冷たい洗濯物が顔に覆いかぶさった。
「あー、せっかく乾いたのに…」
完全に洗濯物は湿っていた。もう、どうしよう。とりあえず、すべての洗濯物を取り込み、部屋中に掛けた。
「大丈夫かなぁ」
不安になりながらも私は部屋を後にした。
玄関に置いておいた容器を持ち、居間に入った。
「おかえり。遅かったね」
深雪と要はテレビを見ていた。そして深雪はこちらを見て、私が持っている容器に気が付いた。
「なにそれ」
深雪はちょっといやな顔をした。少し白がかっているのだが、中身が見えるのであろうか。その言葉につられて要もこちらを見た。
「もしかして…また？」

要は恐怖に顔をこわばらせていた。よっぽど嫌らしい。時々峰倉さんからこういうものをもらって帰ると、二人はそろって嫌がる。やはり、確かにおいしいのだが、見た目が悪すぎる。誰も食欲を注がせない。しかしもらった限りには、食べなければならない。

「そう、もらっちゃった」

私は苦笑いをつくって、二人の共感を求めた。しかし二人は目をそらすように、テレビに目を向けた。私は重い足を台所へと運んだ。

「ごはん、できたよ」

私はできた料理を次々と食卓に並べていく。

二人は席に着き、手を合わせて言った。

「いただきます」

私も席に着き、同じ言葉を続けた。

「で、これは…何？」

深雪は箸で例の容器をさした。

「ん、これ。これは…もらったやつ」

私は誘惑を感じさせる笑みをつくってみたが、深雪と要はその奇妙な物体に釘付けになっている。私はもう食べたくなかったが、二人に食べさせるために、それを素早くつかんで口に入れた。二人は私の果敢な姿にぽかんと口を開けている。

「んん、おいしい」

「見た目がまずすぎるよ」

要はきんぴらをつつきながら、素早く突っ込んだ。その通りだと思った。私は当然言い返すことなんてできなかった。私は黙々とご飯を食べ続ける。要と深雪の食器もどんどん空になっていく。何分後のことであっただろうか。一方に減らない奇物をつついていると、深雪がそれにゆっくりと手を伸ばした。その姿を要が心配そうにじっと見つめる。もちろん私もそうだ。箸を噛みながら、がんばれ、と心の中で何回も叫ぶ。とその時、その気持ちが通じたのか、深雪がついにそれをつまんだ。そしてその奇物の汁を机上に滴らせてい

るのに気付かないで、ゆっくりと口に運んだ。口に入れようとすると、磁石が反発するように、本人の本能で拒否している。しかし決心したのか、ついにそれを口の中に入れ、一回、二回とゆっくりと噛んだ。

「どう？」

箸を口から離しながら、つい聞いてしまった。要の目はかなり真剣だ。

「ん…おいしい…」

「…へ」

要は不思議そうに首をかしげた。まさかこんなまずそうなものがおいしいはずがない。しかし要の心は、ひょんな一言で季節の変わり目のように、一瞬にして変わった。そして要の箸は奇物をつかみ、口の中に入れた。舌触りが悪かったのか、うっ、と小さく呻いてまずそうな顔をした。が、一回、二回と噛むと、表情が一変した。

「ん、あれ…ほんとだ。なにこれ」

要は今まで味わったことのないおいしさに感動した。

そして二人はさっきとは違う、異様な空気の中で美食を味わった。

「古葉、お前は今年、どうするんだ」

加藤はタバコを口にくわえ、パイをかき混ぜながら、もごもごとした声で言った。そして加藤は袖を肩までまくり、背もたれに寄りかかって一服をした。

「今年か…今年はちょっとだぶってなあ。ほら、子供の運動会だよ。今年は例年よりも遅いんだ」

「はーん、そうなんだ。で、長さんは大丈夫ですよね」

加藤はすでにヤマを積み始めている。自分も急いでつくり始めたが、長さんは背もたれに手を垂らし、顔は天井を見ている状態で、何もしようとはしない。非常にだらしない格好であった。しかしその格好は、中年後半の刑事みたいで、結構様になっている。だが、はげかかっている頭が気になる。長さんはミイラが目覚めたような

声を出しながらゆっくりと頭を起こし、手を天井に突き上げて大きなあくびをした。
「ん、なんだ。なんか用か」
まったく聞いていない長さんに、加藤は少しあきれていた。そしてその言葉に、加藤の向かい側に座っている後藤が笑った。しかしそんなことを気にせず、加藤は再び同じことを聞いた。
「ああ、大丈夫だ」
長さんはあっという間にヤマを作り、険しい顔で言った。そして袖を捲り上げ、手を台の上についた。
「今度こそ負けんぞ」
長さんは一人で気合を入れた。後藤は再び笑ったが、長さんは気にも留めなかった。
加藤はまだ人を集めたいのか、また新たに声をかけた。
「ところで、岸谷と江崎さんはどうする？」
部屋のすみのテーブルで、岸谷と江崎は座っていた。二人は自分と加藤よりも年下だが、加藤はなぜだか江崎のことをさん付けで呼んでいる。
「そうね…私は大丈夫だと思うけど…岸谷君はどうするの？」
「俺ですか。俺は…というより、何をするんですか？」
岸谷は一年目だが、江崎とは非常に仲がいい。江崎は事務の仕事で、岸谷は機械整備をしている。仕事がない時は、事務の仕事を手伝ったり、江崎の話し相手になっていたりする。しかしその仲を加藤は裂こうとしている。江崎がこの工場に入ってきてから、加藤は一目惚れをしていた。確かにスタイルも顔もいいので、こんなむさ苦しいところに入ってきたのがもったいないくらいだ。しかし芳江には敵わない。
「それはな…遠旅だ」
加藤はうれしそうに言った。しかし岸谷は厳しい指摘をする。
「で、どこに行くんですか」
その言葉に加藤は戸惑った。まさか適当にブラつくだけなんて言

えない。きっと加藤には先輩としてのプライドがある。そのためにも、何かまともなことを言おうと必死に頭を駆け巡らしているだろう。その証拠に額から冷や汗が流れている。
しかし何も言えない加藤を察し、江崎は思いつく言葉を次々と言った。
「温泉よね、もちろん。連休を使って。鬼怒川か、湯西川か、どっちがいいと思う？」
「そうなんですか」
岸谷は少し怪しむように言った。加藤は江崎の言うことにぎょっとしたが、そのことを否定することはできなかった。
「あ…ああ。そうなんだ。どっちがいいかな」
加藤は苦笑いをつくった。たぶん、予算をどうしよう、と思っていることであろう。後藤も今度ばかりか、快活に笑わずに苦笑いをしている。
しかし長さんは一方に始まらない麻雀に飽きて、イスにもたれて眠っていた。多分、これで一週間に一度の麻雀大会はお開きだろう。
オレはふと時計を見た。
「もうこんな時間か」

ついに運動会、当日になった。
外は快晴でもなく晴れでもなく、生憎の曇り空であった。しかし私の体調は、朝起きてから今に至って変わらずに快調である。今日は例年と同じようにはなさそうなので、少し緊張した。もしも、と考えてしまうだけで頭がくらっとなる。やはり峰倉さんの言う通り、気持ちの問題なのであろうか。
私は今日の弁当をつくり、家事も自分のこともなにもかも済ませ、後は雨が降らないことを祈るだけだ。
雄治は先に行って場所をとっていてくれている。後は自分が行くだけだ。
「よし、行くか」

私はドアに鍵をかけて、暗く鳥肌が立つような風が吹く外へ出た。
住宅街は恐いほどひっそりとしていて、公道は誰も歩いていない。車もめったに通らず、堂々と道の真ん中を歩けそうだ。しかし車が来る時は面倒なので、あえて道の端を歩いた。
黒い雲をつかむように手を天高く突き上げ、雲を掻き分けるように手を動かした。
そんなことをしながら歩いていると、背後から峰倉さんの声がした。
私が振り向くと、峰倉さんは駆け足でやってきていた。
「古葉さん、今日は頑張ってね」
「あ、はい。ありがとうございます」
「それじゃ」
峰倉さんは微笑みながら、自分の家に帰っていった。
ほっと胸をなでおろすと、なんだか少し気持ちが落ち着いてきた。と同時に空も晴れてきた。天気予報では雨が降るかも、と言っていたのに。
道行く車や人々は、全部学校の方向に向かって行く。みんな笑顔に満ちていて、学校へ向かっている。私もなんだかわくわくしてきた。

「おーい、こっちだ」
雄治の声が左方から聞こえた。私は人と人の中を掻き分け、小走りで雄治のもとへ駆け寄った。そこは前から二番目の席で、まあまあ良いと言える。
「雨だって言ってたのにな。こんなに外れるときがあるんだな。ま、いいけど」
雄治はビデオカメラのセットをしながら、苦痛そうな声で言った。
「そうだね」
私はその場に敷いてあるビニールシートの上に座り、砂上の少年少女を見つめた。ただなんとなく見つめているのである。

今日は風が少し強く、砂が空に吸い込まれるように天高く舞っている。少年少女は頭の帽子をしっかり掴み、それに耐えている。小さく悲鳴を上げるものもいれば、風を真に受けている子もいる。あー、靴下を洗うの大変そう。

空ではかすかな楽園のように、太陽が雲の間から顔を出すと思うと、すぐに雲が覆いかぶさる。しかし、その時だけ風はやむのであった。まるで太陽の命令に逆らえないかのように。

「お、そろそろ始まるぞ」

雄治は子供のように胸を躍らせている。私もなんだかドキドキしてきた。いよいよ初めて二人の運動会を見るのである。長年の苦節、やっと叶う。

好調らしき人物が朝礼台に立って一礼。それに続いて生徒たちも先生も一斉に礼をした。

「えー、今日は…」

また始まった。大体の学校の共通することは、やはり校長の話が長くことなることである。卒業式の式辞はともかく、こんな天気の日に長々としゃべられるのは辛いし、彼らの足も気遣ってほしい。私は昔から校長の話が嫌だった。確かに一部はいいことを言うかもしれない。しかしそれまでの過程が長すぎる。

生徒たちを見てみると、やはりあくびをしているものがいる。私もそれにうつされたかのようにあくびをした。

あーあ、いつになったら始まるのかな。

「要、カッコよかったよ」

要はおにぎりを食べながら照れくさそうに笑った。

「深雪も惜しかったけど、頑張ったね」

「来年こそ、頑張る」

深雪はミートボールを箸でつまみ、口の中に投げるように入れた。

「で、午後のプログラムは何？」

「四つだけ。学年対抗リレーとムカデとダンスと…」

深雪は困ったような顔をしながら必死に思い出している。そういえば口の中のミートボールはどこへ行ったのだろうか。
「保護者のやつ」
要が横からもごもごとした声で口を出した。深雪もそうそれと満足そうに言った。
私は冗談じゃないと思って雄治を見た。目を合わし、そのことを察したのか、雄治はすぐに応答した。
「大丈夫だよ。俺だけだから。心配するな」
雄治は安心させるかのような笑みでこちらを見た。
「お父さんが出るの？」
深雪は不審そうな顔で見た。次に私を見た。
「私じゃ、当然無理よ」

「よーい、ドン」
先生の声とともに号砲がグラウンド中に鳴り響いた。
そして五組の父子がきれいに五列に並んで走り出した。父子は二人三脚で息を合わせてゴールに向かって走る。身長差や本当に凸凹な父子が走る姿は、見る人にとっては滑稽な姿に見える。砂煙が水しぶきのように立ち、波のごとく、ゴールに押し寄せた。速い父子と遅い父子との差は大きく、二十秒差の時もあった。しかしはじめにゴールした父子より、遅い父子のほうが、最後まであきらめない姿が輝いて見える。最後までやり遂げることは、どんなに気持ちがいいことだろうか。
私は後ろに両手を地面につけながら、朝とは見違えるほど晴れた、青空を見上げた。空に浮かぶ雲が、青く塗ったカンバスに白いインクを垂らしたように、くっきりはっきりとしている。雲はなぜ白いのであろうか。空はなぜ青いのであろうか。
そろそろ二人が走るころかな、と思い、グランドのほうを見た。そして突然、号砲が鳴った。私は急いで雄治と要の姿を探した。トップのほうから順に探していく。トップでもなく、二位でもなく、

三位でもない。しかし四位にいた。
そして私は急いでビデオカメラを起動させようとした。あれ、どうやるんだっけ。使い方なんてすっかり忘れてしまった。なにせ三年ぶりだ。焦りすぎて、ビデオカメラがスタンドから落ちそうになった。観客の声がグランドを飛び交う。しかし私は何も言えない。今、どんな状況かを確かめるべく、走者を見た。なんと、トップはすでにゴールし、二位があと少しのところにいる。雄治らは五位に転落。その時、ビデオカメラの液晶に、二人の姿が映った。
雄治と要は一生懸命に息を合わせようとしている。なんだかここまでその息が合わせようとするのが伝わってくる。二人は調子よく走って四位を抜き、三位を抜きそうになったが、気持ちが焦ったのか、互いの足が絡み合って転倒した。その時、私はつい大きな声で応援をした。この歓声の中、彼らに伝わるか分からないが、彼らの力になればと必死に叫んだ。五位に抜かれ、六位がすぐそこまで来ていた。そしてそのまま抜かれ、二人はついにビリになった。しかし二人はあきらめずに、再び息をそろえて走り出した。三位までゴールをしたが、四位と五位はまだゴールから離れている。二人のペースは徐々に上がっていき、あっという間に五位を抜かした。そして四位を追う。
その時、度のずれたメガネをかけているように、目の前がぼやけて見えた。そして後から気付いたのだが、私の目からは、意識もしていないのに、涙がぽろぽろと溢れ出してきていた。なぜだろうか。砂煙は立っていたが、目は痛くない。あくびをしたわけでもない。体に突然、激痛が走ったわけでもない。何か辛いことを思い出したわけでもない。涙腺が、特別に人より、ゆるいわけでもない。しかし、私の目から溢れ出してくる涙は、滝のようにとどまることを知らなかった。いくら涙を拭いても、次々と山水のように湧き出てくるので、ハンカチは汗を拭いたようになっている。
しかし一瞬だけ、目の前の光景がはっきりとした。二人は着実に四位に近づき、共にゴールに近づいていた。あと少しで追い抜ける。

私は液晶から目を離し、生の二人の姿を見た。液晶を通してなんて、もったいなかったからだ。

涙はすでに止まっていたが、自分では気付かなかった。ただ、よく見えるというのが、継続しているだけであった。しかし、見えるというだけではなく、私の目には、もっと違った見え方で二人が見えた。突然、心が動いていたかのように。

その時、私が見えていた彼らが何か、初めて分かった。他にも、なぜ私の目から涙が流れたのか。私にしか見えない、彼らの姿が。

ただ彼らを見ているだけで、考えることもなく、突然、誰かが頭の中でささやいたかのように、急に思いつき、理解した。彼ら自身を、私自身を。

そして二人はゴールを駆け抜けた。結果は、最後の最後まで抜かせず、不本意の四位。しかし、私の中では何かが変わった。根拠はない。だが、私はその変化を、この手でしっかりつかんだような気がした。

第八章　縁は異なもの、味なもの

秋の夕暮れ。紅葉は消えかかり、暗闇と沈黙が制す、夜を迎えようとしていた。遠くの方から、カーン、カーンと物寂しそうに、鐘の鳴る音が聞こえる。

家の中はというと、満面の笑みで、また、せわしくキッチンとダイニングを行き来している母さんの姿があった。テーブルに次々と並べられる料理は、いつもと違って特別な日に出すような、豪華なものあった。

今日って、何か特別な日だっけ。体育の日はとっくに終わったし、僕らの誕生日も終わったし、勤労感謝の日はまだ先出し…というよりも、確か僕らの誕生日以外の日は、例年こんなに豪勢にしたことはない。では何のための料理であろうか。

僕はこのことを調べるべく、ソファーから身を乗り出し、少しほころんだ顔をつくって言った。

「母さん、ところで、今日の夕飯は何？」

僕は直接聞き出すのではなく、あえて遠回りに聞くことにした。なぜなら、それがいつもの僕のスタイルだからだ。

母さんはテーブルにフォークとスプーンを並べながら、照れて言った。

「ふふん、ヒミツ」

母さんは上機嫌だ。やはり、今日は何か特別な日なのであろうか。予想外の返答に僕の計画は台無しになり、そのうえ、話が聞きづらくなってしまった。こうなるのであれば、初めから率直に聞いておけばよかったとつくづく思う。まえもこうやって失敗したことがある。そろそろこのスタイルを変えようかな。しかし、鼻歌を歌いながら料理をしているので、今日が何の日であるのか、そのことは夕飯のときに聞くことにした。

外はすっかり暗闇に覆われ、空は象牙色の歯をみせて、薄気味悪

く笑っていた。

数時間経ち、母さんはイスに座り、やたらに外をにらみつけ、足を小刻みに動かし始めた。この動作は、これから火山のように爆発的に起こる兆候である。非常に危険な状態だということは、誰だって理解できる。

そして母さんはひじを机に強く叩きつけた。

「遅い、遅すぎる」

母さんは手を組み、怒りがこもった声で言った。どうやら父さんのことを待っているらしい。そういえば、電話から厳しい口調で誰かと話していた。あれは父さんだったのだろう。それにしても、この怒り具合は半端ではない。きっと今日は、よっぽど大切な日なのであろう。

僕はその怒りの矛先がこちらにいつ来るか心配だったので、ひとまず二階の自室に避難することにした。

二階に上がると、ふと深雪のことを思い出した。多分、寝ているのであろう。

僕も自分の部屋に入り、ベッドに横たわった。そして、まだ眠くもないのに目を閉じた。

「ただいま」

父さんの少しおびえた声とともに、勢いよく居間の扉が開く音が聞こえた。僕はその音を聞いて、目を大きく開いた。

「何やってたのよ。今日が何の日だか知ってる？もう、やんなっちゃう。ホント、昔からあなたって無神経。馬鹿…もういいや。私、もう寝る」

母さんは怒声と父さんを玄関に残して、二階に上がってきた。そして主寝室のドアを開け、家に大きな雷をひとつ落とした。その音に、僕の心臓が震えた。

今まで、どんな些細なことでも喧嘩をしてきた二人だが、それは

喧嘩するほど仲がいいというもので、二人の喧嘩を平和に眺めることができた。しかし、今日のは違う。ここまで大規模な喧嘩をしたのは初めてだったのだ。

僕はしばらくベッドに横たわったままでいながら、真っ白な天井をただ呆然と見つめていた。白い光に照らされ、宙を舞うほこりが鳥の羽のように舞い上がる。そのほこりは僕の上を旋回し、蝶のように僕の鼻の上に着地した。僕はすぐに指で払い、ベッドから体を起こした。僕は机の上の時計の時間を確かめ、すぐに部屋を出た。

廊下を通る時、主寝室に通じる廊下が、なんだか熊の住処のように見えた。そして階段を下り、黄色い光が玄関まで染み込む、リビングに入った。

リビングに入ると、父さんはイスにえらそうに腰をかけていた。そして深いため息を一つ。自分をいっそうに黒くした。

「父さん、大丈夫？」

僕は小さな声で、いかにも恐縮そうな表情で言った。

「ああ、要か…ごめんな、こんなことになっちゃって。自分が、腑がないから…」

父さんは頭をかきむしり、今度は重いため息をついた。

テーブルの上には、すっかり冷え切っている夕飯。僕はそれをじーっと眺めていた。そして唐突に一つの言葉が出てきた。

「で、父さん、どうしたの」

父さんは一度こっちを見ると、またうつむいた。そしてすっと立ち上がり、キッチンに向かうと、お茶を注いだ。そして一呼吸もなく、一気にコップ一杯を飲み干した。

「要も飲むか」

僕はうんとうなずき、父さんの席の前の席に座った。

父さんはお茶を両手にキッチンから出てくると、深々とイスに腰掛けた。

「さて」

父さんはゆっくりと息を吐いた。

「食べるか。もったいないし」
父さんは自分の夕飯を手元に寄せ、コップの中の箸を手にした。
「今日は、ちらし寿司か…悪いことしたな」
少しの間、うつむいたかと思うと、天井を見上げ、僕を見た。
「で、なんか言ったか」
僕はまた同じこと言った。
「ああ、そうだったな…知りたいのか」
僕は軽くうなずき、両手をイスの手すりにかけた。そして強いまなざしで父さんを見つめた。
「そうか。もう、教えてもいい時期になったかな…オレ達の結婚記念日」
「結婚記念日？」
初めのうちはまったくといえるほど、心当たりがなかったが、すぐに今までのことを思い出した。
そういえば、去年も一昨年もその前も、母さんがキッチンで楽しそうに料理の準備をしていたのを、僕はかなり繊細に思い出した。あの時には分からなかった、今日は何の日だったか、やっと解明された。
そして父さんの口がゆっくりと開く。
「あの日、オレが高校生の時…

「おい、あの子、可愛くないか」
「そうか」
それは相変わらずに人とはまったく違う趣味をたどっていた雄治の姿があった。高校に無事入学し、そろそろ学校に慣れてきそうなころに、雄治は見た。
オレは廊下の窓際の壁にもたれかかり、目の前のある一点を見つめていた。そして友人がオレにあきれたような顔で言った。
「お前、もっと広く視野を持てよ」

友人は教室から廊下に出てきたある女子を見かけた。
これが二人の出会いであった。
そして友人がオレの肩を引っ張った。
「おい、見ろよ、あの子」
友人はひどく興奮し、さらに肩を強く引っ張った。そのこともあったのか、少しは興味があったのかは分からなかったが、ふとその方を見た。視界に一瞬、美しい髪、きれいな輪郭がくっきりと見えた。そして顔がはっきりと視界に写る。
そして彼女が自分の前を通るとき、気持ちのいい香りを残して過ぎ去った。
「ああ、オレ、あの子がいい」
友人もすでにメロメロであった。

「…じゃあ、授業はここまで。号令」
チャイムがなり、昼休みになった。オレと友人らは、机をつなげて小さな班をつくった。そして弁当を取り出し、食べ始めた。友人とは中学校からの付き合いが多く、今でも友好な関係を築いている。
中学校のころの懐かしい思い出、最近の流行、今の高校生活について、そしてこれからのことを話しているうちに、弁当を食べ終わってしまった。しかし話は食べた後でも続いた。そこで、ある一人の友人が一点を指差す。その指先を、全員が一斉に見つめた。
その先は教室の入り口を指してあった。そこにはあの時の彼女がいた。
彼女は雄治の横を通り、彼女の友達らしき人のもとへ駆け寄った。その時もまた、あのかすかな香りを残した。皆の目は、彼女一点に注がれた。彼女は楽しそうに会話を楽しんでいる。
オレはその姿を手にあごを乗せてボーっと見ていた。というより、そんなことしかできなかった。
そして、友人の一人が催眠術にかかっているかのように言った。
「あの子の名前、何？」

もう一人の友人が言う。
「オレ、知ってる。五組の法月さんだよ。名前は確か…何だっけ？」
「法月…さん」
オレも夢の中にいるかのように唱えた。
「お。お前も興味が出てきたのか」
友人はいやらしく言った。しかしオレには、そんな言葉が聞こえなかった。
そしてその時間を途絶やすかのように、予鈴が教室中を取り巻いた。その音を耳にした彼女は、すぐさま教室を去り、残ったのは、チャイムのむなしい音と彼女の香りだけであった。
それからしばらく、彼女をチョコチョコ見かけることがあった。しかし話をかけることもできず、そのまま一年が過ぎた。

二年になり、クラス編成があった。
その日は空も明るく、絶好の日であった。そして胸を躍らせてクラスに向かった。ついに憧れの人と同じクラスになったのだ。階段を上り、ドアが開いている教室が見えた。そしてその教室に入ろうとしたその時、教室から出てくる人と向き合った形になった。相手はなんと、例の法月さんであった。
オレの背筋から耳にかけて、急に発火したように熱くなった。
「あ…ごめん」
雄治が避けると、彼女はまずい顔を作ったような顔で、雄治の前を足早に通った。その時もまた、変わらないトレードマークを落としていった。

せっかく彼女と同じクラスになったのに、まだ一度も話をしていない。しかしそのまま、今年の初めの行事、文化祭が近づいてきた。
その準備で、オレは看板を作ることになった。そしてそのことをきっかけに、オレの人生は大きく左右されることに、その時はまだ知る由もなかった。

文化祭が始まる二日前になり、放課後は皆があわただしくあっちへこっちへと移動する。それなのにオレは友人と二人で、廊下に座りこんで看板を作っていた。作業は簡単なもので、四角く切ったダンボールに、文字を書いたわら半紙を貼るだけのことであった。

しかし、この簡単と思われる作業が、友人にはできなかった。まず、文字は上手く書けない。ここが詰まると、後が続かない。次に、ダンボールを正方形に切れない。完全なる完璧さを彼に求めてはいないが、これはあんまりにもひどすぎた。最後に、のり付けができない。量が多すぎて、紙がしわくちゃになってしまうのだ。

そんなことがあって、早く部活に行きたいのに、オレは長い間、廊下にいることになった。しかも友人は、バイトがあるとか言って、早く帰ってしまった。

廊下に一人にされたオレは、黙々と作業を進めた。

そしてオレは作業に熱中しすぎて、時間など当に忘れていた。それと同時に周囲の音や声も、まったく耳障りだと感じなくなった。それもそのはず、ほとんどの人が自分の分担のことを終えて、帰ってしまったのだ。残ったのはオレを含め、ほんの二、三人程度であった。

夕陽が窓からぼんやりと差し込み、廊下の隅々を照らした。その中で、オレの前に一つの影がその光を閉ざした。

「ねぇ、なんか手伝うことってある？」

あの柔らかい声、あの赤く燃えるショートヘア、そしてあの香り。オレは目の前を見上げた。予想通り、前に立っている、オレに話をかけたのは、彼女、法月芳江であった。

オレの頭は台風が通り過ぎたかのように、まっさらになっていた。そして頭に血が上り、頬と耳が紅潮する。

オレは困った。この状況をどうすればいいのか。廊下の端から端を見ても、今は誰もいない。どうすればいいか、オレは自分自身に問いかけた。そしてその結果として出た言葉は、悲しいほど単純なものであった。オレは一回も息継ぎをしないで言った。

「じゃ、じゃあ…そこの紙をそこのダンボールに全部貼って」
しかし、この言葉を言うだけでも、十分に勇気がいり、オレにとって、かなり精神的に参った。
ああ、こんなときに誰かが近くにいてくれたら。
オレはそんなマイナスな思考もあったが、プラスな面もあった。これはチャンスだ。そういう声をオレは耳にしたのだ。
彼女はオレに言われたとおり、その作業に黙々と取り組んでいる。しかしいくらチャンスがあっても、話しかける勇気など最初からない。勇気を出して話しかけよう、と口までは開くのだが、それがやっとのことで、すぐにためらってしまう。はたしてどうしたものか。
そんなことを考えているうちに、いつのまにかオレの作業は止まり、口を開けながら彼女を見つめている形になっていたのに、オレは気付いていなかった。当たり前だが、彼女はこっちに気付き、優しく微笑んだ。そしてオレの頬は再び紅潮し、石のように固まった。その滑稽な姿を、彼女は柔らかく笑って言った。
「なんか、だめなところでもあった？」
「…いや、なんでもないよ。ただ…疲れてボーっとしてただけ。そのまま続けて」
オレは、気が付いたような素振りをみせて、自分の仕事に戻った。彼女は不安そうな顔を見せたが、やがてもとの仕事に戻った。
そして再び沈黙が暗闇とともに包み込む。今、この廊下には誰もいない。どの教室にも、このフロアには自分たち以外、誰もいない。ただ二人だけ。
再び彼女に話しかけようと挑戦するが、できない。こんな簡単なことができないなんて、と思うと、なんだか自分のことが嫌になってくる。そんな自分に、風はあざ笑うかのように吹いた。
夕陽は薄くなり、教室から差し込む光を頼りに作業を進めた。教室の中でやればいいのだが、移動が面倒くさい。オレは相変わらず作業に集中できず、彼女ばかりを気にしていた。
しかしそんな時間も、完全下校のチャイムが告げる。外から差し

込む光もなくなり、教室からの光が廊下でゆらゆらと揺れていた。
時間が時間なので、オレは彼女と目をあわせないように何気ない口調で言った。
「いいよ、そこまでで。今日はありがとう」
彼女は軽くうなずいて、作業に使った道具や材料を片付け始めた。オレもきりのいいところで作業をやめ、片付け始めた。
教室に入り、素早く片付けるべき場所へと片付ける。彼女もオレに続いて、同じように片付けた。そしてバッグを肩にかけ、電気のスイッチの前で止まった。その姿を見た彼女は、急いでバッグを机からひったくって、教室を去った。オレも電気を消して、彼女を追うようにして教室を出た。

昇降口で、初めて彼女の真横に立った。それは、靴を下駄箱から取り出そうとした時に、ただ彼女から寄ってきたのだった。オレはただ立っていただけ。その時は本当に心臓がはちきれそうなほど緊張し、背筋には凍るほどの冷たい汗が流れた。本当に凍ったかのように、体はまるっきり動かなかった。なぜだか分からなかったが、彼女も動かなかった。その間は彼女について思い巡らした。何度も何度も考えた。そして長い二人の金縛りが終わり、彼女が離れて靴を履き替えた。オレも靴を履き替えて、刻々と闇が迫っている外へと出た。
「ねぇ、一緒に帰らない？」
オレは暗がりから聞こえる方に目を凝らした。言うまでもないが、その声の主は法月であった。
オレは背筋が稲妻のごとくしびれ、顔と足は発熱反応を起こした。なんでこんなオレが法月さんから話しかけられるのか。なんでまともに話したことがない俺なんかと帰りたがるのか。俺はそれが不思議でたまらなかった。
「ねぇ、いいの？」
法月は期待で満ち溢れている目でこちらを見ていた。

部活はまだ続いていたが、あと二十分もしたら終わるであろう。今から言ったのであれば、クールダウンをするだけで終わってしまうはずであった。
オレは彼女の目を避けて、まだ空が残っている遠い彼方を見た。そこには、いつもより明るい、悠々たる空が見えた。

電灯を通過する時、二つの影が後ろから前へとオレ達を追い抜く。そして再び後ろに退くと、また追い抜く。
オレはいつもとは違う帰路を歩いていた。完全に幽幽とした空は、なんとも言えない。
突然、彼女はその暗闇から、低い声でオレに話しかけた。
「ねぇ、古葉くん、私のこと覚えてる？」
「…えっ」
オレは法月の目を見つめた。これは羞恥心も勇気もなかった。ただ、法月の言っている意味が分からなかったのだ。いつどこであったのか。いままで法月という人にはあったことがない。
彼女はうつむいて、悲しい目で言った。
「私、芳江って言うんだけど…」
オレはその一言にはっとした。そういえば、どこかで聞いたことがある。それは、確か、小学校の頃だったような。
「…そうだよね。私のことなんて、知らないよね。ごめんなさい。今日は付き合ってくれてありがと。じゃあ、さようなら」
突如、法月は走り出した。
「あ…」
オレはついに思い出した。確か、小学校のころ、芳江という女子がいた。しかしその子の苗字は違っていた。その時の彼女は神村であった。どうして苗字が違うのであろうか。
そんなことを考えていると、法月はいなくなっていた。冷たい風と供に。

法月がどこかにいないかと、辺りをきょろきょろしながら歩道を歩いていると、ある公園に目がついた。そしてぼんやりとした電灯に包まれている公園へと、一人ひっそりと入っていった。
公園の中を一分ほど歩き回っていると、木のベンチに一人ぽつんと座っている女子を見つけた。彼女は頭を抱え、時々、大粒の雨を降らせた。
オレはその姿を見て、近寄り難くなった。どう話し出せばいいのか。オレが知るはずがない。
オレは知らず知らずのうちに、彼女に向かって歩き出していた。
「なぁ、思い出したよ。小学校の頃、五年の時だけ同じクラスだった神村だろ。六年になってからは引越ししたみたいだけど、なんでまた戻ってきたんだ」
彼女はすっかりしわくちゃになった顔を上げた。
「う…うん」
「もう泣くなって。というより、お前だったのか。ずいぶん変わったな」
神村に笑みがこぼれた。そして神村はしゃくり声で話した。
「う…うん、私、ちょっと厄介な…病気になって…いて、しばらく…神戸の方に行って…いたんだ」
「ふーん」
今のオレには、羞恥心や彼女に対する態度というものが、すでに忘れ去られていた。同時に、オレの心境には片思いというものはとうになかった。ただ、懐かしさだけに浸っていたのだ。あまり互いを知らなくても、再会というものは、どんな国境をも乗り越えて、感動を教えてくれる。オレは、今、それに当てはまっている。
オレは彼女から微笑みをもらった。
「そういえば、ずいぶん変わったな。あの時はけっこう太ってたよな」
「あの時は…四年まで、入院していて…何にもしてなかったから」
「そうか」

神村のしゃくり声はだいぶ治まり、顔を上げて話せるまでになった。
「それにしても、なんで苗字が違うんだ？」
「あ、それは…理由が分からないけど、私が中学校に入学したら、父さんの姓から母さんの姓に変えるって、結婚当時から決めてたみたい」
「ふーん」
オレは質問を続ける。
「で、なんで今日は一緒に帰ろうとしたんだ？」
神村はオレを強張った顔をしてみた。そして袖で涙を拭いた。
「馬鹿」

その後は、当然のことのように、彼女を送っていった。
そしてそれから、当たり前のように、家が近いこともあって、彼女と毎日帰るようになった。なぜなら、彼女は弓道部に加入しており、終わる時間が同じだからだ。
オレと法月は、知らずのうちに、彼氏彼女の関係になっていた。
しかし、彼女は高校卒業間近に、今まで治まっていた喘息が再び発病したことがあって、神戸の病院に入院することになった。運よくその病気は、高校の授業の全過程を終えてから発病したので、卒業をすることができた。しかし卒業式には出られない。オレの前では嘆き悲しんでいたが、オレや友人の周りではそんな姿を見せなかった。オレはそんな彼女を見るたびに、心が痛んだ。
そして月日は流れ、彼女が引っ越す前日になった。それは彼女の送迎会の帰りのこと、もう外は闇にのまれていた。

「いよいよ明日だな」
「…うん」
吐く息はまだ白かった。月が公道をずっと先まで照らし続ける。
「どんな気持ち？」

法月は眉間にしわを寄せた。
「やだ…行きたくない」
「そうか」
オレたちは寒い空気の中をずんずんと突き進む。決して後ろを振り向かずに。
そしてしばらくの間、夜が沈黙で閉ざしてはいたが、突然、季節はずれの雪が降り出したことで、二人の口はやわらかく開いた。
「雪…」
法月は足を止め、空を見上げた。雪は彼女の頬について、その白い頬に吸い込まれるように溶けていった。
オレも足を止め、法月の顔をじっと見つめる。彼女の顔は、寂しさを物語っているように見えた。目の下についた雪が解けて、彼女の頬を滴ると、本当に泣いているように見えた。法月はその涙をぬぐうと、オレが見ていることに気が付いた。
「ん、何かついてる？」
「いや…なにも」
「そう」
法月はうつむくと、顔を手で覆い、突然泣き出した。
「どうしたんだ？」
「だって、だって…私、私…」
顔を上げると、口を押さえたまま、法月は眉間にしわを寄せて、発作が始まったように肩を動かした。
「もう何も言うな。とりあえず、公園のベンチに座ろう」
オレは法月を連れて、白くぼんやりと浮かぶ公園へと入った。
公園の道は、商店街の裏道のように暗く、そのおかげで、時々大きい石を蹴飛ばしてしまう。その石は、寂しそうに立っている、電灯の支柱に当たり、公園中に夜を伝える鐘の音を響かせた。雪はまだ降り続いていたが、電灯の光に照らされ蛍のように宙を舞い、ひたひたと地面の上を歩く景色は、とても美しかった。
オレは電灯近くにあるベンチに法月を腰をかけさせ、その右側に

自分も腰をかけた。
「ありがと…」
法月はまだ涙を流していたが、だんだんと落ち着きを取り戻しつつあった。しかし何も話そうとはしなかった。オレも口は閉ざしたままであった。
そのまま沈黙が続く。それを遮るかのように、しんしんと雪は降り続ける。二人の間には二人の手が握られていた。暗闇はいっそうに濃くなっていく。しかしそんなことに気が付かず、二人は目の前の一点から目を話さない。
オレは、そのままでずっといたいと思った。しかし、彼女はそんな感じには思えなかった。なぜだろうか。彼女のことを思うと、非常に胸が痛んだ。今を幸せに過ごしているはずなのに、今まで感じたことがない苦痛を感じていた。
彼女は徐々に顔を上げた。
「少し落ち着いたか？」
「う…うん」
法月は手を俺の手の上に重ね、強く握った。その時、オレの頬が赤くなったような気がした。
「ごめんね…なんか、私ったら、泣いてばっか」
法月の頬は、依然、赤く紅葉していた。オレは法月を見ず、暗い空を見上げた。そして体内にたまった気持ちを白い息に変えた。
「そうだな…」
公園の池を眺めると、白い光が浮かんでいた。時々、小さな波紋ができたと思うと、光の中へと吸い込まれた。
オレは一度下を見た。ゆっくりと顔を起こし、肩で呼吸をした。
「これから…どうなるんだろうな、オレ達」
「えっ」
法月はやっと気付いたかのように、オレの方を見た。
「終わるのかな…オレ達」
「なんで？」

法月のほうを見ると、もう泣いてはいなかった。目は真剣だ。
オレはまた前方を眺めた。
「今までの思い出重ねていくたびに、思い出がシャボン玉みたいに膨らんできたけど、簡単に割れちゃうのかな…」
「馬鹿、なんでそんなこというのよ。ここで終わりにしちゃったら、今までのが何なのよ。なんでここでやめなきゃならないの。なんでそんなことを言うのよ。ホント、アンタって無神経。馬鹿」
オレの腕に抱きついた法月は、また泣き出した。
なぜあんなことを言ったのであろうか。今頃後悔していた。本心ではこんなことを言いたくはなかったのだが、彼女と離れてしまうことで、気が動転していた。落ち着いてなかったのは、自分のほうではないか。
オレは法月の左肩に手を回し、自分のほうに抱き寄せた。
「悪い、ゴメン。オレ…おかしくなってた。ホントにゴメン」
法月の体を優しくなでながら、オレは自分の心を悔い改めた。そしてオレの手は肩から彼女の頭に移った。
「ゴメン…ホントにゴメン…」
オレの手は止まり、二人は頭をつけた状態でしばらくそこに座っていた。
二人は時間を忘れ、自分の思い、そして互いの気持ちについて考えた。いつの間にか、二人は脳裏に焼きついている二人で過ごした思い出を回想していた。
二人は心が通じ合っているかのように、顔を互いにゆっくりと見合わせた。

そしてその後は、人生でもっとも大事な青春の一ページが、二人の心にずっと残ることになった。一生忘れることのない、誰にも言えない、そしてもう二度と繰り返すことのない一ページを、心の中に綴じこんだ。

父さんは話し終えると、世界中の幸せをつかんだような顔をした。
僕はそんなことにかまわず、疑問を持ったような声で聞いた。
「なんか悪いんだけど…それでおしまい？」
当たり前だが、父さんはきょとんとした顔をした。そして厳しい口調で言った。
「どうした。なんか不満か？」
「うん」
父さんはいかにも嫌そうな顔をし、恐る恐る僕に質問をした。
「もしかして…その後のことも聞きたいのか？」
「うん」
僕は即答した。誰だって最初を聞いたら最後も聞きたいものだ。
そして父さんは少し照れくさそうに言った。
「それだったら、もっと簡潔に話せばよかったな」
父さんは優しく微笑んだ。そして仕切り直すかのように、大きなあくびをした。
「その後か…どんなんだっけなぁ…

「じゃあ…元気でな」
「雄治も…忘れんな」
「ああ、忘れないさ、一生」
彼女は最後に微笑を残して去っていった。しかしその笑顔の裏には、泣いている彼女がいる。どんなに隠そうとしても、オレには分かる。

オレは今無駄な時間を、部屋の壁に寄りかかり、送迎会の日に最後に撮った写真を、ボーっと眺めながら浪費していた。
こんな回想を、一日に数回する。思い出すたびに、オレの目には、あの時の光景と涙が浮かぶ。もうこれ以上会えないかのような別れ方をしたので、本当にそうならないかを今まで恐れてきた。しかし

それをつなぎとめる希望が、今でも手紙を交換していることであった。しかし、その手紙は大体四日おきに届くのだが、最近は十日経っても手紙は返ってこない。果たしてどうしたものか。オレは自分の思い思いを巡らせるたびに、頭を抱えてしまう。

「あーあ…」

オレは深いため息をつき、再び写真を眺めた。あの時に戻りたい、オレは芳江と過ごした日々を懐かしみ、また、彼女に会いたいという衝動に駆られた。

第一志望の大学に現役で受かっても、勉強なんかできなくなっていた。楽しいキャンパスライフのはずなのに、ちっとも楽しくない。理由は明白だが、どうにかしようといくらもがいても、どうにもならない。

オレは一人部屋にたたずみ、奇跡と幸せが来るのを待つことしかできなかった。

そして直に、彼女に手紙を送らなくなった。

芳江といる二年はあんなに早く感じられたのに、この一年は時間の経過がその倍近くに感じられた。

時々散歩に出かけて空を見上げると、芳江のことを思い出す。芳江もこの空の下で、同じように空を仰いでいるのであろうか。

空に流れる雲が、芳江の面影を残した。

「あー…」

オレはいつの間にか重いため息をこぼした。今日は同じようなため息を何回しただろうか。

あれから一年経った今も、あの時とはまったく変わっていない。唯一変わったものといえば、自分がもう子供ではないと自覚しはじめたことである。

「どうしたんだよ、そのため息。今日で十八回目だぜ」

大学に入学してから人生の負け組みになったかのようになってい

たころ、積極的に声をかけてきてくれた男と友達になった。
「なんでもない。最近…疲れてるんだ。寝不足で…はぁ…」
「十九回目」
橘は鼻で笑った。オレはそんなことを気にせずに、ラウンジからぼんやりと外を眺めた。
青々とした新緑が、空を眺め、気持ち良さそうに風に身をまかせていた。その木の下には楽しそうに弁当を食べながら笑う女性が三人。しかしそのうち一人は、何だか悲しそうな表情であった。
オレはなんだか彼女に不信感を抱いた。それが何か確かめるべく、よく目を凝らした。
そして突然、オレは気が付いた。彼女はこの一年間、ずっと待ちに望んでいた、愛しの芳江であった。
オレはすぐさまラウンジを飛び出し、大声で叫んだ。
「よしえー」
彼女はすぐに振り返る。
「…ん？」
彼女はすっと立ち上がり、信じられないような目でこちらを見た。
「…ゆう…じ？雄治なの？」
オレと芳江は互いのもとへ走りよった。
「信じらんない…なんでここに？」
「ここはオレが来てる大学だから…当然だろ。で、なんでお前はここに」
「私もここの大学に入ったのよ。ある程度有名だし…将来的に役に立つかなーって」
芳江は幸せな人生を送っているかのように、小さく笑った。
「それにしても、久しぶりだな。もう大丈夫なのか、病気の方は」
「うん、だいぶ良くなった…」
芳江は突然うつむいた。そしてオレは抵抗することもなく、いきなり芳江に抱きつかれた。
「…会いたかった。ずっと、ずっと待ってたんだからね…」

芳江はオレの胸の中で静かに泣き始めた。オレはその芳江の頭を手でゆっくり引き寄せた。

「オレもだよ。お前のことをどんなに待ち望んでいたことか…」

ここでオレと芳江は互いに待ち望んでいたことを告白しているが、互いにまた会えるとは思ってもいなかった。

そして二人の関係をつなぐための手紙は、確かに二人とも送り続けていた。しかし互いに勘違いをしていた。それはオレが彼女の家に送っていたことだ。なぜと思うかもしれないが、彼女は病院に入院していたので、彼女の元に届くはずがなかった。彼女の親が手紙を届けてくれると思われるが、彼女の母親は彼女が幼いころにして死に、父親はというと、芳江が入院してから一ヵ月後に、静岡に単身赴任をしていて、家に戻るのは一ヶ月に一度であり、その上新聞も取らないので、郵便受けを開けることはなかった。彼女の場合は根本的に住所を知らなかっただけなのだ。高校時代、一緒のクラスになったことがなかったので、連絡網でオレの電話番号を得ることができなかった。いつでも教えてもらう機会もあったのだが、彼女はタウンページで分かると思っていた。案の定、オレの家はそれに登録をしていなかった。

それがオレ達の間を不安にさせ続けた事実である。

その後は前年に比べ、時間は一瞬にして過ぎ去った。

そして交際を繰り返し、同棲もした。互いの愛を確かめ、彼女が大学を卒業したら、結婚することを決めていた。

医者の先生が言うには、芳江に適した環境は、もちろん都会ではない方がいいらしい。そしてこの埼玉に引っ越してきたのだ。

芳江が大学を卒業するまで、オレは安定した家庭を築くために就職先を探した。そして勤めることになったのが、今年で十三年間働き続けることになる、長羅製作所だ。この製作所は三代続いている工場であった。

オレ達は互いにそばにいるだけで幸せだった。そしてさらに大きな幸福が訪れた。

…お前たちが生まれたことだ…」

僕は少し別のことを考えた。そういえば深雪は何をやっているのであろうか。多分、まだ寝ているに違いない。

外はおぼろげに月が輝き、遠くでフクロウが寒そうにさえずっていた。

僕は父さんの顔を見た。父さんは首を掻くと、頬を赤らめた。そして手を合わせて、そっと一言つぶやいた。

「いただきます」

そう言い終ったとき、階段から足音が聞こえてきた。そしてその音は次第に大きくなっていった。

「…ゴホッ…ゴメン、ちょっと言い過ぎた…」

母さんは鋭い目つきで睨むようにこちらを見た。目と鼻と頬は赤く、きっと寝室でずっと泣いていたのであろう。父さんはというと、気まずい顔に変わった。

そして母さんは自分の髪をなで、続けた。

「ところで、ご飯、食べる?」

「ああ」

父さんは少し照れくさそうな声で言った。

「…じゃ、要、深雪呼んで」

そう言い残すと、母さんはテーブルの上の皿を持って、キッチンへと入っていった。

そして僕は廊下に出て、階段下から深雪のことを呼んだ。すると、深雪は驚くべき速さで部屋を出て、階段を駆け下りた。まるで階段の上から待っていたように。僕はその深雪の速さに見とれていた。

「何、どうしたの」

深雪はしてやったりといった表情を見せた。

「なんでもない」
僕はそそくさと、暖かい光が漏れる居間に入っていった。
夕飯の準備は過ぎており、父さんと母さんはすでに席に着いていた。どうやら二人は見えないところで仲直りをしたようだ。こういう特別な日には、特別な効用があるらしい。そして僕と深雪は急いで自分の席に着いた。
「じゃあ、食べよ」
キッチンの奥で、静かに電子レンジ音が鳴っている。しかし外は風も吹かず、温かい家庭を見届けているように静かであった。
そして家庭は一つになった。
「いただきます」

第九章　嫉妬

いつか分からないが、二ヶ月に一度、家に訪問客が来る。そういえば、こうやって定期的に来るようになったのは、いつからのことからか分からない。父さんが言うには、彼女は父さんの小学校からの旧友で、今でも世話になっているらしい。しかし旧友であるのなら、なんで他の人も連れて来ないのであろうか。私はなぜだか彼女のことが気になってしょうがない。母さんも父さんと彼女が楽しく話しているのを見て、何だかやきもちを妬いているらしく、その時だけ可愛く見えた。そういえば、その彼女がそろそろ来る時期だ。そして母さんの嫉妬も、また芽生え始まることであろう。

ピンポーンとチャイムの音が鳴り、父さんは玄関のドアを開けた。
「よぉ、もうそんな日か。いい加減、もう大丈夫だと思うんだけどなぁ」
「だめよ。あと二年だから我慢して。そうしないと…だから。あと少しの辛抱だから」
「分かった、分かった」
そう言うと父さんは彼女を中に招き入れた。そして慣れた手つきで、居間に通した。

居間では何だか楽しそうな笑い声が飛び交っていた。その時私と母さんは、廊下でその会話を盗み聞きしていた。普通ならこんなことをするのは、人間として恥ずかしいことだとは思うが、やっててて楽しい。
私は二人の話にずっと耳を傾けていたが、上から母さんの声が聞こえた。
「深雪、見てきて。お願い」
母さんは私の顔を見ずに、一生懸命に二人の話に耳を傾けて話し

た。
　私はその言葉に従って、しぶしぶ居間に入っていった。その時母さんは、ドアから自分の姿が見られないように、壁にへばりつくように隠れた。
「こんにちは、葵さん」
「ああ、深雪ちゃん。久しぶり。元気にしてた？」
「はい、おかげで」
　彼女の名前は葵。保育園に勤めているらしく、彼氏もいる。そして父さんの小学校の頃の旧友で、久しぶりにこういう形で再会を果たしている。
　私はとりあえず、母さんの聞きたそうなことを聞いてみた。
「で、今日は、なんか…遊びに来たの？」
「こら、深雪」
「いいのよ。そうね…そんなところ、かな」
　彼女のことが嫌いなわけではないが、ついつい、母さんの肩を持ってしまう。そんなことで、はっきり言って損するのは私だが、何だか母さんに共感して、つい手伝いみたいなことをしてしまう。きっとこれかの人生も、損ばかりのことであろう。
「あ、そうなの…」
　私はキッチンに入り、何気ない顔でお茶を汲んだ。
「で、要君は、いる？」
　葵は私に微笑を投げかけた。
「今、友達の家に行ってる。でも、そろそろ帰ってくると思いますよ」
「あら、そう…」
　葵は表情を一つ変えずに、相変わらずの調子で話した。
「じゃあ、これからどうするんだ」
「そうね…とりあえず、待ってみる」
「そうか…」
「でさ、去年のことだけど、また…」

二人は再び話を続けた。私はそんな空間にいられる人ではないと思ったので、そそくさと部屋を後にした。

「で、どうだった？」
「別に…聞いてたでしょ？」
「まぁ、そうだけど…」
私の言葉を聞くと、母さんは少し辛そうな顔をした。声からもその悲しそうな気持ちが表れている。私は自分のことが嫌になってきた。
「でも、なんだか、要のことを待ってるみたいだったよ」
「知ってる」
「え？」
母さんはしまった、といった顔をして、すぐにいつもどおりの表情に戻したが、私はその表情を逃さなかった。
「ねぇねぇ、なんで知ってるの？」
母さんは最も恐れていることを聞かれたような顔をした。そして口元にしわを寄せながら、自分に対してうなずいた。
「ん、んん…聞いたのよ。話の流れから…分かったわ」
それだったらなぜそんなきつい顔をするのか、なぜそのような動作を起こしたのか、それが私の頭の中に矛盾として残った。
そして私はさらに追い詰めようと思った。
「なんかおかしいなぁ」
「…おかしくなんかないわ」
そう言い残して、母さんは逃げるように居間に駆け込んだ。
その後を追うこともできたが、居間に入る気にもなれなかったので、自分の部屋に戻ることにした。

日が優しく差し込む部屋の中で、私はベッドに横たわり、居間から漏れてくる声に耳を傾けていた。笑い声と快活な声が、耳元まではっきりと聞こえる。母さんも上手く混じって楽しそうだ。あれだ

け彼女を敬遠していたのに、今では裏切り者となった。まあ、自分も悪かったのだが。
あまりにも暇だったので、ベッドのシーツを握ったり、手足を思いっきり伸ばしたりした。勉強や昼寝は十分にできたが、今はそんな気になれない。ただ、そこで何にもやらないのが、今のしたいことであったと思う。
あぁ、生きてるだけって疲れる。
私は頭が真っ白のままから、それだけを考えた。生きるって何であろうか。自分はなんで生きているのであろうか。ついには、この世にはどれだけの人間がいるのか、ということを考えた。そして自然に、自分がどれだけちっぽけなものかを考えた。すると、目からぽろぽろと出てきた。徐々に涙の出る量は増して、シーツに静かにしみこんだ。
そしてすぐ、涙を拭かないうちに、ドアの開く音がした。
「ただいまー」
その声の主は要であった。
要は洗面所に向かったあと、すぐに居間に入っていった。

私は部屋の中で静かに待った。何を待っていたのかは分からなかったが、もしかすると、ただ動きたくなかっただけだったのかもしれない。
そして時間はゆっくりと流れ、私をベッドにはりつけにした。
私を退屈にするのはなんだろう。私は自分自身の肩を握り締め、下唇を噛み、なるべく小さくうずくまった。そしてゆっくりと目をつむって、小さな呼吸を全身で感じ取った。自分の小ささを、手で感じ取りながら。
私は目を覚ました。
いつの間にか寝ていたようだ。昼寝ではないのだが、なにかが私を夢中へ引きずり込んだのだ。

目を開けた時、外は火が燃えるように赤くなっていた。時間は過ぎるのが早いと思った瞬間であった。さっきはあんなに長く感じられたのに。時間は尊い。私はまだそのことに気づいていなかった。
あぁ、今も地球は回っているんだろうな。
私はあまりにも単純明快で、くだらないことを考えていた。
「では、さようなら」
下の階から柔らかな声が聞こえた。
「あぁ、じゃあな」
「さようなら」
「元気でね」
ドアは軋みをあげてゆっくりと閉まった。そして二人の足音は居間に消え、もうひとつの足音はテンポよく階段を上がった。
その音に反応した私は、すぐにベッドから体を起こし、荒い足音で部屋を出た。そして要を捕まえて、部屋に引きずり込んだ。
「何だ」
要は今の状況に、かなり翻弄されており、理解しようと努力していた。
「要、何話してたの」
ベッドに座り、今までたまっていた鬱憤をぶつけた。
「何話してたって…世間話ぐらいだけど…何で」
やっと出てきた一言のように、口から自然に漏れた。もちろん無表情で、その場に突っ立ったままでだ。
私は要の言葉を聞いて、さらにイラついている。そして、自分の感情を制御できないまま、感情をあらわにした。
「そんなことじゃなくて、分かるでしょ、あんた。もう子供じゃないんだし…」
「子供だよ」
「何言ってんの。大人と同等に話せるくらいになったら、もう大人でしょ、普通に考えたら」
「そういや、そうかも…」

要は小さくうなり声を上げて、少し頭をかしげた。
「それで、母さんには何て言ってた、葵さんは」
「何って…特に何にも…だけど」
「何もって…何それ」
「何もは、まったく話してないって意味だよ」
私も首をかしげた。そして下唇を噛みしめ、頭の中で何か情報になるものを探してみたが、結局見つからなかった。やっとのことで口から出てきた言葉は情けないものであった。
「本当にまったくなの。何にも話してないの？」
要は確信を持って言った。
「うん、相槌を打ってただけで、会話には加わらなかったよ」
気付いてみると、肩が重くなっていた。自分の当てが外れ、気持ちが落胆し、頭も垂れ下がっていた。
そんな私の姿に気の毒に思ったのか、要はゆっくりと口を開けた。
「だけど、僕とよくしゃべったよ、葵さん。父さんはそっちのけで」
私ははっと思った。さっきまで母さんと何を話していたのかが気になっていたが、今は葵さんの目的について、知りたくなった。
私はすぐさまその話題に乗り換えた。
「で、何話したの、葵さんと」
「そうだなぁ…」
要は手をあごに乗せて、考え始めた。
「いろいろと話したからなぁ…」
私はこの間にあらゆることをめぐらした。なぜ要だけと話したのか。なぜ二カ月おきに来るのか。なぜ葵さんは私と話そうとしなかったのか。もしかしたら、父さんや母さんはあえて葵さんと会話せずに、要と葵さんの話を黙って聞いていたのだろうか。葵さんは要だけの話を聞きたかったのだろうか。今の私には分からない。要の言葉次第で、私の想像は大きく変わる。しかし要はそんなことをお構いなしで言うだろう。
要はまだ思い出そうと必死だ。私はベッドに横になり、窓を通し

て赤々と燃える広大な空を眺めた。
そしてまたくだらない自分の突発的な空想に浸り始めた。この空を眺めている人はどんな人なのか、空が赤くなる理由など。よくよく考えると、こんな時間があるということは、だいぶ時間が経っているということだ。
要はまだ考えているのであろうか。私は体を起こして、ドアの前を見た。すると、要はそこにいなかった。
「あれ…どこにいったんだ」
辺りを見回しても見つからない。多分、自分の部屋に戻ったのであろう。しかしなぜなのかは分からない。
とりあえず私は、部屋を出て要の部屋に向かった。

「ねぇ、なんで行っちゃったの」
部屋に入るなり、質問をする私に、要は呆れたような顔をしていた。
「だってお前、まったく人の話を聞こうとしないんだもん。せっかく頑張って思い出したのに、そっぽ向いてるんだもんな。ひどい話だよな」
私の頬は急に熱くなった。そして素直に自分の過ちに気がつき、すぐに反省した。
「ゴメン。考え事してたのよ。許して」
「まぁ…そこまで怒ってはないけど…」
この要の緩みを機に、私はすぐに開き直った。
「で、どんな話だったの」
要は首を横に振り、重いため息をついた。
「お前、嫌われるぞ」

その後の要の言った言葉は、私の予想とは大きく違っていた。
それは、葵さんは要だけに現在の家庭事情についてのアンケートをとっていただけであった。そして、私が寝ていた頃、四人でお菓

子を食べていたそうだ。私を呼んだらしいが、案の定、私は寝ていたので、下りて行かなかったことに、食べないと勝手に解釈したようだ。食べ終わるなり、葵さんは帰ると言って、家を後にした。これが今日起こった、すべてのことである。

しかし、ここで一つの疑問が生まれる。

それは、なぜ要だけにアンケートをとったのか、ということである。要ぐらいの年齢対象であるアンケートであるなら、私でも良かったはずだ。しかし、男性だけであるなら私は対象外である。それだったら父さんがいたのに…。男性のみで、要の年齢対象のアンケートなのだろうか。しかし、そんな都合のいいアンケートは、実際問題、あるのであろうか。

そこで私は、その真相を知るべく、さらに要を問い詰めた。

「それで、このアンケートって…毎回あったの？」

「う、ううん…やってない…」

「ふーん、そうなの…」

何か気付いたのか、要は大きく目を見開いた。そして私の目からそらそうとしたが、要にはできなかった。しかし要の動揺しきった表情を、私は見逃すはずがなかった。

「要、何か隠してる？」

「何にも…」

「白状しなって、ね」

少し大人ぶってみた。しかし要は白状しなかった。それもそのはず、要は人との約束や秘密などはきっちりと守り、口は誰よりも堅かった。そしてとても生真面目でもある。そんな要を白状させるのは、難攻不落の城を陥落させるのと同じことであった。

しかし私は決してあきらめようとせず、この後もくどく真相に迫った。そして表情はゆるくなった時もあったが、一言もアンケートについては話そうとはしなかった。十分、二十分と時間は流れ、いくら話しても無駄だと思った。なので私は、要を突き放すように冷たい視線で、そしていかにも怒っているような声で言った。

「もういいわ。母さんに聞く。じゃ」
私は部屋を後にし、要の苦い顔を想像しながら階段を降りた。

リビングに通じるドアから中の様子をうかがった。母さんは台所で夕飯の準備をし、父さんはソファーに座って新聞を読んでいた。なんだか母さんは忙しそうであったので、今は聞くのをやめておこうと思った。それにしても、父さんもなにか手伝ってやればいいのに。

私は自分のことを棚に上げて、そーっとその場から離れた。
今日の夕飯をキッチンから漂ってくるにおいで想像し、腰を折って階段を一段ずつ数えながら自分の部屋に向かって歩いた。

夕飯は一家団欒でそれなりに話が弾んだ。そして要は部屋に戻り、父さんは風呂へ入った。これで居間には二人だけ。最高の状況をいとも簡単につくれた。
そして私は胸の高鳴りを抑え、ゆっくりと口を開いた。
「ねぇ、母さん。ひとつ聞いてもいーい？」
「何、聞きたいことって」
流しの音とともに、母さんの声は静かで澄んでいた。
「何でも答えてくれる？」
「え、何でもは無理だけど、答えられることは答えるわ」
はまった。私は自分にうなずき、ゆっくりと口を開いた。
「今日のことなんだけど…」
母さんは黙々と皿を洗い続けている。
「え、何。聞こえなかった」
母さんの顔には、明らかにウソが見られた。私は奇妙にニタっと笑い、また同じ質問をした。
「今日の、葵さんの、ことなんだけど」
「あ、今日のこと。結構、楽しかったわよ。深雪も降りて来て、一緒に話をすればよかったのに、もったいないわね」

私の目には、母さんは作り笑いをし、どうしようといった、すっかり動揺しきった顔が見えていた。
「それで？」
私は相変わらずニタニタしていたが、母さんは苦い顔をしていた。
「それでって、話しただけだけど…」
「ウソ」
私から笑顔が消えた。母さんは手を止め、今持っている皿を眺めた。そして私は続ける。
「要のアンケート…」
母さんは黙ったままだ。しかし蛇口からは水が流れ続けていた。
「あれって何？」
まだ黙っている。
「ねぇ、答えてよ」
母さんの手は再び動き出したが、口はピクリとも動かさなかった。
「何で答えられないの。これぐらい答えるのは、簡単でしょ。教えてよ」
冷蔵庫の稼動している音と、蛇口から流れる水の音がやたらと大きく感じられた。それほどキッチンと居間には、沈黙が制していたのだ。
母さんの口が開いたと思うと、すぐに閉じた。しかし母さんの口から、かすかに声が聞こえた。
「今は答えられない」
意外な答えだった。こんな返答が返って来るとは思わなかった。私はすっかり動転したが、母さんは粛然としている。
「どうして」
「今は答えられない。今はそれだけ。だけど、あなたと要が高校に入ったら教えてあげるわ。そのアンケート意味。それまで、ゆっくりと待っていて欲しい、ね」
今すぐ答えが知りたかったが、母さんの言葉には説得力があり、そして威厳があった。目にも、強い意志が宿っており、とても目と

目を合わせて話せる状況ではなかった。この重い空気の中で、平気に、今すぐ言ってくれなきゃいやだ、なんて言えない。ましてそこまで私はバカじゃない。そんなこと、このような雰囲気は、歳と経験を重ねていくうちに、自然に理解していた。

その時、キッチン横のドアが開いた。

「今日は暑いな」

居間に入るなり、パンツと上一枚を着ているだけの父さんが入ってきた。その姿は、昔と一変していて、どこにでもいるおじさんを象徴していた。

確かこの頃であった。父さんをやたらと敬遠するようになったのは。父さんの入った風呂に入りたくなくなったのは。隣にいるのが嫌になってきたのは。自分の父さんではないと言いたくなったのは。一緒の部屋にいるのも嫌になったのは。

自分でもひどいことだと思うが、同じ空間にいたり、他人の前に一緒にいたりすると、変に父さんから遠退きたくなる。においのせいなのか、その容姿が悪いのか、それとも動作が悪いのか、私にはその理由が分からない。しかし、父さんがおじさんになったというのは感覚的に分かった。

自分では気付けない理由。それが近くにあるように思えて、遠くにあるように思えた。

結局、この真相は明かせなかった。しかし、その代わりとして、一つの誤解が分かった。それは自分自身のことであった。未来の自分には、今の自分のことを何でもお見通しだが、やはり今の自分では、自身を浅くまでしか理解していない。そのためか、その誤解は高校に入ってから分かった。そう、母さんとの約束の時に。

その後のことであるが、葵さんは宣言どおり、次の年まで二カ月おきに来た。そして要を呼び、話をした。私は用なしにされた気分

で、嫌な気分であったが、今は母さんとの約束の時まで、ひたすらこの思いを胸にしまっているしかできなかった。
しかし、二人の会話には好奇心があったので、盗み聞きは続けた。その会話を聞いていた私は、葵が今年だけで来年は来ないことを知り、そのときは密かに心の中で喜んでいたが、それも時が流れると、ふと寂しくなるものにあった。

そして月日は経ち、あと一年で小学校を卒業し、新たに中学校に入学することになった。
ああ、いよいよあと一年か。こう思うたびに私は憂鬱になった。しかしその反面、小さな喜びを確かに感じていた。

第十章　卒業、そして別れ

桜の花がぽつぽつと開き始め、陽気な気候となりつつあるこの頃、いよいよ小学校生活最後の一ヶ月になった。

この月になると、卒業式の練習だの、卒業制作だの、小学校の全課程は終わったが、予定は卒業式まで詰まっていた。そんなことに、みんなはあまり乗り気ではないようだ。いくらもう勉強しなくていいとしても、やはり遊びたい心は止められない。休み時間に入ったら、男子達は勢いよく太陽が照らす外へ飛び出す。これが毎日毎日、変わりの無い生活が続いた。そしてそんな日が一週間ほど過ぎたある日のことであった。いつもどおりに卒業制作を進めているある日中のことである。突然、先生が黒板の前に出た。

「ちょっと作業やめて」

先生が声を張り上げると、みんなはすぐさま手を止め、先生の方を見た。

「もしこの卒業制作が早く終わったら…学級対抗で、何かレクリエーションをやりたいと思います」

みんなはすぐさま飛び跳ねた。まさか先生の口からこのような話が出るとは思わなかったようであった。というより、こんなことはもっと早く言ってくれればいいのに。

当然のことだが、その後はみんな、仕事の効率は良くなった。そしてあと一週間かかりそうだった作業が、なんと二日で終わってしまった。恐るべきみんなの力。こう見ると、今までのみんなのやる気の無さがにじみ出てくる。しかし、早く終わって良かったことに越したことがない。先生たちも、この驚異的な勢いには驚いたらしく、これから何をしようか頭を抱えていた。

そしてレクリエーションの内容は、各々のクラスで決められることになった。

「どうする。これは…多数決でいいですか？」
学活の係が声を張り上げて言った。そして目立ちたがり屋の男子が、いいですと答えた。そう答えなくても、結局は多数決になっていたことだろう。しかしこう言ってくれた男子のおかげで、早くことが進んだ。
「それじゃ、多数決にします。では、これから何をしたいかを考えてください。時間はですね…五分です。席を離れて話し合っても構いませんので」
係は教卓を離れた。

「で、何にしようか」
幸恵は机に乗り出して言った。
「私的にはどれでもいいんだけど…聖子はどう？」
私は前に座っている聖子に問いかけた。しかし、聖子はガラスの向こうを見つめたまま動かない。
「聖…子？」
聖子の横顔は堅く、なんだか物寂しげな雰囲気を漂わせていた。そして目には、暗い空が映っており、さらにその奥には、人生に嫌気がさしているようであった。もう、こんな人生は歩みたくない。聖子の容姿には、そんな強い意思が見られた。こんな聖子の姿を、四年ぐらい前に一度だけ見たことがある。しかしその時はただ、雰囲気だけを感じることしかできなかった。その時はまだ、人の心を読むことだなんてできなかった。しかし今は違う。聖子のおかげで、だいぶ人の気持ちや感情が分かってきた。
「ちょっと聖子、聞いてる？」
幸恵は無神経だ。しかしこの無神経さも、時には人を元気付ける糧ともなったことがある。
聖子はようやく振り向き、表情をほぐした。そしていかにも元気そうな声で言った。
「何、何か言った？」

聖子の空元気はいつまで続くことか。私はそれだけが心配であった。
「何って、レクの競技、何やるかに決まってんじゃん」
「そうなの…何でもいいわ」
「何だそれ」
幸恵は頭を落とした。
「何か、一人で舞い上がってると、悲しくなってくるし」
私は笑ったが、聖子は微笑んだだけであった。そして聖子は前を向いて、再び外を眺めた。
そしてその後は、私と幸恵だけで相談した。いくら呼んでも聖子は、いい、と一点張りであった。
窓際の席で、聖子の背中は寂しそうに何かを物語っていた。何と言いたいのかは何となく分かっているつもりだが、聖子の本音は心の奥底にあることであろう。私には一生あがいても知れない聖子の本音を、私はそっとしておくことにした。

「で、なんで私がこんなところにいるの？」
聖子はぶっきらぼうに尋ねた。
「まぁまぁ、いいから気にしないで」
「気にしないで…じゃないわよ。なんで騎馬戦の大将なのよ」
「聖子が話に参加しなかったから。ドンマイ」
聖子は幸恵と私と曾我部さんが組んだ手の上に乗っている。しかし聖子はまだ喚いていた。
「別に私じゃなくてもいいじゃない。なんで私なの」
「アンタ、意外と運動神経いいじゃん。しかも、何かやってくれそうだし」
「何それ。私、大して…」
喚いている聖子をほっといて、始まりを告げる、ホイッスルが鳴った。
いよいよ始まった。

それぞれの馬は勢いよく前進し、これから戦場になるであろう、グラウンドの中央へ走った。皆、ものすごい形相、血眼、野生に目覚めた心を持ち、そのおかげでこれから交戦するのが嫌になってくる。赤と白の帽子が宙を舞い、その下で馬から落とされる者や、手で一生懸命にあがいている者がいた。

そういえば、私たちと側近の一組はまったく動いていない。大将がいなくなれば、騎馬戦は終わるので、動かない方がいいという、側近の前原さんから聞いた戦略である。しかし、動かないというのもつまらない。

そんなことを考えているうちに、中央の戦いは終わり、こちらに敵が向かってきた。相変わらずの形相であったが、交戦でかなり疲れている。しかし敵は大将を入れて、残り三組であったので、こちらが絶対的に不利なはずだ。

こんなところで待っているのは意味がないので、私達の馬と前原さんたちの馬は、ゆっくりと前へ出た。

「古葉さんたちは左をお願い。私たちは右の二組をくい止めるわ」

そう言うと、前原さん達の馬は左へと向かった。こんなところで抵抗してもしょうがないので、私達はその指示通りに動いた。

そしてこちらは一対一になり、地面をさみしく風がこする一方、左方では激しい抗戦の砂煙が舞っていた。

前触れもなく突然、相手の馬はこちらに突っ込んできた。

「うそ、どうすればいいの」

聖子は度肝を抜かれたような顔をした。そして生まれたばかりの雛のように、辺りをきょろきょろした。

「帽子を捕れればいいの。がんばってね」

相変わらずの調子で幸恵は答えた。

こんな切羽詰った状況でも、私は左方で抗戦を繰り広げている前原さんの馬を見た。するとその時、前原さんの馬は突如崩れ、砂が舞う地面に騎馬は落ちた。これで三対一。非常に不利な状況だ。

しかし、正面の相手の馬は勢いが治まらないまま、こちらに向か

っていた。
「よし、もうやるわよ」
「そうそう、その意気」
気合を入れる聖子をよそに、楽しんでいる幸恵がいた。こんなので大丈夫であろうか。私はかなり不安に思った。
「来るわよ。かまえて」
その一言で、馬の士気は急激に上がったが、聖子はものすごい形相になった。そして馬を相手側に傾けた。
相手の騎馬は、聖子の帽子を奪おうと手を伸ばした。そして私たちの馬と相手の馬は勢いよくぶつかった。相手の騎馬は前に乗り出し、聖子の帽子をつかもうとしたが、聖子は体をそらしてかわし、そしていとも簡単に相手の帽子を捕った。それと同時に、相手の馬は崩れた。
「よし、あと二つ」
聖子はまた気合を入れ、馬を残りの二組の方に向けるよう指示した。
しかし、相手の帽子を捕らずに、ホイッスルがグラウンドを響かせた。
「え、何で」
すると他の二組の馬は崩れ、皆、悲しそうな表情に変わった。そして、前原さん達がこちらに駆け寄った。
「望月さん、やったわ。私たち、勝ったのよ」
前原さん達ははしゃいでいたが、私たちはボーっとしていた。一体何が起こったのか、まるっきり私たちは理解していない。しかし、私はすぐに気付いた。大将がいなくなれば、騎馬戦は終わる。その言葉は、頭の中で何度も繰り返された。そしてやっと実感が湧き始めた頃、聖子をゆっくり下ろし、聖子に抱きついた。
「聖子が捕った子、あの子は大将だったのよ」
「え、そうなの」
聖子は少し恥ずかしそうであった。背中が熱かったのですぐに分

かった。
「ね、もう、深雪」
聖子は照れていたが、その声には少しうれしそうな感情がこもっていた。
幸恵は前原さんと遠くの方ではしゃいでいるようであった。
「ねぇ、深雪。ちょっと話があるんだけど…」
騎馬戦を終えた後、グラウンド付近に設置されている水飲み場で手を洗っていた。
「え、何、話って。聖子から話すなんて珍しいね」
大抵の人は教室に戻り、水飲み場では私と聖子の二人だけとなっていた。幸恵はというと、前原さんたちと先に行ってしまった。
突然辛い顔をした聖子は、ゆっくりと静かに話した。
「私…私立の中学校に行くの」
「えっ」
私はあまりにも突然のことに驚いた。まさか彼女の口から、こんな言葉がいきなり出てくるとは思わなかった。私はただ、唖然としていて、頭は真っ白であった。
そして聖子は目を真っ赤にした。
「もう会えないかもしれないけれど、私、深雪のことを一生忘れない」
聖子の感情とは裏腹に、私の心の奥底で、彼女に対する小さな怒りが芽生えはじめていて、気持ちも高ぶっていた。
そして、今まで人にはぶつけたことがない憎しみと怒りを言葉にして、聖子にぶつけた。
「…何で…何で、そんなことを言うの？」
単純で短い言葉であったが、聖子の表情は一変した。眉間にしわを寄せた彼女の表情は、驚きではなく、怯えでもなく、戸惑いが感じられた。こんな時、私はいつも口をつぐむのだが、この時だけは違っていた。

「私達って…いつも一緒じゃないの？」
「…うん」
聖子はそれを言ったきり、下にうつむいたまま私と目を合わせようとしなかった。
「もう一生会えないような言い方はやめて。また会おうと思えば会えるじゃない。いくらでも会えるじゃない」
聖子は涙目のまま、顔をすっと上げた。涙を見せないためであろうか。しかし今の私には関係がなかった。
「自分だけだと思わないで…私だって、聖子と離れたくなんかはないんだから」
知らずのうちに、私の目からは涙が滴っていた。光に照らされ、水晶玉のように輝いている涙は、地面に向かって落ちるたびに、ガラスのように割れた。
その時突然、聖子は私を抱いた。そして聖子の顔は緩んだ。
「私…深雪と友達でよかった…」
聖子は、私がいままで見たことがない笑みを見せた。そして涙をこぼしながら優しく微笑んだ。
私も涙を流していたが、聖子の涙をハンカチで優しくぬぐってあげた。

「広仲　紗枝」
「はい」
卒業式が始まり、もう三十分が経つ。
いくら自分たちのためであって特別な式であっても、さすがに退屈だ。しかも、おしりも窮屈になってきた。もう限界に近づいている。早く式が終わって欲しい。なぜ式というのはこう長々と行うのか、私はいつも不思議に思う。
しかしこうしている間も、何かと暇なわけではない。周囲を見渡せば、いろいろな人の癖や動作が分かる。貧乏ゆすりをする人。頭を頻繁に動かす人。手を背中に回す人。これらを見るだけで楽しく

なってくる。意外な人があんなことをやっている、と思うだけで変な優越感を味わった。
そんなことを続けていくうちに、いつの間にか自分のクラスが、卒業証書授与の番になっていた。
そして、自分たちのクラスの番になったと思うと、時間が流れるのはあっという間で、すぐに自分の番になった。
その後は頭が真っ白になって、まったく覚えていない。いつの間にか自分の席に戻っていて、右手には卒業証書があった。
イスに座り、再び人間観察を始めようとすると、聖子の名前が読み上げられた。
「望月　聖子」
「はい」
聖子の声にはまったく迷いがなく、きれいに透き通っていた。
そして、聖子は壇上に向かって歩き出した。その背中には、もうあの時のような彼女はなかった。そこには、堂々としていて、未来を見つめる、今を大切に、ひたすら生きる、一人の少女が会った。
もう、彼女は一人ではない。彼女は周りに支えられ、知らずのうちに大人になった。そして今、彼女はこの学校を飛び立つ。そう、私たちと共に。

卒業式は終わり、記念撮影が始まった。こんな日は学校も特別で、カメラの持込を許している。私も友達に混ざって、それを楽しんでいる。
しばらくすると、教室内は突如さびしくなった。残っているのは私と聖子だけで、幸恵は打ち上げへ行ってしまった。私はその打ち上げには行かないつもりだ。別に楽しい楽しくないというわけではない。ただ、今日はずっと聖子と過ごしたかっただけであった。聖子も打ち上げに行けばいい話なのだが、一人でいたい気持ちは、私には心が痛むほど分かる。
窓際に立っている彼女は、外をじっと見つめていた。その横顔は、

やはり寂しいものがまだ残っていた。
「聖子、そんな顔してどうしたの。帰ろ」
「…うん」
その彼女の一言は、どれだけの重みがあったかは、私には分かる。その言葉を言った時の彼女の表情は、天使のように微笑んでいた。その上、左頬が光に照らされて、柔らかさを感じた。
そして私たちは、自分たちの荷物を持って、教室を出るのであった。

学校から家までの道中、それはあっという間で、もう三本の分かれ道に来てしまった。
そして、私達は向かい合い、互いの顔を見つめ合った。そして、いつの間にか、彼女の心と通じ合っていたのが、今ここで分かった。彼女の感情、欲望なんかが分かるのではなく、彼女の心中が分かる。
今は友達としてではなく、共に生きる一人の人間として認めている。友達とはただの付き合いの上で成り立つものではない。一生を生きるうえで、重要になる人ではない。自分の欠点を、満たす人でもない。ただ、一緒にいるだけで、安心できる人だ。友達とは、使い捨てのカメラではない。私はそう思う。
そして別れ際に、私達は握手も抱き合いもせずに、互いの目を見て言った。
「じゃあ、また会う日まで」
「うん、また会う日まで」
そして聖子は、自分の家に向かって、一本の道を走っていった。しかし、すぐに足を止めると、こちらに振り向いて、大きな声で叫んだ。
「これからもずっと一緒だかんね」
「分かってる」
私は叫んで答えると、聖子はうれしそうに微笑み、また自分の家

に向かって、全速力で走って行った。その姿は後に、大人になるまで見ることはなかったが、寂しくなんかはなかった。聖子はいなくならない。いつも一緒にいる。私が私の心でそうつぶやくたびに、聖子は答えてくれた。

そして私は、聖子の背中をじっと見つめていた。

聖子の走る道は、希望と未来の光であふれていた。

こうして私たちの六年間は幕を閉じた。

思い返してみれば、この六年間の間に築いた仲間と思い出は、一生忘れることはないだろう。辛いことや悲しいこと、楽しいことや嬉しいことは、写真という名の記録用紙に思い出として残された。

私の部屋の壁には一枚の写真がある。その写真はみんながつまんなそうな顔をしている集合写真である。しかしその中で、一人の少女は輝いているように見えた。

第十一章　初デート

この前小学校を卒業したかと思うと、あっという間に中学校の入学式を迎え、それからもう十日が経った。

友達もでき、学校にも慣れた。勉強も小学校と比べると、一段と難しくなった。そしてそこからいろいろな経験を積むこともできた。なんと言っても一番の収穫は、あらゆる人が小学校からこの中学校に集まっているので、自分の人生観が大きく変わることであった。

そして僕は、これからこの長い三年間を、この中学校で過ごすことになった。これからどんな青春が待っているのであろう。楽しみだ。

入学から二ヶ月が経ち、毎朝が憂鬱になる日々が四日続いた。部屋の中がジメジメするし、変に暑いし、何といっても、通学が大変だ。

僕はいつも通りに制服に着替え、朝食を食べて、歯磨きを済まし、部屋で少しの時間をつぶした。そして憂鬱なシャワーを浴びに外へ出る。そこには自転車が一台しかない。すでに深雪は朝早くから学校へ行ったようだ。というより、同じ家にいるのに、そんなことに気が付かない自分はどうかしている。そんな時、僕は始めて自分の愚かさに笑ってしまう。そして学校まで、憂鬱なシャワーを浴びて通学するのであった。

学校に着くや否や、背中から靴下までグッショリぬれていて、かなり気持ち悪い。せっかく傘を差してきたのに、まったく意味がない。

教室に入り自分の席に着くと、持ってきた靴下に履き替え、背中にべったりとくっついているワイシャツを離した。

外は相変わらず、滝のように猛烈な雨で、雨の向こうが霞んで見

えるほどのすごい大雨であった。
ボーっと外を眺めながら体にためている憂鬱に浸っていると、昔からの幼馴染が話しかけてきた。
「なぁ、要。今度の休みに映画でも観に行かないか？」
「なんだ、英一。お前ずいぶん暇なんだな」
僕は英一を見ながら嘲るように笑った。
「はっ。オレは頭がいいからな」
「うぜぇ」
二人は同時にクスクス笑った。
「それで、行けるのか」
「どうだろ」
僕は時計をふと見た。
「ほら、もう授業始まるぞ。さあ早く自分の席に戻れ」
僕がそう言った時、教室のドアが開いた。
すると教室の中は逃げるアリのように、あわただしく動いた。

「おい、それでどうするんだ、映画。行くのか行かないのか」
授業が終わったのと同時に、英一は自分の席からすっ飛んできた。
「どうしようかね」
僕はいかにも、もったいぶった口調で言った。
「みんな行くんだぜ。行こうよ」
「みんなって、他に誰か来るのか」
「来る」
英一はいやらしい顔でにやけた。しかし僕は、いかにも興味ないような顔をした。すると、思ったとおり、英一はかまって欲しそうな顔に変わった。
「なんだよ。知りたくないのか」
「別に」
僕は興味がない人を演じ続けた。
「張り合いがねぇな。じゃあ、もうぶっちゃけ言うけど、幸恵とだ」

「はぁ、あのじゃじゃ馬とか」
「誰がじゃじゃ馬よ」
口が達者だからそう言っているんだ。いくら黙れと言っても黙らないからそう言うんだ。僕は心の中で、できる限り大きな声で叫んだ。
そして幸恵の話が始まった。
「で、行くのか行かないのかはっきりしなさい。というより、私的には、アンタには来て欲しいとは思ってなくもないわ。だけど、アンタが決めることよ。早く決めなさい。こいつはアンタが行かないんだったら、他の人を誘わなきゃいけないのよ。だから早く決めなさい」
終わった。こいつの話はとりあえず長い。これ以上、幸恵の話は聞きたくなかった。それに、これ以上抵抗したところで、幸恵に勝てるわけがない。
僕はついに骨を折った。
「分かったよ。行くよ」
「そう、じゃ」
幸恵はうれしそうな顔で教室を出て行った。そして英一は苦笑した。
「悪いな。半ば強制で」
「強制だよ」
僕は外を見た。
外はまだ滝のように降り続け、帰りまでにやみそうにない。おかげで、今日の体育は中止だ。今日は憂鬱デー。明日はどんな日が待ち構えているのであろうか。
チャイムの音は構内を響かせたが、だんだん雨の音にかき消されていった。
「深雪、お前、どっか行くのか」
「うん、じゃ」

深雪は今にも雨の降りそうな曇天下に出た。
それを見届けた僕は、自分の部屋に戻った。そして支度をする。今日は五日ぶりに雨がやんで、絶好の日和まではいかないが、涼しくてとても過ごしやすい日であった。しかし今にも雨が降りそうな天気で、出かけるのが嫌になる。そんな僕を雨空は、嘲笑っているかのように見えた。
そして五分後、僕も深雪に続いて外へ出た。

風は冷たく、唸りを上げて体中を走り抜けた。葉はそよめき、僕の行く手を妨げるかのように散り荒れた。
その中を一生懸命にペダルをこいだ。待ち合わせの時間までに遅れそうだ。今日はものすごい向かい風で、歩いた方が早いかもしれないくらいであった。
待ち合わせのスーパー前まであと少しの距離を、僕は風を切るように自転車を進めた。

「で、なんでお前がいるんだ？」
「それはこっちのセリフよ」
深雪は鋭い眼光でこちらを睨んだ。
「で、アンタは何でここに？」
「オレは英一と幸恵に誘わ…」
「はぁ？」
深雪は眉間にしわを寄せると、小さなため息をした。
「まさかお前も？」
僕も下をうつむき、大きなため息をついた。
「…やられたな」
二人は呆然と自転車にまたがっていた。ただ、風は二人の間を駆け抜けて、閑静と沈黙を運んできた。
「で、どうする、これから」
いまだに変わらぬ深雪のしかめっ面は、悔しさで詰まっていた。

「どうするったって…せっかく来たんだし…行くか？」
深雪は一瞬戸惑った表情を見せたが、すぐに照れくさそうに言った。
「…うん」
「じゃ…行くか」
「うん」
二人の自転車はゆっくりと進み始め、風はそれを後押しするかのように吹いた。
そして僕らのデートは始まった。長い一日になりそうであった。

風と共に、僕らは進む。
そういえば、女子と自転車で並列に走るのは初めてであった。しかし、全然ドキドキしないのはなぜだろう。普通なら、初めて異性と並んで走る時、胸が高鳴り、今まで感じたことのないような思いでいっぱいになる。そして話の切り出しに困るはずである。
このまま何も話さないのも悲しいので、とりあえず話題をつくることにした。
「ところで、最近、どーよ」
「何、最近って」
「学校はどうだ、ってことだよ」
「あー、そうね…まあまあじゃん」
「それじゃ、会話終わっちゃうじゃん。もっと話題広げようよ」
「私、話下手だから」
意外な返答に、僕はたじろいだ。
「女子って…みんな話し好きなのかと思ってた」
「それは間違いね。人それぞれよ、やっぱり。私は静かな方が、比較的好きかな」
「ふーん」
やはり人それぞれなのであろうか。深雪の一言で、持論は見事に崩れ去った。しかしあまりショックは受けなかった。深雪のおかげ

で、少し人について知ることができたと思ったからだ。
僕は話を続けようとしたが、深雪の、比較的静かなほうが好きだ、という言葉に抑圧されて、何も話すことができなかった。
沈黙と共に、車輪は回り続ける。僕らを妨げる風は、すでになかった。

「何がいい？」
「そうね、私は…何でもいいわ」
「じゃ、早い時間帯のやつにするか」
「うん」
僕はタイムスケジュールを見た。そしてチケット売り場へ二人は向かった。
チケットを買う際、売り場の女性は、微笑ましいものでも見るような顔でこちらを見ていた。僕はその顔を見ることができず、急に背中が熱くなるのを感じた。
チケットを買うと、僕は急いでいるように深雪の手を引っ張り、その場を後にした。深雪の恥ずかしそうな声が聞こえたが、僕はもっと恥ずかしいことを知っていた。

暗い劇場の中、僕らは運よく真ん中の席を陣取り、ようやく落ち着きをとり始めていた。さすが創立記念日で、客は少なく、居心地は最高であった。
しかし映画を見ていると、そんな気持ちも吹っ飛んでいた。さすがにホラー映画は恐い。僕は急に落ち着かなくなった。
そういえば、ホラー映画を観るのは初めてだ。今年中学に入ってから、映画に興味を持ち始めたのだが、ホラー映画には一切、手をつけていなかった。
序盤から中盤に変わってくると、恐怖は増大してきた。自分は見える恐怖なのだが、映画の中の住人は見えない恐怖に襲われている。その恐怖が僕らに伝わってくるのは、人が殺される瞬間だ。ほら、

後ろ。そう思って振り向くたびに、絶叫、そして目の前が真っ暗になる。
そして終盤。恐怖はピークを迎えた。
いよいよ最後の一人にされた主人公が殺される瞬間、それは惨殺で、観るにも観ることができなかった。言葉にも表せない、まさに絶句であった。
人に言うのは少し恥ずかしいが、一時目をつむってしまった。そしてその一瞬のことであった。僕は脇の手すりに手を置いているのだが、その右手に何かが包み込んできた。生暖かい。深雪の手であった。その瞬間、僕の体は化学反応が起こったように、急に熱くなった。同時に心臓の鼓動が、徐々に速くなるのを感じられた。何だろう、この気持ち。
僕はゆっくりと目を開け、深雪の方を見た。深雪は歯を食いしばり、目には映画と恐怖が映っていた。毎日この横顔を見ているはずなのに、なぜだか胸の響きは大きくなっていった。
もう映画なんてどうでもいい。こんなところを早く出たい。僕はそう願いながらも、映画を観続けていた。

「どうだった？」
深雪は束縛から解放されたたような顔をした。
「…緊張した上に、なんか、すごく疲れた」
「そうだね」
楽しそうな顔をする深雪をよそに、僕の心は今の空のように雲が覆っていた。
「なんか食べてく？」
「…うん」
立場がすっかり変わってしまった。映画が終わった今でも、僕の胸の鼓動は、変わらず高鳴っていた。
「おい、英一。お前、はめたのか？」

「え、何が」
「とぼけんなよ。何で、映画に来なかったんだ」
「あー、あれね。行ったよ」
「え、どういうことだ」
「どういうことって、オレはちゃんと幸恵と行ったぜ。しょうがなくだけど」
英一は苦笑いを見せた。そして英一は続ける。
「というより、お前も来なかったじゃん、映画に」
「は？」
まったく意味が分からない。僕らは確かに映画に行った。なのになんで英一らも映画に行った、なのだろうか。
僕はその真相を知りたくなった。
「ちゃんと映画に…」
「分かった」
英一は満面の笑みだ。
「分かったぞ。良かったな、これで解決だな」
「何が」
「映画の件だよ。教えて欲しいか」
「ああ」
「じゃ、百円な」
「なんだそりゃ」
チャイムは高く、教室中に鳴り響かせた。

あとで気付いたのだが、この辺りには同名のスーパーがある。それで、一方のスーパーに集まった英一らと、もう片方のスーパーだと思って集まった僕らは、絶対に会えるはずがない。しかも、僕らは彼らを待とうとせず、さっさと映画館に行ってしまったのだが、英一らはある程度、僕らを待っていたと推測すると、映画館の中でも会えるはずがない。まして映画館に行ってすぐに観始めた僕らとは、絶対に会うことはない。

あー、こんな不思議な巡り合わせがあるだろうか。このことに、深雪はいまだに気付いていない。というより、あえて教えていない。

第十二章　告白

最近、背中に指で刺されたような痛みを感じる。しかし、その痛みを感じるたびに、熱いものに変わっていることを感じた。なぜであろうか。

最近、僕を見て、ひそひそと話しているのをよく見かける。不愉快だ。二年に上がるなり、こんな生活が続くのは嫌だ。何か悪いことをしたわけでもない。何が悪いのであろうか。

最近、僕の噂を耳にする。好きでもない人を勝手に好きだと決めつけたり、変な噂ばかりが流れている。まったく迷惑なものである。噂をもみ消すだけで、一年が終わりそうだ。なんだか引きこもりになりそうであった。

中学二年になると、部活では三年生も引退し、僕らの代に代わった。先輩と言われるようになり、少し照れる。こんな生活を送って、この生活に憧れていた自分を思い出し、さらに照れる。

こんな生活が一生続けばいいと思った。ただ一つを除いては。

「古葉、どうした」

水神は最近よく話すようになった女子だ。男っぽくて、かなり接しやすい。話していても楽しいし、第一、気を使わなくていい。付き合っていくうちに、自然に彼女の魅力に惹かれていく。

「いや、ちょっと、ボーっとしてただけだよ」

「なんだ。お前、目開けながら寝てたのかと思った」

「はは」

自習の時間。これほど暇なことはない。確かに楽でいいのだが、何もしないのは疲れる。しかし、勉強もしたくないし、今は寝る気分はしないし。どうしたことだろうか。

何か退屈しのぎになるものはないかと教室中を見回してみると、

何もない。寝ているもの、まじめに勉強するもの、小さい声で話しているもの。初めから期待はしていなかったものの、かなりへこむ。
しかしその暇も、水神によってなくなることになった。
「なぁ、古葉。何か暇だ。話題を作れ」
「なんだそりゃ。お前も作れよ」
「じゃあ…」
そのあと、一つの話題で話を三十分続けた。よくそんなに話せたものだ、と自分のことをほめてしまう。しかし、自分なんかよりも、水神が大部分を話していた。
そしてチャイムが鳴ると、僕は彼女から離れた。水神の横を通る時、僕は横目で彼女を見たが、彼女の顔はなんだか寂しそうであった。僕を見ずに、女の子のように、シャーペンをいじっていた。話していた時は、あんなに楽しそうであったのに。
僕は教室を出た後も、彼女の表情を思い浮かべた。そしてその意味を考えた。しかしいくら考えても分からない。彼女の瞳の奥にも、何かが潜んでいた。一体何が。今はただ、唇を噛みしめることしかできなかった。

「で、最近、美羽とはいい感じなの」
「え…美羽って誰？」
「アンタ、そんなことも知らないで、よく付き合っていたわね。水神美羽よ、水神」
「へー、そうなんだ」
今まで水神とは、友好的に付き合ってきたが、なぜか名前は知らなかった。
深雪は身を乗り出し、ニヤついた顔を近づけた。
「で、どうなのよ。好きなの」
「はぁ？お前、大丈夫か」
「噂になってるよ。好きなんだね」
「そんなわけないだろ。しかもなんだよ、その噂」

僕は当たり前のことのように言ったが、だんだん怒りだしてきたのが自分には分かった。それに察知したように、深雪は口元で笑った。
「なんだよ」
「だってアンタ、おかしいんだもん」
「何が」
「だって、だって…」
深雪は笑いをこらえながら、ソファーから乗り出した。
「だって…同でもいい人なんかを…そこまで…感情的に…なるなんて…はは」
「なってねぇよ」
「好きなんだ」
「違う」
そんなことを言いながらも、心底そうではなかった。確かに彼女には魅力がある。それも、女性的な、だ。その上話をしていても楽しいし、一緒にいるだけでも安心する。短い間で、次第に惹かれていく彼女の魅力には、僕をとりこにした。だが、恋愛的感情というものは、本当にまったくない。しかし、僕の胸の鼓動は次第に速くなっていった。
そしてその後も深雪は突っかかってきたが、「違う」の一言で乗り切った。

それにしても、なぜ周囲はこのように、他人のことになると、こう突っかかってくるのであろうか。楽しいのであろうか。もしくはただの好奇心。
僕は中学校に入ってから、あまり人が好きではなくなった。人間はいやらしい。それがただ一つだけの理由。小学校の頃はあんなに無邪気であったのに。
明日になればこれがなくなるのであろうか。僕は布団にもぐりこみ、そればかりを祈っていた。

カーンと遠くの方で、金属音が聞こえてくる。我が野球部はすでに練習を始めているようだ。先輩らが引退してから、まだ間も経っていないが、練習は慣れてきている。

それにしても長いホームルームだ。他のクラスはすでに終わって、各部活に向かっているのにも関わらず、自分たちだけが取り残されている。外からは遠くにある山小屋のように、ぽつんと明かりが灯っていることであろう。

とりあえず、何でこのホームルームが長くなっているかというと、今日は担任が出張していて、代理の担任が運悪く、話の長い学年主任になってしまったのだ。みんなは話が長いので嫌っているが、僕はそうでもない。しかし、この時だけは違っていた。部活に早く行きたいという気持ちだけでいっぱいであった。

「…なので、これからは気をつけてください。はい、では、号令」

「起立、礼」

みんなは抜け殻のように疲れ果たしていた。やっと終わったという開放感。早く部活に行くぞというやる気が、その裏に隠されていた。僕もやる気に燃えていた。

そして号令と共に、みんなは外へ急いだ。

最近、夏は過ぎても、少しばかり暑さは残っていたが、秋を訪れる虫の音と共に、涼しい秋風が吹き始めていた。しかし僕は暑さに耐え切れずに、まだ半袖でいた。

僕はなるべく昇降口で込み合わないように、後から教室を出た。暗い廊下をゆっくりと歩き、自分の靴箱の前まで来た。そして靴箱に手を伸ばし、靴を取ると、蝶のように一通の封筒がハラリ、ハラリと舞い、床に静かに降りた。

まず僕は、周りには誰もいないことを確認して、一通の封筒を手に取った。そして封筒の裏表を見た。中を開け、一枚の便箋を広げた。そこには真ん中に二行だけで書かれていた。

今日の放課後、駐車場に来てください。

たった一文を読み終えた時、僕はすぐに水神のことを思い出した。今日のホームルームの時、なにか思いつめていたようなあの目、背中には、僕を圧倒させた。彼女が帰る間際、僕は何も言えなかった。彼女は無言で立ち去った。僕はただ、彼女がドアから出るまで、彼女の背中を見送り、その場で立ちすくんでいることしかできなかった。

そしてすぐに、僕はこれからどうするべきかを考えた。その通りに駐車場に向かうか、または無視して部活に行くか。自分ではどうでも良かった。行っても行かなくても、結果は同じことであろう。

しかし答えは、少しの葛藤もせずに、心の中で素直に決められた。

僕は便箋をたたんで封筒に戻すと、急いで駐車場に向かった。

風が吹き、赤い車の陰から美しい黒髪がなびく。

僕はおそるおそる、その車に近づき、ゆっくりと車の陰から覗きこんだ。

「やっぱり、お前か」

「…うん」

今日の水神は、気持ち悪いほど女の子らしく振舞っていた。かしこまったように手を前に組み、顔をやや下に向けたまま、前髪の間から目を覗かせていた。後ろにまとめたポニーテールがよく似合う。

「あの…いきなりでゴメン。私、古葉…いえ、要のことが好きだ」

確かに彼女は度胸と思い切りだけはあったが、ここまであるとは思わなかった。

そして水神は続けた。

「私の大切な人になって欲しい…お願いします」

なんて言われるかは大体予想できていたが、いざ言われてみると、すっかり困り果てている自分がいた。

水神は頭を下げたまま、静かに僕の返答を待っている。

「とりあえず…頭を上げろ」
水神はゆっくりと頭を上げると、澄ました顔でこちらを見た。その目は優しく、決して期待というものはなかった。
僕は本当に困った。この後、どういう返事をすればいいものか。この場所に来るまで、いろいろと考えていたが、何も思いつかなかった。
「参ったな…まぁ、とりあえず、今日は一緒に帰るか」
「…うん」
思いつく言葉が、次々と口をついてくれたので、この場は難なく収拾することができた。それにしても、おかげで部活に行けなくなったが、今はそんなことを考えている時ではない。本番はこれからだ。それは長く、いつまでも続く帰路が待っていると思ったからであった。

風は吹き荒れ、行く手を阻むかのように落ち葉を操った。それを抜けると、人がめったに通らない道に入る。
僕はその道に入ってから、斜め下を向いている水神に話しかけた。
「なぁ、水神。付き合うって、どういうことだと思う？」
突然の質問に戸惑ったのか、水神は慌てた顔をした。
「付き合うって…好きな人と遊んだり、楽しんだり、いっぱい思い出を作ったり、とりあえず、一緒にいるってことじゃないの…かな」
水神の笑顔は穏やかで、寛大であった。そのはきはきした顔にも、僕は惹かれていった。
「それも一理あるかもな。でも、それがすべて正しいわけではないよ」
何言ってんだ、僕。今、そんなことを話しても意味ないじゃないか。僕は初めに、この質問を言ったのが間違いだったと思った。今頃後悔している自分が滑稽に見えた。
しかし予想外にも水神が食いついてきた。
「え、何。要は何かあるの？」

水神は目を輝かせた。
「え…それはな、えーっと…例えばな、ここに片思いの人がいるとする。それで、片思いの人が好きな人と付き合うとしても、その片思いされている方はまだ、片思いしている人のことが好きじゃないかもしれない。たまに両思いだというパターンは希にあるけど、ほんとにごく希だから、めったにない。つまり、付き合うっていうのはな…もし自分が片思いしている方だとすると、相手に好きになってもらうために付き合い、もし自分が好きになられている方なら、その片思いしている人のことをよく知るために付き合うってことだと思う。結果的に、付き合うっていうのは、愛を育み、互いを知るための期間だと思うんだ」
上手い具合に言葉は次から次へと出てきたので、自分でも感心した。
水神も感心したように、深くうなずいた。
「…うん、そうかも。やっぱり…私の要だ」
そう言うと突然、水神は僕の胸に倒れこんできた。僕はどうすることもできずに、彼女を抱いた。
「好きだよ…要」
僕の胸は、今すぐにでも破裂しそうだ。しかし、水神が僕の腰に手をまわしている状況から逃げるなんて、無理なことであった。しかも、抱きつかれた勢いで、僕もいつの間にか彼女に手を回していた。
しかし、こんな格好も良くなくはないと思い始めたのは、しばらく経ってからのことであった。水神を抱いていると、安心する。そしていつしかは、このままでずっといたいと思い始めていた。
僕らは今どこで、何をやっているかなんて、今にしてはどうでもいい。ただ、このまま時間が止まってほしいと感じているだけであった。
その翌日、誰かに見られていたらしく、僕らが抱き合っていたという話は、すぐさま広まっていた。しばらくの間は、静かに暮らす

ことになった。しかし、水神とは部活のない日にだけ、一緒に帰ることになっている。そしてそのたびに、皆からは冷やかされている、という想像をした。

遠くの方から、高い金属音が聞こえた気がした。

第十三章　難儀な出来事

受験勉強が本格的になる学年、中学三年生。要は恋に勉強に部活に大忙し。そんな要を後押しするように、私は家でちょっかいをかけていた。要をいじるのは楽しい。すぐに反応してくれる。だが、私も頻繁にはそんなことをしていられない。私も受験生だし、部活も最後だ。まず私は、目の前の事柄を一生懸命に行うことを、自分自身に誓った。

「あーあ、終わっちゃったね、総体。はかないね」
「そうだな」
私はソファーの上に寝転がり、要と談笑を楽しんだ。
「で、決まったの、どこの高校行くか」
「ん…まだ。お前はどうなの」
「私は…あそこよ。ほら、何だっけ、あそこ。結構、偏差値六十ぐらいのところ」
「え、ウソ。俺も…」
要は最後まで言い終わらないうちに黙ってしまった。しかし私には、要が何を言おうとしていたのかが分かった。
「へー、そうなんだ」
それっきり、要は黙ってしまった。自分の都合が悪くなると黙るなんて、子供らしくてかわいい。そんなところが私のお気に入りである。
しかし、それにしても驚いた。志望校が同じだなんて。今からでも志望校は変更できるが、自分に相応の学校はその一校しかない。他ははるか上、下に位置しているかで、もしくは私立でしかない。
こんな選択肢しかない私には、今の志望校以外にいくことなんてできなかった。

「…ここで、いいですか」
重い空気に包まれる三者面談。私立の受験が終わり、ほっと息を入れようとすると、またすぐに公立の受験が待ち構えている。
「はい、いいです」
私は母さんの顔を見合わせた。
「あとはここに印と、受験料二千百円をお願いします」
母さんはバッグから印と財布を取り出し、まず財布からお金を取り出した。
「それにしても驚きですよね。要君も同じ高校だなんて」
「そうですね、でも、とりあえず、第一志望が受かってくれるならかまいませんよ」
やはりそうだ。要も同じ高校を受けるらしい。まさか同じ学校なんて、なんか運命を感じる。
そして母さんは印を押した。
「はい、結構です。じゃ、頑張ってね、深雪さん」
「はい」
「失礼しました」
私たちは教室を出て、共に昇降口まで向かった。外は晴れ晴れとしていて、あまり雲はなかった。しかし太陽には雲が少々かかっていた。
「じゃあ、深雪、頑張ってね」
母さんは優しく微笑むと、駐車場までゆっくりと歩いていった。
私は無性にその背中を追いたくなったが、追えなかった。私を突き放しているのか、その背中はもう見られないようなそんな雰囲気を漂わせていたからかもしれない。
「よぉ、調子どーよ」
先に受験先の高校に向かっていた要は、私が教室の席に着くなり、一人浮かれた口調で言った。
「別に…ちょっと不安なだけ」

「あっそ。ま、がんばれや」
要は後ろを振り向いた。
ああ、緊張する。なんで要はあんなに余裕をかましていられるのであろうか。なんだろう、この差。自分は本当に受かるか心配しているのに。
そして監視員が入り、テストを一人ずつ丁寧に配った。
「チャイムが鳴るまで、問題用紙と解答用紙は裏にしておくこと」
私が時計を見た時、前触れもなくチャイムは鳴った。
いよいよ始まった。私の胸には不安と期待でいっぱいであった。

チャイムの音が鳴り、ついに試験は終わった。
「やったね深雪。ついに終わったね。これからどっか行く？」
「いいや…なんか疲れた」
「そう、じゃ、また今度誘うわ。じゃあね」
「じゃあね」
せっかくの誘いだったが、私はまっすぐ家に帰ることにした。ひどく疲れた。
ベッドに寝転がり、私は一週間後の合格発表について思った。果たして合格しているだろうか。その夜も、それが気になって、寝ることなんてできなかった。決してもう勉強をしなくていいという開放感なんてなかった。

よく寝た。受験が終わり、やっと生きている実感が湧く。俺は自由だ。受験という束縛から解放された気分だ。
「おはよー」
「…おはよ」
深雪は眠そうにあくびをし、腕で目をこすっていた。
「どうしたんだ。よく寝れなかったのか」
「…まあね」
深雪は今にも転びそうな足取りで階段を降りていった。

最近、憂鬱なことが多かった。
水神の親が転勤で、あっちの高校に通うため、水神は引っ越すことなった。彼女は手紙のやり取りをしようと言ってきたが、僕は断った。また会えることを信じて、僕は約束だけをした。一時的に交際をなかったことにしよう、思い出は大事にしまっておこうと言った。その時はなぜ、そんなことを言ったかは分からなかったが、後に分かることになった。
そして、卒業式までの一週間。時はむなしく過ぎ去っていった。というのは、小学校のようにレクリエーションは行わず、特に何もしなかった。卒業式の練習、卒業制作、早帰りだけであった。だが、早く帰れるので、いつもと違って思いっきり遊べる。これはあまり憂鬱には思わなかったが、とりあえず、学校での無駄な時間が嫌だった。
最後のとどめには、卒業式の長さである。みな泣きべそをかいて、情けなく思った。早く帰りたいと思っても、司会の卒業生が何を話しているのか分からない上に、話す速度も遅い。
ああ、憂鬱。嫌なことが起こると、人は何でもマイナスのほうに考えてしまう。僕も例外ではない。受験は大丈夫かなぁ、とさえ考えてしまう。
しかし、それも無駄な心配となった。

「あれから二週間。なんか気が抜けるな」
「そう。私の場合、受験が終わってからも、勉強しなきゃって、思っちゃってしょうがないわ」
学校の説明会も終わり、高校から山ほど宿題が出ていたが、俺らは居間でゴロゴロしていた。母さんは買い物へ行っており、今は二人きりだ。
俺はソファーの上で、読書をしている。去年、総体が終わったその後、受験勉強が面倒くさかったので、ふと一冊の本を手に取った

ら目覚めてしまった。それっきり、小説、新書など、幅広いジャンルを読んでいる。そして今読んでいるのは新書である。血液型と遺伝についての本だ。なかなか興味深い。

いつの間にか十二時を回り、深雪が二階に上がっていったのに気付かず、俺は本に没頭していた。

母さんはなかなか帰ってこない。どうしたのだろうか。

俺は母さんを心配しつつ、ページをめくったその時だった。ページの右下に、小さな表があった。そこには両親の子と血液型と記されていた。

へー、こんな仕組みになっているんだ。

俺は親の血液型で子供の血液型が決まることを初めて知った。そのページを読み、次のページに移ろうとしたその時、俺の心の中に一つの疑問が残った。

「あれ…おかしいぞ…なんで」

俺はページを戻し、先ほどの表に父さんと母さんの血液型を当てはめた。父さんと母さんは共にA型。だからこの表をたどると、生まれる子供の血液型はAかO型以外であるはずがない。しかし、俺の血液型はAB型。そして深雪はB型。一体なぜ。

俺はある一つの可能性を考えた。もしかしたら記録違いかもしれない。実は俺らはA型かO型かもしれない。もしくは、父さんか母さん方の血液型が間違っているのかもしれない。しかし、そんな可能性も、一つの考えで一瞬になくなった。それは、そんな立て続けのミスなんてありえないと思ったからだ。第一、こんなに医療が発達しているこの世で、ミスなんてそんな頻繁にするはずがない。

そしてたどり着いたもう一つの可能性は、俺らは父さんと母さんの本当の子供ではないという可能性。養子として引き取られた双子という可能性。

それを考えると、俺の体は震えていた。そして涙が急に溢れ出す。今までの生活は何だったんだろう。

「ただいま」

母さんだ。
俺の体は涙で波紋のように次々と震えた。他人。これほど嫌な言葉がないと思った瞬間だった。
「ただいま」
居間に入ってきた母さんは荷物を下ろし、固まっている俺を見た。
「どうしたの、泣いちゃって。そんなに感動するの？」
俺はもう、母さん、と言えない気がした。なら何と言えばいい。保護者さん、芳江さんと言えばいいのか。もうこの場から消えたい気分だった。死にたい。俺は自殺場所をどこにするか考えた。
涙は止まらず、さらに勢いを増してあふれ出した。
「本当にどうしたの」
母さんはキッチンからタオルを持ってきた。
「はい、これで拭きなさい」
母さんはタオルを差し出した。俺はテーブルに本を置くと、母さんの手をはたいた。そして母さんの手からタオルが落ちる。
「何、いきなり…」
完全に動揺しきった母さんは、きょとんとした目でたじろいだ。
「…義母さん…ほんとのこと教えて…」
「え…なにを」
「俺らの…俺達の本当の親じゃないんでしょ…義母さん…」
驚くことに、俺は一回もしゃくりを上げなかった。しかし、義母さんも落ち着いている。
「…分かったわ。ついに教えるときが来たわね…」
一番返って欲しくない答えが返ってきた。
そして義母さんは落ち着いた姿勢を見せていたが、その裏には泣いているのがはっきり見えた。しかしその目にはまだ、我が子というものが映っていた。
義母さんはすぐに電話の受話器をとりに行った。
「…もしもし、私、芳江ですけど、古葉雄治はいらっしゃいますか…ええ、そうです…」

どうやら義父さんに電話をかけているらしい。そして義母さんの声は唇と共に震えていた。
「…雄治君…今すぐ帰ってきて。あのことで…うん…うん、分かった。じゃ、早くね」
受話器を置くと、義母さんは居間を出た。そして大きな声で、二階に向かって叫んだ。その時、義母さんの背中が妙に小さく見えた。
「深雪、ちょっと降りてきて」
ドアの音がすると、深雪はすぐに降りてきた。いつもの義母さんの声とは違うのが分かったからだろうか。
そして深雪は暗い居間に入ってきた。
深雪はどうしたんだ、という表情でこちらを見た。まだこの状況が把握できないのは当たり前だ。しかし深雪はこの空気を事前から感じ取っていたようだ。
「では…話します」
泣きながら微笑んだ義母さんは前髪を振り払った。
深雪も俺の横に腰掛けた。
「では、単刀直入に言います。深雪にはいきなりだけど、あなた達は…私…いえ、私達の本当の子供ではありません。養子です」
母さんは鼻をすすりながら、一言一言をゆっくりと話した。しかし、そのことに一番驚いたのは深雪だった。
「はぁ？冗談はやめてよ」
深雪は首を振り、声を震わせた。そして義母さんは変わらない口調で答えた。
「冗談では…ありません。今まで、黙っててごめんなさい」
深雪は深刻そうな顔をした。そんな深雪にとどめを刺すような一言が、義母さんの口からとんだ。
「しかも…あなた達は…本当の双子ではありません…」
「え？」
俺らは口をそろえていった。そして互いに顔を見合わせ、頬を紅潮させた。それは俺も知らなかった。

ということは、昔から同棲していたことになる。一緒に風呂に入ったり、一緒に遊んだり、一緒に行動したり、一緒に手をつないで歩いたり。そんなことが脳裏によみがえった。

そして俺の背中は熱くなった。

今までの思い出は何だったのだろう。俺は血のつながっていない家族と今まで十五年、暮らしていたのだろうか。深雪と一緒に一つ屋根の下で暮らしていたのだろうか。

そう思うと、やるせない気持ちでいっぱいになった。

深雪も同じことを考えているのだろうか。深雪は唇を噛み、眉間にしわを寄せて、体を震わせた。俺と同様、涙を流して、顔は真っ赤だ。こんな事実を目の当たりにすると、誰だって驚く。まして血のつながっていない異性と十五年暮らし、自分は家族ではないと今まで信じてきた母親から言われたら、誰だって驚き、嘆き、羞恥心が生まれる。

一番身近に、その上一番長く一緒にいた人間は隣にいた。

俺もその事実を知って、初めて深雪から離れたいと思った。もうこの家には居られない、という気持ちになってしまう。そして積み重なる思いがこみ上げ、そして涙になる。

すると突然、深雪は立ち上がり、袖で涙をぬぐいながら居間を出た。涙を散らせながらも躊躇せずに、そのまま外に向かって走っていった。

「深雪…」

義母さんの悔やみが残った。俺の不快感が残った。そして最後に残ったのは、ドアのゆっくりと閉まる音であった。

ドアの開く音が聞こえた。深雪が帰ってきたのだ。

居間が開くと、父さんはイスから立ち、深雪に向かって歩き出した。

「何時だと思ってるんだ…」

義父さんは表情をこわばらせながら、声を低くして言った。

「…九時半よ。それで？」
深雪は開き直りながら言った。
「心配したんだぞ。どこで何やってたんだ。こんな大事な時に…」
「関係ないでしょ。私は義父さんの本当の…」
その時、父さんの平手打ちが鳴った。そして深雪は右頬をおさえた。
「オレが親のいないお前らの気持ちなんて分かるわけがない。だがな、本当の子供を失ったオレ達の気持ちが、お前に分かってたまるか…」
父さんの手は震えていた。
そして父さんは何も言わずに居間を出て行った。
深雪はまだ頬をおさえて、ピクリとも動かなかった。しかし深雪は頭を起こして静かに言った。
「…母さんは…母さんはどこ？」
「…父さんに聞いて」
俺は深雪がデリケートなのを知っていたので、僕の口からは母さんのことを言えなかった。
そして深雪は反論をせずに、素直に父さんの後を追って行った。
それにしても、俺も薄情なやつである。ただ言い方が分からなかっただけなのに、父さんにこんな重役を回すなんて。
しかし、深雪がいなくなっている間に、母さんがあんなことになるなんて思ってもいなかった。
俺は一人居間に残されたまま、母さんのことを考えた。そして、涙でいっぱいになった目は、次第に光を吸わなくなった。そして視界がうすれ、ついには目の前が真っ暗になった。

その後、深雪は父さんからすべてのことを知った。俺達がここに至った経緯、母さんの身に起こったことなど、すべてを聞いた。どうやら深雪と父さんの間には、血を越えた絆ができたようだ。
そして母さんはというと、深雪が出て行った後、父さんが帰って

きて僕にすべてを話している途中で倒れた。急いで病院に連れて行き、診察を受けた。その病状は軽く、ショックによるものと、軽い貧血らしい。大事に至らなくて良かったが、母さんの病弱なこともあって、一応一日だけ短期入院することになった。

その言葉を聞いて安心したのか、深雪はベッドに戻り、そのまま寝た。

父さんも同様、すぐに寝たが、その前に居間で寝ている僕に布団を掛けていった。そして電気を消し、二階へとゆっくり上がった。

そして僕はベッドに入って、まず母さんのことを思った。今、病院で何を考えているのだろうか。俺達のことを、どう感じているのだろうか。そして自然に深雪の顔が浮かんだ。今、深雪はこの関係をどう思っているだろうか。そして父さんのことを思う。父さんはこの事実を知られて、どんな気持ちだろうか。俺は母さんが倒れた光景を、まぶたの裏に映した。

しかし、その時はまだ気が付かなかったが、母さんが倒れたのは、黒い影が迫る前兆にしかすぎなかった。

第十四章　不幸

蒼空の下で、私は空を見上げた。そこには雲がある。その雲には、ある人が映っていた。身近な人であった。白く、柔らかい頬である。なんだろう、この懐かしい気持ち。なんだろう、この無性に胸が苦しい気持ち。

そして時々、私は太陽に照らされ輝いている川に向かって、石を滑らせる。波紋が、アメンボが水上を走った跡のように次々とできた。時々、土手に座ってその消えかかった波紋を見つめると、私は母さんのことを思い出す。果たしてあの人は幸せな人生を送っていたのだろうか。

私は手の平を重ね、高く空に掲げた。なぜそんなことをしたのかは分からない。しかしその時は確かに分かっていたのは、やりたかったという気持ちがあったということだ。

私は空を見続ける。いつまでも続く、青々とした海の水平線を見るように。

高校の入学式。誰だって不安と希望に満ち溢れた状態で望むことだろう。私たちの晴れ姿は、母さん達が見てくれた。

クラス分けは、要とは違うクラスで、少し安心した。中学校からの友人も多く、さらに安心した。しかしそこには、小さい頃からの幼馴染、親友がいない。それだけが唯一の不安であった。

そして時間は止まらずに流れていく。

梅雨が入る一ヶ月前のこと。母さんは体の異変を感じていた。私は母さんに分からない問題を教えてもらうために、主寝室へ向かったところ、主寝室から物音がし、ドアの隙間からそっと覗くと、胸を指であちこち押している母さんの姿があった。何をやっているのだろう。

その時はまだ、母さん以外は、その異変に誰も気付いていなかった。

梅雨を迎えるのと同時に、恐れていたものもやってきた。

外は起きたときから雨で、憂鬱な日は始まった。時間は刻々と刻み、そろそろ九時を回る頃だ。

そんな時、母さんは突然倒れた。胸を抑え、雨音をかき消すような悲痛な声を出し、痛みにあえぎながら床を転げまわった。額に汗を掻き、冷たい床の上でうずくまっている。母さんはテーブルに片手で寄りかかり、もう片方の手で胸を押さえながら方で息をしたと思うと、枯れた樹木が倒れるように、床に向かって勢いよく倒れた。

私は目の前で起きた突然の出来事にどうすることもできず、ただ立ちすくんで、その母さんの姿を見ていることしかできなかった。

「う…苦しい…」

居間に倒れていた母さんは、すぐに救急車に運ばれていった。

私と要も救急車に同伴しようとしたが、定員の理由で、父さんだけが救急車に乗り込んで行った。

それから長い間、私は要と居間で時計の時間を聞いていた。ゆっくりと進む時間は、まるで止まっているように思えた。居間は静寂に包まれ、その空間を丸呑みにした。しかし父さんは三時間で帰ってきた。しかしそこに母さんの姿はなかった。果たしてどうしたのだろうか。

私はソファーから立ち上がり、そのことを父さんに聞いてみた。そして父さんは枯れたような声で話した。

「…乳ガン」

父さんはイスに座り、テーブルにひじをついて、頭を抱えた。要はソファーの背もたれに身をまかせた。

私はいつの間にか、ソファーに座っていることに気が付いた。ガン、という言葉を聞いただけで、頭がクラクラする。そしてそのガンになった人は、死んだ人と同然だと感じていた。母さんはこの世

にはいない。私は勝手にそういう呆気と喪失感に浸っていた。
ガンになるとはどんな気持ちだろうか。死ぬ前とはどんな気持ちだろうか。孤独とはどんな気持ちだろうか。
私は知りたかった。今の母さんは、今の私に似ていると思った。悲哀感、喪失感。絶望感に脱力感。
ふと私は今すぐ母さんに会いたいと思った。そしてそれをすぐさま実行に移した。
走って家を出て、自転車に乗り、雨が降っているにも関わらず、私はしとしとと降る雨を突っ切った。
ジメジメとする湿気の中、私は何も考えずに近くの病院へ向かった。すぐに家を飛び出したので、病院先を聞いていなかった。なので、病院を一つずつ回るしかなかった。
病院の前に着くと、自転車を乗り捨て、病院の入り口に向かって走った。そしてロビーに入り、受付まで歩く。
私は息を荒くしながら言った。
「母さん…古葉芳江さんは何号室ですか」
「古葉さんですか。ちょっと待ってください」
そう言うと看護士は名簿をめくり、一つ一つの名前に目を走らせた。そしてすぐに顔を上げた。
「古葉さんはこちらの病院に入院されていないみたいですね…それにしても、その格好、大丈夫ですか」
私の服はぬれていた。体は変に温かく、ジメジメとしていて気持ち悪い。前髪は垂れ、後ろ髪はきれいにそろっていた。
「大丈夫です…ありがとうございます」
そう言った私はすぐさま受付を離れ、再びしとしとと降る雨の中に飛び込んだ。
そしてその雨に打たれている自転車を起こし、すばやく飛び乗ると、私はペダルを思い切り踏んだ。
私は風を切るように走っていたが、雨を全身で受けていた。そして渾身の力を振り絞ってペダルをこぎ続けた。もう疲れた。しかし

ここでこぐのをやめるわけにはいかなかった。私の中の何かがそれを抑制したのだ。しかし私の意識は朦朧としていた。朝からいろいろあって、もう何も考えていられない。

そして角の店を右に曲がる時であった。

私は思い切りハンドルを切った。そして視界は角の店から目の前にある大きなトラックに変わった。トラックはクラクションを鳴らしながらこちらに突進をしてくる。トラックは止まることもなく、大きく歪んだ。私もハンドルが切れず、そのまま地面にすべるように転倒した。

そして私は自転車と一緒に頭から電柱にぶつかった。

「バカヤロー、危ね…お、おい、大丈夫か」

私は触角をつまれたアリのように、まったく動かなかった。というより、動けなかったのが本当の話だ。

トラックの運転手は急いだ様子で降りると、私におそるおそる近づいた。

「おい、大丈夫か。死んでないか」

私はしばらく黙って何もしたくなかったが、それは運転手に悪い。

「…大丈夫…です」

話した時、口の中に血の味と痛みが残っているのに気が付いた。どうやら切れているようだ。そういえばわき腹も痛い。強くこすりつけたようだ。

私はゆっくりと立ち上がると、私の足はがくがくと震えて、膝からは血がにじみ出ていた。そして頭から、目に血が流れ込んできた。

「そのケガ、本当に大丈夫か。病院に連れて行こうか」

病院、そうだ、病院だ。

私は目的を思い出し、自転車を起こすために腰を下ろそうとした。しかし痛くて下ろせない。その時に、顔に出てしまったのが悪かったのか、運転手はさらに顔を曇らした。

「本当に大丈夫か」

「お気遣い…ありがとうございます。できれば、その自転車とって

くれませんか」
「…分かった」
いつの間にか、雨は豪雨に変わっていた。滝のように雲から地へ降り注いでいる。
私は肩で息をしていた。前髪は垂れ、服は肌に密着し、靴の中には水溜りができていた。
そして運転手は自転車を起こし、私はそれを受け取った。
「…ありがとうございます。では、これで」
私は軽く会釈をし、自転車を押し始めた。自転車のチェーンは切れ、スポークは何本か折れていた。もうそんな自転車に、乗ることなどできなかった。一歩一歩進むたびに膝は曲がった。この坂を上れば、病院はすぐそこにある。私は自身を励ましながら歩く。
私は私の背中を見届ける運転手を想像した。その顔は、不安と腐心でいっぱいだった。

「古葉…芳江さんは…この病院に…入院して…いますか」
「え…ちょっと、大丈夫？すぐに診てもらったほうが…」
「それより…古葉芳江さんは…」
「…分かったわ。それはあとで教えるから、まず手当てをしましょう。それから…」
「早く…古葉芳江さんを…早く」
受付の看護士は不審そうな目でこちらを見たが、すぐに名簿に目を走らせた。
「古葉さんは…２０３号室です。あなたは…お子さんですか」
「いえ…いや、そうです」
私はゆっくりと階段に向かった。足を引きずるその姿は、まさに負傷者であった。膝からこぼれる血は、白い床に点々と跡を残した。
そして階段の前まで来ると、目の前がうっすらとぼやけて見えてきた。階段に足をかけようとするが、思うように膝が曲がらない。しかし私は手すりにつかまって、やっとのことで踊り場まで上った。

あと半分、と私は心の中で唱えた。が、視界は次第に薄れていった。そして二段目を上ろうとしたその後、私は覚えていない。

「ん…ん…」

私は目を開けると、目の前には白いが、薄暗い天井が一様に広がった。

そして隣から声が聞こえた。

「深雪…起きた？」

母さんの声だ。

私は体を起こそうとしたが、全身に痛みが走った。そして再び柔らかいベッドに落ちた。

「無理よ。もうちょっと寝てなさい」

「…うん」

私は頭を枕に沈め、そのまま動かなかった。

そして目だけを動かして辺りを見回した。周りは静寂に包まれ、誰もいないように思えたが、実際に見てみると、本当に誰もいなかった。隣のベッドに母さんが本を読んでいるだけであった。

倒れる直前、そこだけ記憶が霞んでいた私は、母さんに聞いた。

「母さん。私、どうしたの」

「倒れたの、階段で」

「…ふーん」

母さんは本を閉じて、電気を消そうとした。

「待って、消さないで」

「…分かったわ」

電気スタンドのスイッチから手を放した母さんは、布団にもぐりこんだ。

「ねぇ、要と父さんは？」

「家でお留守番」

「え、何で」

「だって女同士のほうが、いっぱい話せるじゃない」

「…ふーん」
私は流し目で母さんを見ると、母さんは自分と反対のほうを向いて寝ていた。
「私、ところで何でここにいるの」
「だってアンタ、軽い全身打撲をしたのよ。あと、ちょっと出血のしすぎで」
母さんはこちらに寝返ると、うれしそうに微笑んだ。
「…久しぶりね」
久しぶりだった。母さんがこんな笑顔を私に見せるのは。ここ最近、恐怖と苦しみのどん底にいたような顔をしていた。しかしその理由はすぐに分かった。
私は母さんとたくさん話がしたくなった。
「母さん、覚えてる、あの赤い巾着」
「赤い巾着…あー、母さんからもらったあのやつ。覚えてるわよ」
「あの時、おばあちゃんも母さんも教えてくれなかったけど、そんなに大切なものなの、あれ」
「うん、そうらしいわ。母さんからは少ししか聞いたことないけど、母さんはずっと大切にしてきてたわ」
「聞かせてよ、その話」
「…うん、いいけど…長いわよ」
「いいよ、寝ないから」
「分かったわ。じゃあ、話すわよ」
「うん」
母さんは布団を掛けなおした。
「実は、その巾着、母さんのじゃないのよ」
「え、そうなの」
「うん…それで、私のおばあさんになるんだけど、私のおばあさん、第二次戦争に入る前に、ある大学生に恋したの。なんか、映画館へおばあさんのお母さんと一緒に行ったみたいなんだけど、その映画、恐かったみたいで、つい隣の人の手を握っちゃったんだって。それ

が恋の始まり。それでその人、大学生でおばあさんの一歳年上だったの。それで、二人はすぐに恋に落ちちゃって、すぐに結婚の話まで来たの。しかもおばあさん、妊娠までしたのよ。だけど、第二次世界大戦が始まって間もない頃、その大学生についに赤紙が来たわ。その後はもう大変。家族、親戚、近所が大忙しだった。その中でおばあさんは、徴集の穴を見つけようとしたんだけれど、大学生はその運命を素直に受け入れたの。おばあさんが見つけただけ提案しても、全部断ったの。それで月日は流れ、見送られる日になったわ。プラットホームには煙と共にたくさんの大学生がいて、みんな別れが辛かったみたいだったって。おばあさんも例外じゃないわ。だけどその大学生は違ったの。笑ってたの。大学生は別れ際に赤い巾着をおばあさんに渡して、ゆっくりと微笑んだわ。おばあさんはもちろん受け取ったわ。そして大学生は中を開けるように言ったの。おばあさんは夢中で巾着を開けて、手にひとつの銀の輪を落としたの。それは指輪だったわ。そして、おばあさんは顔を上げると、大学生はすでに列車に乗ってて、しかも汽車は汽笛をあげて動き出してたの。そして大学生はこう言ったわ。それは僕の親父の工場で、僕が削って僕が磨いたものです。僕は指輪も買えませんでした。箱さえも買えませんでした。だけど、その気持ちを受け取って欲しい。僕は死にません。絶対あなたのもとへ、手足がなくても、はいつくばってでも戻ってきます。僕の赤ちゃんが生まれるまでには、絶対この戦争を終戦に迎えさせてやります。僕を信じて、僕を思って、それを僕だと思って、生きる喜びと笑う楽しさを、いつまでも、忘れないでください。あなたには、ふくれっつらが似合いません。僕はあなたといつも一緒です。そう言った時、おばあさんはもちろん汽車を追っていったわ。最後には手を出して大学生を汽車から引きずりおろそうとしたんだけど、大学生は手を引っ込めて、おばあさんに背を向けたわ。それが最後だったわ、おばあさんがその大学生を見たのは。おばあさんは戦争が終わった後、その大学生が戻ってこなかったから、日本各地、あらゆるところまで行ったわ。世界の果

てまで行こうとしたんだけれど、お金がなくて、そこで打ち切りになったわ。まだおばあさんはその大学生のことを信じていたの。だけど、十年、十五年経った時、おばあさんは悟ったわ。もう彼がいないって…」
「…ひいおばあちゃん…かわいそう」
私の目からは、ぽろぽろと涙が溢れ出ていた。そして一呼吸置いてから、何気ない口調で母さんに聞いた。
「それで、どうなの、調子は」
母さんは寝返り、反対のほうを向いた。
「…知らない。お休み」
母さんは鼻をすすった。
なんか悪い事を聞いたようで、私の気持ちは良くなかったが、今までの疑問がひとつ解けて、なぜだか気持ちはすがすがしかった。
私は今日たまって、今まで隠されていた疲れがどっと出てきたような気がした。そして私が目をつむると、眠気は夢の中へと誘った。

「…いつから、胸のしこりが出てきましたか」
「分かりません。多分、二ヶ月ぐらい前だと思います」
「困りましたね…今患っているガンは、転移を続けて、腋窩リンパ節…失礼、脇の下、肝臓まで広がっています。このままだと、間違いなく…死ぬでしょう」
「…そうですか」
私は眠りから覚めていたが、目は開けていなかった。白いカーテンは、光で純白になっていた。うっすらとまぶたを開けてみると、カーテンには隣のベッドで母さんと医師らしき男の影が映っていた。
「驚かないんですね」
「だって、行き着けの病院ですもん。安心しますよ」
「そうですか…」
医師はカルテを閉じ、ひっそりと朝を迎えている外を見た。
「で、どうするのですか。古葉さんにはなんて言いましょう」

「死にますといっておいて下さい。そうすれば安心するでしょう。誰だって死ぬって分かったら、へこたれるから。死ぬか分からないとか、死ぬか生きるかの瀬戸際だとか言ったりして、大騒ぎしたまま死ぬより、私はひっそりと死ぬことを望みます」
「はは…そうですか。分かりました。伝えておきます」
そう言うと、扉に向かって歩き始めた。しかし私のベッドの前まで来ると、いったん歩みを止めた。
「それにしても、よくここまで育て上げましたなぁ」
「それはそうですよ。だって私たちの自慢の娘ですもん」
私はその言葉をベッドの中で、ずっと噛みしめていた。その一言が、私を存在証明させたからだ。何のために生きているか、私はそれを考えたことがあるが、その時は分からなかった。
医師は部屋を出ると、病室は静まった。
そして母さんはカーテンを開け、澄みきった目をこちらに向けて言う。
「深雪、起きてるでしょ」
「うん」
私はゆっくりと体を起こすと、昨日ほどの痛みはなかったが、チクチクと全身に痛みが走った。そして私は続ける。
「いきなりだけど、約束してくれる？」
「え、何を」
「母さんが全快したら、五年前のアンケートのこと、教えてくれる？」
母さんは少し戸惑ったような顔をしたが、太陽に照らされた部分が微笑んでいるように見えた。
「うん…いいわよ、約束ね」
その後、父さんと要は母さんの見舞いに来た。私はついでだ。医師から父さんにあのことを話すと、父さんはみるみるのうちに真っ青な顔になった。
そして父さんにゆとりを持たせてから、私は父さんに支えられな

がらも退院した。私が病室を出て行こうとすると、母さんはつぶやいた。
「深雪…ありがとう」
その後、母さんは診察を繰り返し、体調が良くなったと思われたが、六月下旬、再び体調は悪化した。
私たちも何度か見舞いへ行ったが、その度に顔色は悪くなっているように見えた。しかし私達は最後まであきらめずに、母さんのお見舞いへ行った。
そして梅雨が明けたころである。
私は霊安室で静かに寝ている母さんの姿を見た。唇は青く、しわ一つなかった。ピクリともしない上に、小さな息吹さえも感じられない。目は閉じられていた。母さんの蒼白な頬をなでたとき、私は初めて知った。母さんはすでに死んでいる。つまりもう目を開けない。つまりもう呼吸をしない。つまりもう生きていない。
母さんは誰にも見守られず、病室で一人ひっそりと死んだのだ。
私は母さんの頬から手を離すと、要は母さんにすがりついた。そして、母さん、と連呼する。
そんな要の姿を見ると、母さんの言葉を思い出した。
「要、やめな」
私は母さんの残した言葉を尊重したかった。そして要の肩に手をかけると、すぐに振りほどいて母さんの体を大きく揺らした。
その姿は無邪気そのもので、私にはどうすることもできなかった。ただ、その姿を見守ることしかできなかった。
しかし、母さんの顔は微笑んでいた。要を励ますように。
葬式の日になった。
母さんは棺の中で、静かに眠っていることだろう。
私と要は、斎場の前席でボケーと座っていた。まだ信じられないような感じで、母さんの死を完全に受け止めてはいなかった。

会場には人が集まり、すぐにでも始まりそうな雰囲気だった。
その時だった。要は席を立ち上がり、涙を流しながら会場を出て行った。
私は要のことを呼んだが、要は夢中になって走って行った。この緊張感の中、どうやら強い感情に襲われたようだった。
私は父さんを探し、そのことを告げて、すぐさま要の後を追っていった。

どこに行ったのだろうか。私は要の行きそうなところを探したが、どこにもいない。なぜか今は土手の上を歩いていた。風に押されてこの土手を歩いていたら、ここにたどり着いたのだ。
今頃、葬式はどうなっているかなぁ、なんて思いながら、辺りを見晴らす。すると土手の中腹に、一人の人が座っていた。風が吹くと、学ランが、川に流される太陽のように揺れた。
そして私は土手の中腹に下り、要の横に座った。
「どうしたの」
「何か…あそこにいるべきじゃないと思った」
要は足の中に埋めてた顔を上げた。
「俺…なんか生きていく自身なくしちゃったな…」
「馬鹿、あんたがそんなに弱くてどうするの。母さんだって天国に行くにも、まともに天国に行けたもんじゃないよ。成仏できないじゃない。もっと強くなりなよ。母さんはきっとそんな要の姿を望むよ」
「…そうかもな」
要は足を投げ出し、風が走る草の上に寝た。
「んん…気持ちいいな…お前もやってみろよ」
「うん」
私も要に続き、大きく腕を伸ばし、足を投げ出す。
「本当だ、気持ちいい」
しばらくそのままでいると、葬式のことを忘れていった。

「ところで、なんか俺達、血縁がないみたいだな」
「うん」
「昔のこと思い出すと、なんか恥ずかしくなるよな」
「うん」
「一緒にスイカを食べたり、一緒の部屋に寝たり、一緒に風呂に入ったり…そんなことより、お前、中一の頃に、一緒に映画に行ったろ。その時さ、お前、俺の手握ったんだぜ。覚えてるか」
「え…」
「お前…俺のこと好きなのか」
「馬鹿、なんてこと言うのよ」
私は急に顔が赤くなったのが分かった。しかし横で笑う要を見て、必死に冷静さを保とうとした。
「そんなことより、母さんは何で死んじゃったのかなぁ」
「さあな。ただ、素直に死を受け入れたんじゃねぇの。もし、生きてたとしても、きっとろくな人生がなかったと踏んだんだろ、きっと」
要は空を眺めながら、大きなあくびをした。
母さんは死んだのに、地球は変わらずに回る。どうやら人一人死んだところで、この世には関係がないようだ。私達にはあれほどの影響を与えたのに、この自然界なんかにはまったく影響を及ぼさない。母さんは死んだのに、私が生きているなんて、なんか変に思える。母さんの生きている時間は永遠に止まり、私の生きている時間は止まらない。
私は信じられない気持ちで、果てしないほど続く空を見つめた。
「なぁ、母さんって、幸せだったのかなぁ」
「当たり前じゃない。生まれてきたら、幸せな家族に囲まれて生まれるし…」
「なぁ、俺達の家族って、どんなのだろう」
要の目は切なく、さびしい雰囲気をもたらした。
「きっと…いい人だったのよ、私と要の親って。ところで、要の幸

せって何？」
　要は一時、戸惑った顔を見せた。突然そんなことを言われると、誰だって何と言おうか考えてしまう。
　そして要は思いついたように言った。
「変な回答だけど、俺の幸せは、もし地球の滅亡する日が分かった時、最後に何をしようかって考えるときが幸せかな。後は…お前やみんなの幸せかな、いや、俺の幸せかな。ほら、よく言うじゃん。自分の幸せがみんなの幸せって。そうだったらその逆も言えるだろ。俺の幸せはみんなの幸せって」
　なぜだか私の体が熱くなった気がする。背中に熱いのが過ぎると、急に寒くなった。そして、いつしか心のどこかで、要に対しての好感が生まれていた。鼓動が高鳴り、再び熱が襲ってきた。
　私はすぐにでもこの場を離れたかった。
「ねぇ、早く斎場に戻ろうよ」
　要の手をつかむと、要の手は今までと違う暖かさで包まれていた。

　葬式が終わったことを知り、火葬場に移動すると、ちょうど煙突からは白い煙が出始めた頃であった。私と要はその白い煙を、鷹のような鋭い目で、じっと見ていた。最後まで見なくてはならない、そう感じたのだ。白い煙は雲に溶け込むように青々とした空に消えていった。上空で風が吹くと、雲は笑った。

　陶器の骨壷に、会葬者は次々に骨を入れていった。細長いものや弱々しく小さいものもあった。しかしその骨には、新たなる生命の息吹さえ感じられた。
　私達は後から来て、本来は最後方のはずなのだが、親切な人が私達を前に入れてくれた。そしてそこから、一つ一つ丁寧に入れられる瞬間を、まじまじと見ていた。
　私達の番に来ると、右手に鉄の箸を持ち、骨を両バサミして、骨壷に入れる。骨壷は母さんを誘うように底が暗かった。骨を入れる

時、私は少し躊躇した。それと同時に要も止まった。やはり要も同じ気持ちであった。この骨を入れると、もう母さんとは会えない、そう思ったのだ。

しかし入れないわけにはいかなく、結局は入れてしまった。もう母さんとは会えない。そう思うと、私の頬には涙が滴っていた。しかしもう会えるわけではない。また会えることを信じて、最後に骨壷を見つめた。火葬場を出るまで、私は歩みを止めなかった。

火葬場を出ると、要は私を抱きしめた。

その時、この空の下で生きている喜びと愛を感じられた。今、私たちの他に抱き合っているのは何組いるのだろうか。

私はそう思いながら、要の腕の中で眠るように息をした。

第十五章　再会と歓喜

芳江が死んでから、ちょうど一年が経つ。ふと空を見上げると、空はぽっかりと穴が空いたように、そこだけが青かった。

わずか三十七年の小さな命は、去年、天に散った。

この空の下には、どれだけ悲しんでいる人がいるのであろうか。そのことを知らずに、この空の下で、どれだけ歓喜に沸いているのであろうか。大切な人を無くした日の翌朝を知っている人は、この空の下にどれだけいるのであろうか。多分、半分にも満たない。泣きたくて、ベッドにずっと寝たくて、布団の中でうずくまりたくて、そのまま息を止めたくて、無性に気持ちが駆り立てられて…。あの人と最後に…いや、ずっと話したくて、ずっと抱き合いたくて、ずっと息を通い合わせたくて…。

芳江の一周忌が終わり、仏壇の前で手を合わせると、そこで初めて芳江と心が通わせることができるような気がする。

そろそろかな。芳江と話し終えると、勢いよく立ち上がった。

明るい空の下。俺は自転車に乗って走っていく。深雪と並列して、家に向かっているのだ。

今日は二人で水族館に行き、楽しい一日を送った。しかしこれは彼氏彼女という関係で、もう兄妹のような関係にはあれっきり戻っていない。父さんもその関係を知っているし、理解している。そんな保護下で俺達は暮らしている。

「ただいま」

俺と深雪は居間に入る。

「お帰りなさい…深雪」

「要、ちょっと出かけるぞ」

父さんは要を手招きすると、玄関へ出て行った。その後を要が追

いかけると、家に残ったのはドアが閉まる音だけだった。
「お帰りなさい…深雪」
その声は母さんの声に似ていた。温かく、よく透きとおって耳まで伝わり、まるで空気に染み込んでいるようであった。
私は声のする方を振り向いた。
するとそこには、見たこともないおばさんとおじさんがイスに座ってこちらを見ていた。二人とも優しく微笑んでいるかと思うと、突然顔をしわくちゃにして泣き出した。
そしてイスから立ち上がり、私のもとに歩み寄ると、おばさんは私を抱いた。
「ごめんね…ごめんね…」
突然のことに、私は戸惑った。ごめんと言われる筋合いや覚えはまったくない。
私はそのおばさんを突き放し、少し後退した。
するとおばさんは戸惑った顔をすると、すぐにもとの優しい微笑を作った。
「深雪…信じられないだろうけど…私達、あなたの…あなたを…産んだのよ」
その言葉を聞いた時、私は目の前の人間を認めなかった。テーブルの近くに立っている男、私の目の前で泣きながら微笑んでいる女、どちらも認めなかった。
こんなの、私の親じゃない。私の親は二人だけ。だから二人は私の親じゃない。
私は首を振りながら、へばりつくように壁に寄りかかった。
「嫌…そんなはずない…私の母さんは…母さんは…死んだんだから。そんなこと、知らないくせに」
おじさんとおばさんは困惑した顔をした。
私はそんなことを気にせずに、今の気持ちをそのまま言った。
「もし私の親だったら…示してよ。なんかあるでしょ、証明するもの。出してよ」

私はいつの間にか混乱していた。ここで言っている言葉の意味、まして何を言っているのかさえも分からなかった。
そんな私を見て、おばさんは決して私を惨めそうな目で見なかった。代わりに、その目は私を温かく見守っているように見えた。
「ちょうど右肩の後ろにある、二つのほくろ、歯が二本少ない、へその横にある小さな傷、それに…利根川の川岸で拾われた」
私はいつの間にか駆け出していた。居間に二人残して、そのまま出て行った。階段を駆け上がり、自分の部屋に飛び込む。そしてタンスを力ある限り押し、ドアの前まで運んだ。
「深雪…」
下から切ない足音が聞こえた。そしてドアに手がかかる音がした。
「帰ってよ…ここは…私の家よ…出てってよ…」
「深雪…」
ドアノブから手が離れる音は、むなしく廊下を響かせた。
そして足音は次第になくなっていった。
私は泣きじゃくった。ベッドの上で丸くなり、自分のことを責めた。確かに彼らは、私の本当の親らしい。しかし、私を捨てたという事実は、私自身は彼らを受け付けなかった。なぜ私を捨てたのだろうか。子供が生まれてうれしかったはずなのに、なぜ捨てたのだろうか。捨てる理由など、どこにもない。
私も本当は心底うれしかったはずなのに、自分に素直になれなかった。そんな自分が憎かった。
しかし、ただ素直になれなかっただけではない。彼らを親だと認めてしまうと、今まで共に暮らしてきた父さんと母さんがウソのようで、遠い存在になりそうで、それだけが嫌だった。
一階からさびしくドアが閉じる音が響いた。
私は起き上がり、二階の窓から彼らを見送った。角を曲がるまで、彼らは振り向かなかった。おじさんはおばさんの肩に手を回し、自分のもとに寄せている。
私はその後ろ姿を見て、何も感じなかった。さびしい、悲しいと

いう感情は感じられなかった。ただ、その後ろ姿を、窓に頬をつけて見送ることしかできなかった。
二人の姿が見えなくなると、二人の感情がやっと分かった。それは喜びであった。
私はまだ、窓越しから二人が曲がった角を見ていると、突然、こちらに走って戻ってくる二人の姿が見えた。顔は恐ろしく、何か恐いものに追いかけられているような顔であった。
すると、その二人の後ろから二つの黒い車がやってきた。そして二人を車が挟んだと思うと、車から黒服の男が現れた。そして逃げ惑う二人を捕まえ、車に詰め込んだ。
「母さん、父さん…」
私の声はむなしく部屋に消えた。
そして部屋を出て、階段を降り、靴も履かずに外へ出た。
そこには、もう車も母さんと父さんの姿はなかった。残ったのは、車が走り去った音だけであった。
何が起こったかは分からない。一体彼らは何者なのか、そんなことはどうでもいい。彼らにまた会って、謝りたい。そしてたくさん話をしたい。
私はその場で立ち尽くすことしかできなかった。
そして暗闇は迫り、私の影を消した。

「ねぇ、まだお盆じゃないけど…」
「分かってる」
車に乗って三十分。俺は父さんに連れられ、墓石所までやってきていた。
墓石所に着くなり、父さんは速い足取りで、墓の間の道を進み、その後を俺が歩く。辺りはまだ夕焼けできれいに赤く染められていた。
そして毎年来ている、古葉家の墓の前まで来た。そこには母さんの骨も納められている。しかし父さんはその墓を通り過ぎ、さらに

奥へ進んだ。
「え、どこ行くの。通り過ぎちゃったよ」
「いいんだ。いいからついて来い」
十秒も経たないうちに、父さんは知らない墓の前で足を止めた。
「ここだ」
それは今まで見たことがない墓だった。
「何ここ」
父さんは無言で墓の前まで歩き、手を合わせた。そして顔を上げ、俺の方を振り向かずに言った。
「ここはお前の…本当の親の墓だ」
「え…」
そこには「新藤家」と書かれていた。
「父さん…母さん…」
俺は墓の前にひざまずき、墓をなでた。墓は夕焼けのせいなのか、まだ温かみがあった。父さんと母さんはこんなに温かかったのだろうか。俺は父さんと母さんに抱かれた時を想像した。そして俺は墓を抱いた。温かかった。しかしその温かさは、さっき触った時とは違った。肌に感じる温かみではなく、体の芯まで伝わる温もりであった。
死んでいたのには驚いたが、そんなことよりも、再会できた喜びの方がはるかに上回っていた。父さんの強さ、母さんの優しさが遺志として、墓から伝わってきた。
俺はそのままその温もりから離れたくなかったが、今日は会えただけでよかった。どんな形でも、会えたことはうれしかったのだ。
「また来ます。待っていてください」
そう言うと、俺は立ち上がり、墓に背を向けた。

その帰り、俺は父さんから、本当の父さんと母さんの死について教えてもらった。父さんは交通事故、母さんは肺がんによる死。それは衝撃であったが、俺はそれを聞けてうれしかった。それは、二

人とも俺を思っていたことであった。死んでしまったことは悲しいが、俺を死ぬまで大事にしてくれていたことが、なんともうれしかった。

そして深雪は、連れて行かれた実父と実母の話を聞いた。二人は昔、闇金からお金を借りて会社を興したが、すぐに倒産してしまったらしく、それでその際生じた借金がだんだん大きくなり、今は返しきれなくなって逃げていたが、今日、捕まってしまった。

そして深雪は自分が捨てられたわけを、そこで初めて知った。深雪の目からは次々と涙が出てくる。しかしその涙は悲しみなんかではなかった。喜びであった。自分を思っての思い切りのある決断は、そうはできない。しかもその上、深雪を見つけてくれるまでは、川岸のススキに身を隠していて、それまではずっとそこで見守っていたということだ。

深雪はまた会えることを信じて、仏壇の前で何かつぶやいていた。俺はその日の夜、なかなか寝付けなかった。つい父さんと母さんの顔を想像してしまう。父さんの話だと、父さんは一流の実業家だったらしい。しかしそんなことよりも、今まで実親がいたかいないかという心配が吹っ切れて、今は喜びに浸っている。

しかし深雪のことを思うと、そんな気は無くなってしまった。

風が去った後のように。

最終章　大志

あれから十八年経つ。毎年少しずつ、二人は変化を遂げてきた。互いに助け合い、励まし合い、そして成長した。そのことは誰が見ても、一目瞭然であった。本当の家族ではないというハンデを背負って十八年目。二人は本当の家族になりつつあった。そう、結婚という名のもとに。

「俺、大学に行こうかな」
「何、働く気でもあったの？」
「うん…ちょっとね」
バイトはしたことがあったが、働きに出る自分の姿を想像したら、不安が積もった。しかし働きに出なければお金は稼げない。
そして父さんは横から口を出した。
「どっちでもいいぞ、お前の人生だし」
新聞を一枚めくり、目線を新聞に戻した。

「どうしようかな…」
「何、アンタ。まだ悩んでんの」
母さんが死んだ日を境目に、深雪はよく俺の部屋に入ってくる。初めのうちは、励ましに来てくれていたのだが、今は違う。休みの日は、外へ遊びに行かない限り、一日の大半をここで過ごしている。
そしてそんな日を過ごしていくうちに、俺達には変わったものがある。俺達は恋に落ちたのだ。
家族ではないと分かったあの日以来、俺達は互いに意識し始めていた。そしてしばらくの間、俺達は近付くこともできなければ、話すこともできなかった。同じ部屋にいることもできなくて、後ろを歩くこともできなくて、隣に靴を置くことさえもできなかった。
しかしそんな状況で一年が過ぎると、ある事件は起こった。母さ

んが倒れたのだ。
そして俺達は知らないうちに口を交わすようになったが、血がつながっていないという事実は、決して忘れてはいなかった。
深雪は読んでいる雑誌をベッドの上に置き、背もたれにもたれながら、天井を見上げてつぶやくように言った。
「私達…これからどうなるんだろうね」
俺はその言葉に、素直に自分の心中に隠されている思いを言った。
「俺は…お前と、ずっと、永遠にいたい」
「…え」
深雪は戸惑った。俺も自分が何を言っているのかよく分からなかったが、言いたいことは合っていた。深雪と一生いたいのは事実だし、深雪がいてくれたからこそ、ここまでやってこれたと思っている。
しばらくの沈黙が流れたが、深雪はその均衡を破った。
「何、つまり…結婚…ていうこと？」
「…分かんない」
俺は頬が紅潮しているのが分かった。体中が熱くなり、深雪の方を見ることができなかった。
そして深雪は暗い声で言った。
「でも…できないよ…結婚なんて」
「え、何で」
俺の口から思いがけない言葉が出た。自分でもびっくりしている。俺は今、深雪と結婚したいと言っている。何を言っているのか、自分でもよく分からない。
しかし深雪はそのことに気付いていないようであった。
「だから、できないの。前、テレビで見たことがあるけど、兄妹間の結婚はできないんだって」
「へー…そうなの」
俺の体は一瞬にして冷めた。期待と希望が一瞬にして崩れたような感じだった。

不思議な恋をして、不思議な付き合いをして、俺らはいつもどおりの生活をして、それを通じて互いを好きになったはず。でも、思わぬ壁に当たってしまった。法律という壁に、俺達の人生はどう左右されるのであろうか。俺はそれだけが気がかりでしょうがなかった。

「でも、俺達は家族でもなければ兄妹でもないぞ…どうなんだろう」

「私に聞かないでよ。とりあえず、役所に正式な届けを出さない限り、大丈夫なんだって」

「そうか…あとは父さんか…」

「何それ。何か私がアンタと結婚するみたいになってんじゃん」

「え…ダメなの？」

「…ダメってわけじゃないけど…アンタのこと、好きだし、他に好きになれそうな男は…」

「ならいいじゃん。俺と一生一緒にいよう。お願いだ」

俺は部屋を出て、階段を降り、居間に向かった。深雪はついてこなかったが、その気持ちは俺でも分かった。

そして居間に入り、父さんの前に座った。

「父さん。俺達って、正式な兄妹なの？」

父さんは新聞をとじ、ぎょっとした目でこちらを見た。

「何を言ってるんだ。お前らは仮に兄妹で、本当の兄妹じゃないだろう」

「そういうことじゃなくて、市役所に俺達のこと、兄妹として届けたの？」

「ああ、そういうことか。役所から見ると、お前らは兄妹だよ。あの時は流れというか、勢いでそうしちゃったからな…」

俺はただ呆然としていた。終わった。そう思ったのだ。

「どうしたんだ、要」

「…なんでもない」

俺は魂が抜けたような体でゆっくり立ち上がり、居間を後にした。そして重い足取りで階段を上がり、鉛でできたようなドアノブを、

力の抜けた手で握った。
深雪はベッドの上に座り、こちらを睨んでいた。
「アンタ…さっきの…告白だったの？」
「…取り消し」
俺はイスに座り、大きなため息をついた。
「ああ、私達って兄妹だったの。それはいいとして…アンタ、告白だったら、もっといい場所で、いい言葉を用意しなさいよね。あんなんじゃ、私ですら落とせないわよ」
深雪は少し照れていた。頬を掻き、俺から目をそらし、頻繁に首を動かした。
「分かったよ。それは俺達の問題が解決してからだ。待ってろ」
「待ってる」

俺達の関係を知っているものは、めったにいない。これからも友達とかには、この関係を教えるつもりはない。特に理由はなかったが、人との秘密の共有は楽しかったからだろう。
そして俺達は、これからの人生を考えた。とりあえず、俺と深雪は大学に行くことにした。そしてその間、結婚するにはどうするかを考えることにした。
俺達の運命は、これからどうなるか分からない。十年後、二十年後、俺達はどうなっているかは分からない。結婚しているかもしれないし、もしかしたら、他の異性とくっついているかもしれない。ただ、今の俺達には、今をひたすら生きることと、未来を想像することしかできなかった。そしてその想像を現実にするために、日々、考えることしかできなかった。
人生は切り開くもの。ただ、そう信じることしかできなかった。
これからの人生、どうなるかは誰も知らない。知っているのは未来の自分だけ。俺達はひたすら未来を求めて走っていくだけしかできない。止まったり、引き返すことは許されない。
これが俺達の生きていかねばならない道ならば、歩いてゆこう。

そして俺達の手で、未来という扉を開こう。何枚も、何枚も扉があっても、くじけてはいけない。一人で開けられない扉があるならば、開こう、同じ道を歩く人と共に。

最終章　大志（後書き）

これからの参考にしたいと思いますので、良かったら感想をお願いします。よりよい作品作りにご協力ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6251c/

この空の下で

2010年10月8日15時56分発行